2010 8



Architecture and Society
建築と社会

特集/再生・受け継ぐ・繋がる

日本建築協会

ASLOC 斬新なデザイン表現を可能に！

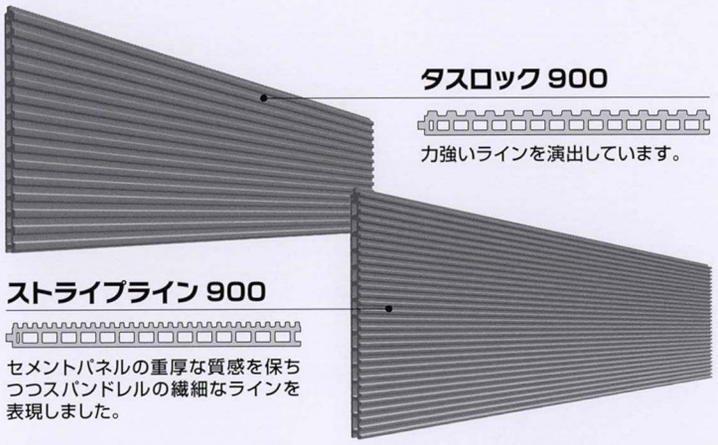
Design Panel 900

10月出荷！

ダイナミックな壁面構成を可能に！

新発売のデザインパネル３品種は、
ダイナミックな 900 幅タイプの新バリエーションとして、
アスロックの魅力である『重厚感』を楽しんで頂けます。
「タスロック」「ストライプライン」のデザインは
600 幅シリーズでも御好評を頂いており、
900 幅での新ラインナップを熱望されてきました。
新デザインの「シェイドロック」は
専用設計（意匠登録出願中）を行い、
射光による凹凸の陰影が壁面全体を
立体的・幻想的に表現します。

40th アスロック 発売40周年

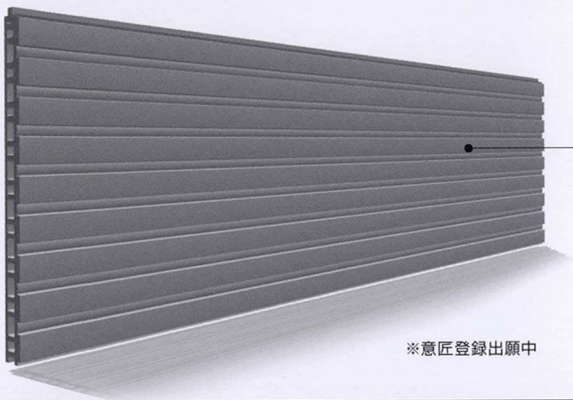


タスロック 900

力強いラインを演出しています。

ストライプライン 900

セメントパネルの重厚な質感を保ちつつスパンドレルの繊細なラインを表現しました。



※意匠登録出願中

900 ORIGINAL DESIGN

シェイドロック 900

リブ底を山形にすることにより、影のつき方をより明確にし、錯覚的にリブが浮き出た様に見えます。



これらの商品は１０月の出荷開始となりますのでご注意ください。

やすらぎと安心の創造

札幌支店 ☎ 011-261-8291　仙台支店 ☎ 022-225-7986　東京支店 ☎ 03-5540-6711　名古屋支店 ☎ 052-541-5700
関西支店 ☎ 078-391-1651　広島支店 ☎ 082-245-3257　九州支店 ☎ 092-474-0868　本　　社 ☎ 078-333-4111

〒650-0035　神戸市中央区浪花町15番地　http://www.nozawa-kobe.co.jp

不燃建材のリーダー 株式会社ノザワ



エコマーク認定置敷ビニル床タイル

REFINEBACK® EXA

リファインバックエグザ

CO2 −13% by RECYCLED BACKING
塩ビバッキング層のリサイクルによるCO2削減量※

＋

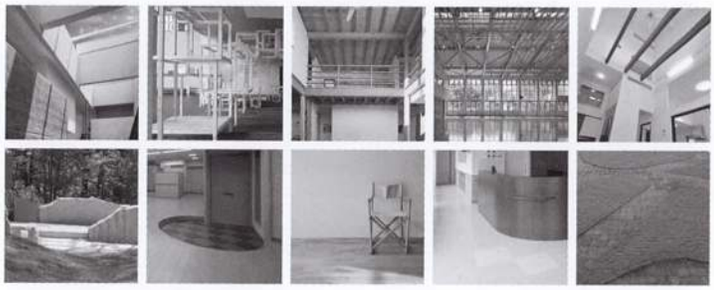
CO2 −8% with GREEN ENERGY
グリーン電力使用によるCO2削減量

株式会社川島織物セルコン
www.kawashimaselkon.co.jp
広告のお問い合わせはマーケティンググループまで
03-5144-3892 9:00AM～5:00PM（土、日、祝日、特別休日を除く）

インテリア業界初、「エコ・ファースト企業」に認定されました



私の空間作法
日本建築協会■会員作品特集
2010



作　品　募　集

「建築と社会」平成23年１月号の

「第17回会員作品特集号“私の空間作法”」

「建築と社会」１月号では会員作品発表の場として、**“第17回会員作品特集号・私の空間作法”**を企画しております。対象は、建築、ランドスケープデザイン、インテリアデザイン、まちづくり、アート等、建築に関わるすべてとし、表現方法は、写真、CG等の別を問いません。
みなさまの個性あふれる作品の応募をお待ちしております。

※

■提出資料

作品は、竣工作品、計画案を問いません。下記要領に基づいてお送り下さい。

1．写　真　外観・内観・ディテール・模型写真等のプリント
（サイズはキャビネ判程度、５～６枚）
2．CG等　パース、コンセプト図等
（パースの写真撮影等は致しかねますので、印刷原稿となる状態でお願いします）
3．概　要　作品名称、所在地、設計者、施工者名、建築面積、延床面積、構造規模、工期など。
4．説明文　作品についての考えを300字程度にまとめて下さい。

■掲載に際しての補足

1．掲載料は無料です。誌面は白黒ページとなります。
2．写真の撮影者名は必ず付記願います。
写真に著作権等が生ずる場合は、応募者にて処理願います。
3．掲載頁数は、原則として１社（１人）１頁とします。また、8月末までに竣工予定の作品を掲載希望の場合、写真等の原稿期日は配慮致しますので、ご連絡下さい。
4．建物の特徴や特殊な事柄については簡単な補足説明をお願いする場合があります。
5．作品の掲載順及び誌面レイアウトを含む特集全体の構成は、委員会にて担当致します。また、応募作品多数の場合等は、編集の都合により掲載できないこともありますのでご了承下さい。

■原稿期日及び送付先

1．期　日　**2010年9月30日(木)必着**
2．送付先　社団法人 日本建築協会編集委員会
「会員作品特集号」係
〒540-6591　大阪市中央区大手前1丁目7番31号
大阪マーチャンダイズ・マートビル7階
TEL. 06-6946-6981　FAX. 06-6946-6984

㈳日本建築協会東海支部
復活50周年記念講演会

建築と都市の未来を語る

東海支部が復活して50年。
日本の都市は…
東海地方における名古屋は…
われわれは、新しい時代の都市モデルを描けるか?

詳細は
日本建築協会東海支部ホームページ
http://www.aaj-tokai.jp/
をご覧ください。

と　き：2010年10月2日（土）
14：00〜16：30
（13：45開場）
ところ：電気文化会館5階
イベントホール
名古屋市中区栄2-2-5
TEL052-204-1133
入　場　無料
定　員　250名　要予約
（日本建築協会東海支部ホームページ　http://www.aaj-tokai.jp/）
問合せ　日本建築協会東海支部　大木（TEL052-261-1451）まで

【スケジュール】
■基調講演14：05〜15：10
「都市の拡大から集約へ
―インテンシブ・シティ―」
講師：若山滋（中京大学客員教授　椙山女学園大学客員教授
■対談15：20〜16：20
「50年後の建築、都市はどうなるのか」
若山滋×水尾衣里（名城大学人間学部教授）



若山滋（わかやま　しげる）
1969年―東京工業大学建築学科卒業
1974年―同大学院博士課程修了
工学博士
1974年―㈱久米設計勤務
1983年―名古屋工業大学助教授
1989年―名古屋工業大学教授
2010年―現職



■水尾衣里（みずお　えり）
大阪芸術大学建築学科卒業、関西大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了
名古屋大学大学院工学研究科建築学専攻博士後期課程満了　工学博士
1990年―名古屋女子文化短期大学勤務
2004年―名城大学人間学部助教授
2010年―名城大学人間学部教授

建築と社会

Architecture and Society
2010
No.1061
日本建築協会
8

■特集予告
9月号／第57回青年技術者
10月号／建築ストック社会の現在と今後

編集委員会(平成22年度)

■副会長
本多　友常
松村　孝治
■編集担当理事
浅野真一朗
上原　正行
木戸　徹
佐藤　栄一
◎設楽　貞樹
竹中　統一
立成　良三
吉村　英祐
■副委員長
米井　寛
勝山　太郎
■特集小委員会
■計画分科会
★計画系
△飯田　匡
鈴木　克彦
田中　直人
高橋　和也
紅谷　昇平
松田奈緒子
三宅　次郎
守井　辰
吉村　英祐
★建築計画系
荒木　宏之
奥村　朋孝
菅野　忠司
神戸　嘉也
木多　彩子
楠　敦士
静　茂夫
△下坂　浩和
所　千夏
野田　隆史
桃杷　健一
松森　織江
米山　剛史
★インテリア・住宅系
小倉　一平
加藤　力
△神谷　浩司
黒柳　亮
田中　浩介
戸井賢一郎
ベリー史子
間渕　一博
■構造分科会
秋田　智
△石田　大三
岸本　光平
小芝　淳一
志摩　好宣
瀧野　敦夫
角田　耕一
雛波　尚
橋本　宗明
松村　健
向井　洋一

■設備分科会
△赤澤　正治
梶井　宏修
北野　勝也
谷野　太志
夏井　重行
雛波　利幸
橋本　直樹
福谷　周
桝井　貴廣
宮崎ひろ志
村上幸三郎
渡邊　裕之
■施工材料分科会
桜井　和男
中川　恒
平田　茂良
藤丸　啓一
山岡　篤人
△吉田　正友
■法令分科会
近都　学
河野　学
田上　幸二
西林　浩一
濱崎　秀和
山上　佳之
△吉田　純
鷲尾　真弓
■作品作風小委員会
居内　章夫
○池上　明
稲垣　和江
井上　雅祐
加嶋　章博
倉橋　朗仁
倉渕奈千子
澤田　純一
戸川　勝之
鞆野　淳司
豊田　充広
鳥居　久人
西田　佳代
芳谷　晴彦
増田　敬彦
山田　俊紀
■広告企画小委員会
上田　訓将
宇城　英彦
江本　孝弘
永平　達也
○前田　衛
南澤　浩司
森川　幸信
■10年委員会
赤木　隆
門野　陽
川上比奈子
熊田　将男
清水　健司
△菅原　幸也
△中村　文紀
○前川　治彦

◎委員長　○副委員長　△幹事

印　刷　2010年7月25日
発　行　2010年8月1日
発行人　社団法人日本建築協会
発行所　社団法人日本建築協会
　　大阪市中央区大手前1-7-31
　　電　話　06-6946-6981
印刷所　㈱NPCコーポレーション
定　価　1200円〔税込〕

Journal of the Architectural Association of Japan

特集●再生・受け継ぐ・繋がる

■総論

京都から―“つなぐ”時代のまちづくりデザイン―●三村浩史 ―― 12

■各論

歴史的建造物の保存修理と今後の展望●平井俊行 ―― 14

まちづくりと連携した市街地型住宅団地再生をめざして
―京都堀川団地における取り組みと展望―●髙田光雄 ―― 16

再生・受け継ぐ・繋がる●上杉秀隆 ―― 18

京都の都市景観を色彩の側面から●村上幸三郎 ―― 19

庭園の再生　長岡天満宮『錦景苑』●山田昌次 ―― 20

曳山から考える伝統木造建築の耐震性●西澤英和 ―― 22

ものづくり都市・京都まちづくり工業教育から●道越隆夫 ―― 24

日本的な空間への試み●馬庭　稔 ―― 26

伝統木造構法を未来につなぐ●木下孝一 ―― 28

会告	第17回会員作品特集号“私の空間作法”作品募集. ㈳日本建築協会東海支部復活50周年記念講演会　建築と都市の未来を語る	1
作品作風	京都府家庭支援総合センター・京都府東山警察署庁舎	4
	太陽生命京都ビル	6
研究の風景	南泰裕研究室●国士舘大学理工学部建築学系	8
gallery	気配の形成●山口尚之	10
法令コーナー	「京都市建築物安心安全実施計画」の策定●髙木勝英	31
設備の頁	LED照明の普及状況と今後●竹中祐二	32
再読 関西近代建築	南海ビルディング［南海ビル］●山形政昭	33
このまちが好き	雑多な風景と小さな寄り合い場 ―カマン！メディアセンターの日常●平川隆啓	37
関西の建築界群像	中西重裕●古谷隆祥	38
information	「札幌聖ミカエル教会とアントニン・レーモンド展」―三重大学レーモンドホールと木造モダニズムの系譜―. 展示会「ENE-WAY2010」開催. UCFA設立記念企画第1回ニッポン建設映像祭. 竹中大工道具館開館25周年記念巡回展 棟梁～堂宮大工の世界～.「新発見!なにわの考古学2010」.「大和百景―館蔵品で巡る奈良・大和路―」. きる、折る、建てる 飛び出せ紙ワザ 茶谷正洋・亜矢折紙建築展. デイヴィッド・アジャイ展OUTPUT. 松伯美術館「未来へつなぐ花鳥画」. 日米メキシコ交流400周年記念「古代メキシコ・オルメカ文明展 マヤへの道」. 2010イタリア・ボローニャ国際絵本原画展と〈特別展示〉タシエス. 兵庫県立美術館で「水木しげる・妖怪図鑑」.	40
月間の動き	平成22年6月分	43

本文　デザイン　高橋善丸

今月の表紙
企画　間渕一博　企画・写真・デザイン　花城辰男

～涼むまちなみ～

江戸時代に茶店や見世物から発展した川床は、明治に入ると、川の浅瀬の真上や橋の下などへも範囲を広げたといわれます。
治水工事により高床形式のみが主流となった現在も、河原で涼む風習は受け継がれ、「仮設的な奥庭」となっている点が興味深いところです。　（間渕一博）

京都市中京区橋下町



所 在 地――京都市東山区清水4-185-1他
敷地面積――家庭支援総合センター：4,076.09㎡、東山警察署庁舎：4,970.53㎡
建築面積――家庭支援総合センター：2,442.52㎡、東山警察署庁舎：2,576.84㎡
延床面積――家庭支援総合センター：5,770.39㎡、東山警察署庁舎：6,096.41㎡
構造規模――家庭支援総合センター：RC造、地上３階、東山警察署庁舎：RC造 一部S造、地上２階、地下１階
工　　期――2008年10月～2010年３月
最 寄 駅――京阪　清水五条
撮　　影――酒井文明（SS大阪）

作品

建築主　京都府・京都府警察本部
設　計　東畑建築事務所
監　理　ゆう建築設計
施　工　建築：公成、ディー・エー・シー、日産特定建設工事共同企業体
　　電気：岡崎電工、昌和電気　機械：影近設備、日本管工業

京都府家庭支援総合センター・京都府東山警察署庁舎


東山警察署


東山警察署ロビー


家庭支援総合センター

■全体計画

老朽化、狭隘化による移転建替を行う東山警察署、および家庭問題に関する総合的な支援機関として、各相談所を統合した家庭支援総合センターとの合同整備計画である。開かれた警察とプライバシーを最重要視する支援センターという相反する性格をいかに併存させるかが最大のテーマである。前庭を設け、エントランスの正対を避けるとともに、前庭～ピロティ～エントランスの構成とすることにより、視線の交錯を和らげている。

敷地は京都市の歴史遺産型美観地区であり、最高高さ12M、すべての建物に原則瓦屋根をかけることなどが義務付けられている。奇をてらうことなく、景観規制と施設機能の融合を図り、今後継承されていくべき都市景観の先導的役割を果たすことを目指している。　（中村文紀）

■家庭支援総合センター

家庭支援総合センターは、家庭問題に関する総合的な相談支援機関として、児童相談所、婦人相談所（配偶者暴力相談支援センター）、知的障害者更生相談所、身体障害者更生相談所の相談機能を統合し、母子生活支援施設（東山ファミリーホーム）を併設する。併せて少年非行等の相談機能強化を図る警察本部の少年サポートセンターを整備するものである。利用動線や見合いなど施設それぞれ特有のセキュリティやプライバシーにきめ細かく配慮した。内部空間は安らぎ、温もりのある「住」としての質感、スケール感の創出を図った。　（敷野由紀子）

■東山警察署庁舎

東山警察署の設計テーマとして、「力強い警察」と「開かれた警察」の両立を掲げている。府民の利便性向上、警察活動の効率化を図るとともに、京都有数の観光地、歓楽街を管轄するにふさわしい高機能庁舎を目指すものである。本体棟、付属建屋も含め、全ての建物にいぶし銀の瓦屋根をかけ、古都にふさわしい群造形としている。原則全ての窓に木質感のある格子を設置し、防犯、プライバシーおよび景観に配慮した。１階にゆったりとしたピロティ空間を設け、エントランスを配し、「開かれた警察」を印象づけている。内部では、バリヤフリー基準を遵守し、来庁者と職員の動線を明確に分離するなど使いやすさとプライバシーへの配慮を徹底した施設計画としている。　（藤村　禎）




大陽生命

作品集

建　築　主　太陽生命保険株式会社
設計・監理　大林組大阪本店一級建築士事務所
施　　工　大林組

太陽生命京都ビル

街と繋がる建築

事業主にとって２度目の建て替えとなる今回は、東側隣地を買い足しての新築工事である。計画に際して、地域にとってこれからも良き隣人でありたい、また喜ばれる新築としたい、の２つの願いが伝えられた。同時に、事業主にとって全国で唯一の地下鉄連絡口を有するビルである事、烏丸仏光寺交差点に立地する事、これら２つの特性を十分に利した計画が求められた。

新しい景観条例により、大通りに面するビルはその背後で高さ15m以下の街並みと隣り合う。角地に建つ条件では、大通りのファサードがそのまま廻り込むと、隣り合う街並みと大きな断絶が生じると考えた。オフィスビルとしての品格と街並みとの調和を実現する事で、事業主の期待に応える事を目指した。

東側隣地の町屋の屋根軒先と高さを揃えたラインを境に、高層部と低層部で異なる役割を与えた。高層部はタイル張りの壁と彫りの深いポツ窓とし、烏丸通に面するオフィスビルの品格を表現し、同時に西面の熱負荷低減に配慮した。

低層部は通りのスケールに応じた顔作りとした。事業性との天秤の中、２層吹抜のエントランスピロティを敷地コーナーに設ける英断がなされた。そこに、地下鉄連絡階段・ビル玄関・１階貸室玄関・２階貸室専用階段の４つのアクセスを集約し、立地特性を特徴と魅力に転化した。

仏光寺通に面して、２階への直通階段とテラス、ガラス張りの喫煙室、消防協議により実現した透明な地下鉄連絡階段、黒ルーバーで覆われた駐輪場など、小さなスケールの要素を配置し、古い街並みの持つスケール感に配慮した。一方、烏丸通では、日常の往来が多いため１階ガラス面を後退させ、逆に２階のガラス面を張り出すことで、歩行者目線での強い印象を与えると同時に、貸室の眺望を向上させている。また、エントランスピロティは、狭く交通量の多い仏光寺通への抜け道や信号待ちの場所として開放され、利便性と安全性の向上に寄与している。

奇をてらった表現よりも、街との繋がりを丁寧に読み解き、コミュニティの一部として役割を果たす事が、この建築に求められていると信じている。　（井上雅祐・松井宣明／大林組）

所 在 地――京都市下京区烏丸仏光寺
敷地面積――　787.71㎡
建築面積――　675.53㎡
延床面積――5,765.54㎡
構造規模――S造、地上８階、地下１階
工　　期――2008年８月～2010年01月
最寄り駅――地下鉄四条駅
撮　　影――河合止揚（アトリエリベラ）　寺﨑健（SS大阪）※



烏丸通り側外観


仏光寺通り東側からの外観（隣家との関係性）




２階テラス（貸室玄関・喫煙室）※



配置図兼１階平面図　S：1/800


２階貸室※


３層吹抜けの光庭を持つ地下エントランス※

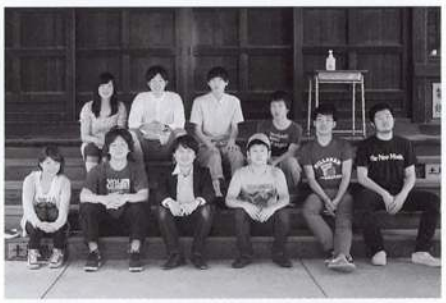

エントランスピロティ（貸室より仏光寺通を臨む）


エントランスピロティ見返し※

研究の風景

国士舘大学理工学部建築学系

南泰裕研究室



1　研究室の集合写真

国際展覧会からのスタート

国士舘大学南研究室は、2007年４月にスタートした、建築意匠・計画系の研究室である。開設早々、国際展覧会への参加に恵まれ、所属する学生たちとともに海外へと渡り、のっけから濃密な研究室活動が展開されることになった。2007年の５月から７月にかけてポルトガルで開催された、リスボン国際建築トリエンナーレである。

この国際展で私たちは、名古屋工業大学北川研究室を始めとする他大学の研究室や建築家、アーティストなどとともに、「アーバン・ヴォイド」という共通テーマのもと、日本セクションの１チームとして２ヵ月にわたり参加・展示を行った。私たちの研究室は、ここで＜多数性としての東京＞というコンセプトを立て、東京の都心から様々な要素を抽出し、それらを重ね合わせて行く先で、あたかも星座のようにちりばめられた、多次元的な「アーバン・ヴォイド」の様相を浮かび上がらせてみた。

研究室のメンバー全員が、10日間あまりにわたってポルトガルに滞在し、アルヴァロ・シザが設計したポルトガル・パヴィリオンで展示をさせていただけた経験は大きかった。ここで海外の多くの人に鑑賞いただき、評価していただけたことは、私たちに確かな手応えをもたらしてくれた。この時は同時に、リスボン工科大学と国際合同ワークショップを行ったり、ポルトガルの現代建築を見て回るツアーなども同時に企画したりと、研究室の活動としては、これ以上にない豊かなスタートを切った。

さらに帰国後には、新宿パークタワー内にある「オゾン」の展示スペースにて、他大学や建築家、アーティストたちとともに帰国展を開催し、新しいコンテンツを加えた総合展示を行った。新宿パークタワーが丹下健三の設計であることを思えば、アルヴァロ・シザと丹下健三という二大巨匠建築家の建築作品内で展覧会をさせていただけたことは、またとない希有な体験となった。

これらの活動はその後、トリエンナーレの公式ガイドブックの他に、『10+１』48号（INAX出版、2007年）や『空想 皇居美術館』（彦坂尚嘉・五十嵐太郎・新堀学編著、2010年）にて、活動内容の一端を掲載いただき、研究室活動の端緒を示唆することになった。

都市へのまなざし

私自身は、京都大学を卒業した後、東京大学大学院の原広司研究室に進学し、そこで修士課程と博士課程を過ごしながら、都市と建築をめぐって、原先生から多くを学んだ。大学院時代には海外の集落調査に参加する傍ら、有志の研究者たちと都市の調査や研究会などを頻繁に行っていたが、何よりもこのときの最も大きな衝撃は、原先生の、都市に対する独自の思考に触れたことだった。

進学して初めての研究室会議で、「対象よりも方法なのだ」と先生が強い口調で語ったことに、まずもって強烈なカルチャーショックを受けた。そして、他の誰よりも建築と都市から遠い場所から、それらを鋭く逆照射する原先生の思考方法には、常に驚かされ、刺激を受け続けた。

「住居に都市を埋蔵する」という原広司のフレーズが、そうした思考方法の独自さをすでに十全に語っているが、原先生は、情緒的な視点から都市を主観的に語るのではなく、そうしたことの意義を知悉した上で、都市自体をあたかも鉱物の塊を分析するように、冷えた透徹した視線で捉え直そうとしていた。言わば文学と工学を併せ持ったその複眼的な思考法に、私自身、その後大きく影響を受けることになった。

そうした蓄積の延長で、大学院時代より関心の照準を当てていた、「社会組織としての都市」というまなざしを進展させ、小都市やコンパクトシティ、あるいは都市空間単位というものが、私たちの研究室における研究テーマ群として掲げられている。これらは主として東京を対象としており、例えば新宿における広場的空間の研究や、千代田区におけるアーバン・ヴォイドの研究、あるいは東京における集合住宅の研究などがこれまで進められてきた。

こうした東京研究と同時に、海外の都市（リスボン）や地方都市（川越）等も視野に入れ、実地調査を踏まえつつ、「メガロポリスに対置する、小さな都市のあり方」という研究主題をより幅広く追究していくことに主眼が置かれている。

2009年度からは、これらに加えて、都市への地理学的アプローチによる研究を試みており、昭和女子大学杉浦研究室、および日本大学山中研究室との合同ゼミにより、「地形としての東京」という視点から共同研究を行った。このときの成果は、日本建築学会の『建築雑誌』2009年10月号にて、「東京新地形論」という特集の形にまとめられている。

建築デザインへの参画

都市へのまなざしが事物の抽象的読解であるとするならば、建築の創造は事物の具体へと肉薄し、空間の成り立ちを細やかに



2　リスボン国際建築トリエンナーレ展の会場風景



3　「多数性としての東京」概念図



4　リスボン建築トリエンナーレの帰国展

解きほどいていく作業である。この両輪をもって初めて、都市と建築という二つの次元を横断し得ると思うが故に、私たちの研究室においては、「建築を創ること」の手応えを、絶えず確かめることを意識している。そのため、アイデアコンペや実施コンペにコンスタントに応募し続けており、学生による自主的なコンペ参加も推奨している。

また、私自身の建築設計プロセスを解説しながら、住宅の現場見学会や建築見学会等を積極的に行うことで、「モノとしての建築の確からしさ」へと絶えず立ち戻り、建築意匠論を探求する手助けになることを考慮している。

そうしたスタンスのもとで、年に数回程度、研究室にてオープン・コンペに参加し、敷地調査からブレーン・ストーミングを経てコンセプトワーク、スタディ、基本設計からまとめへと至る一連の流れを学習することで、建築をめぐるデザイン力を鍛え、発想の展開力を絶えずトレーニングするよう、心がけている。

こうしたコンペとは別に、より身体に即したデザインの技法として、竹や段ボールなどを使った、セルフビルドによるオブジェの制作やワークショップも随時行っており、「空間的なアイデアを、いかにモノへと転写させ、実現させるか」という建築デザインにおける基本的な課題に継続的に向き合っている。それら諸々の延長で、これまでに、建築家による作品の空間分析や、仮設建築の研究、京都における町家の意匠研究等が、建築意匠の研究論文として生産されている。

このように、都市と建築の両面に触れることで、建築の「理論と実践」（またはアルケーとテクネー）を強靭に架橋する力を身につけ、それを社会へと投企して、「社会の中の、モノとしての建築」という手応えを感じ取ること。そのことが、私たちの研究室においては求められている。

近年は特に、環境を主題とした建築空間の創作や、リノベーションを考慮した建築空間のあり方が、富みに重要視されるようになっており、そうした観点から研究室で応募したコンペ案が、入賞したりもした。今後はますます、そのような環境論的で操作論的な建築の創作技法が、研究の対象となっていくものと予測される。

地域とのかかわり

私たちの研究室活動の主軸をなすもう一つの特徴は、開設以来、地域とのかかわりを通じた活動を、継続的に行っていることである。その一つは太宰府建築ワークショップで、これは九州の国士舘大学太宰府キャンパスにて、毎年夏に行っている、地域交流の活動である。私たちは毎年、学生たちと福岡および太宰府を訪れ、地元の方々や子供たちをキャンパスに招いて、竹や段ボールを使った制作物を協働で作り、それらを披露する、というイベントを行っている。東京からすれば遠隔地であることから、活動を継続するにはいろいろと大変な面も多いが、ここ数年は九州大学を始めとする大学の先生や地元の学生も参加して下さっており、ささやかながら地域交流と振興の一助となれば、と考えている。

2009年度には、自治体からのお誘いを受けて、東京都町田市でのまちづくり活動に研究室として参加した。このときは、町田市の玉川学園地区を対象に何度かのフィールドワークを行い、地元のまちづくり団体のみなさんと交流しながら、まちづくりのための様々な空間的提案をさせていただいた。おかげさまでこれらの提案は、町田市全体の発表会において、地元のみなさんにもそれなりに評価いただくことができた。この、町田市におけるまちづくり活動への参加は、自分たちの研究活動が机上の空論のみで終止しない可能性を与えていただけたという意味で、きわめて有意義な経験だった。

さらに2010年度からは、研究室活動の一貫として「建築系ラジオ」というものの配信と交流に、積極的に参加している。これは、仙台・東京・名古屋・九州と日本の各地にいる建築家や建築研究者が主要なネットワークを作り、ポッドキャストによる音声配信をしているインターネット・ラジオである。この建築系ラジオでは私がコアメンバーの一人になっていることから、学生たちにも地域との交流に参加してもらえば、と思い、これまで様々な試みを行っている。結果、はからずも建築系ラジオは、日本のあらゆる地域との交流を行う媒体となりつつあり、大学と世代の垣根を越えて、今なお緩やかな広がりを見せている。

凝縮と拡散

振り返れば、その起点において海外へと飛び、国際展を通して様々な人々との交流から研究室活動が始まったことは、象徴的なできことであったように思う。そのときの流れが、現在は建築系ラジオという形になって継続しており、それは「より遠く、より広く」という遠心力に応じた、拡散への志向と言える。

しかし一方で、建築を生み出すには、そこに込める強度がきわめて肝要であることも、また真実である。多くの雑音を遮断し、思考を研ぎすませて新しく発見的な概念を生み出し、人の心を打つような、未だ見ぬ空間を現出させること。建築空間の創出に立ち会っている瞬間には、誰もが何かしらそうした手応えに触れている。それは、「より深く、より濃密に」という求心力に基づいた、凝縮への意志と言っていいだろう。

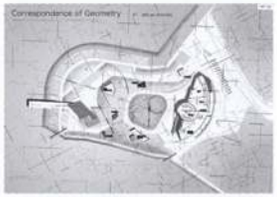
その、凝縮と拡散の絶えざる往還運動から、建築を通して、世界に行き届く知の切片を、わずかでも生み出そうと思考／試行し続けること。

私たちの研究室は、これまでもこれからも、そうした活動の協働者が集う、豊かな創造の場所でありたい、と思っている。

（文責：南　泰裕）



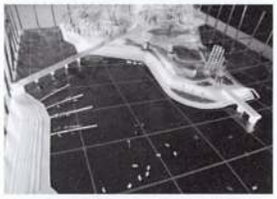
5



7



6



8



9



10



11

5　「東京新地形論」における、渋谷の仮想地形のイメージ
6　佳作入選した、Energy Leavesという環境ユニットの提案
7　「市原市水と彫刻の丘」コンペ案のドローイング
8　「市原市水と彫刻の丘」コンペ案模型
9　太宰府建築ワークショップの活動風景
10　町田市まちづくりにおける空間アイデアの提案
11　町田市まちづくりにおける、マスタープランの提案

気配の形成

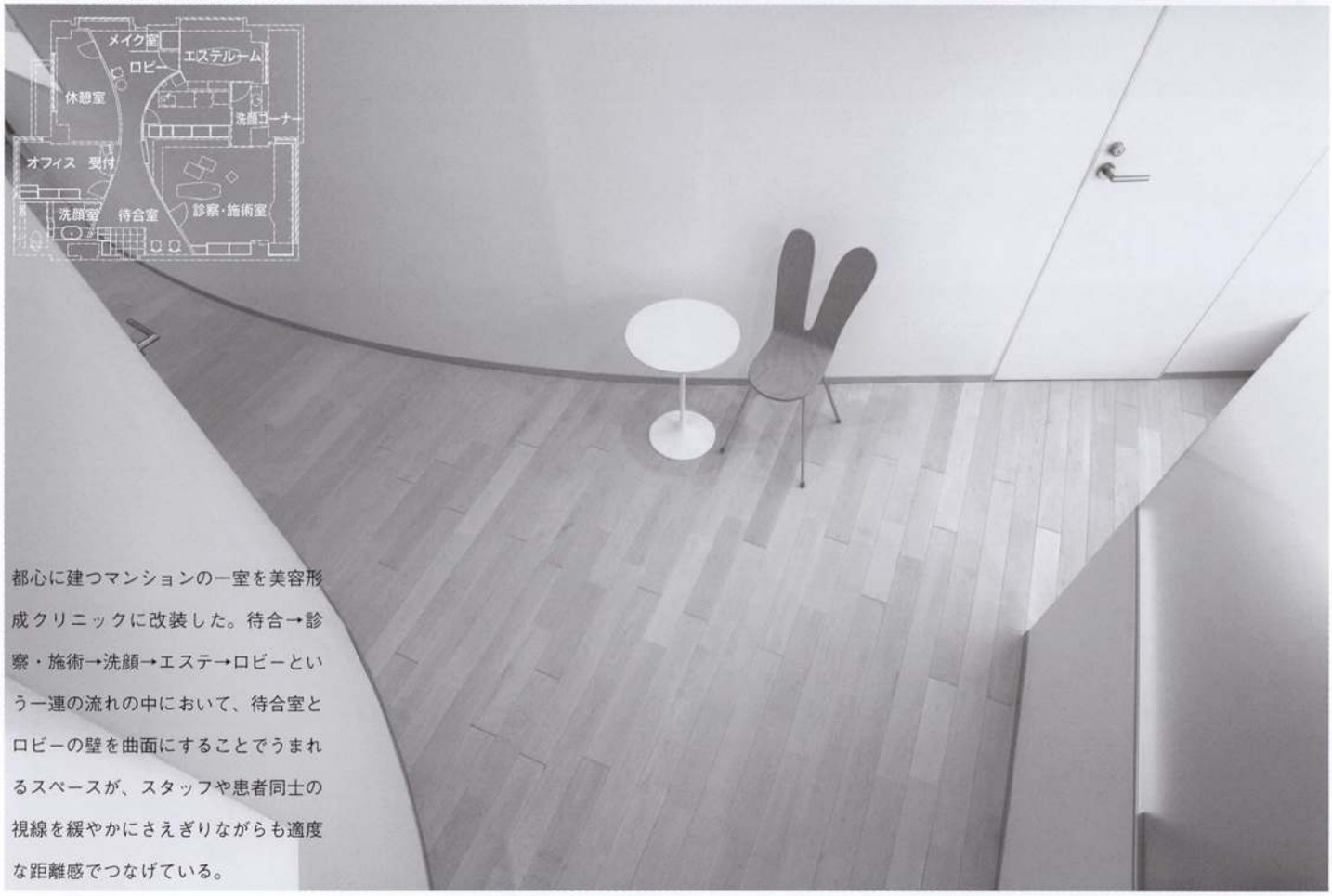
建築家
山口 尚之



山口尚之（やまぐち なおゆき）

1967	京都市生まれ
1993	東京工業大学大学院建築学専攻修了
～99	ワークステーション勤務
1998	タステン共同設立
2002-03	文化庁派遣芸術家在外研修員として、荒川修作＋M.ギンズ（ABRF）に師事
2006～	タステン アーキテクツ主宰 www.tasten-arch.com

企画編集　加嶋章博(作品作風小委員会)



都心に建つマンションの一室を美容形成クリニックに改装した。待合→診察・施術→洗顔→エステ→ロビーという一連の流れの中において、待合室とロビーの壁を曲面にすることでうまれるスペースが、スタッフや患者同士の視線を緩やかにさえぎりながらも適度な距離感でつなげている。

特集

再生・受け継ぐ・繋がる

「伝統」は絶えず創造を加えながら受け継ぐことといわれますが、京都ではその実践例の多さに驚かされます。

次代に伝えようとする使命感の強さや、形になったとき、革新され、工夫されたあとを発見して、深く感じ入ります。これは多くの方の認識でもあろうかと思い、京都支部特集を企画するにあたってのテーマとしました。ただし、テーマのなかに「繋がる」を加えています。日本的建築は自然との調和、絶妙のバランスからうまれたと思っていますが、自然以外に周辺の街並みや地域社会との調和・バランス=繋がるも大切なキーワードだと考えてます。

全国の皆様に、京都からの発信を爽やかに受けとめていただけましたら幸いです。

京都支部長　上林研二

■総論

京都から―“つなぐ”時代のまちづくりデザイン―●三村浩史

■各論

歴史的建造物の保存修理と今後の展望●平井俊行

まちづくりと連携した市街地型住宅団地再生をめざして
―京都堀川団地における取り組みと展望―●高田光雄

再生・受け継ぐ・繋がる●上杉秀隆

京都の都市景観を色彩の側面から●村上幸三郎

庭園の再生　長岡天満宮「錦景苑」●山田昌次

曳山から考える伝統木造建築の耐震性●西澤英和

ものづくり都市・京都まちづくり工業教育から●道越隆夫

日本的な空間への試み●馬庭　稔

伝統木造構法を未来につなぐ●木下孝一

（撮影：花城辰男）

企画　㈳日本建築協会京都支部特別編集委員：上林研二・山田昌次・長瀬博一・山口　明

総論

京都から —“つなぐ”時代のまちづくりデザイン—

(財)京都市景観・まちづくりセンター理事長
京都大学大学院名誉教授
三村浩史

いま、地域まちづくりの世界では“つなぐ”というキーワードが流行っている。既成の人間関係や共同規範の希薄化に対して、現代のネットワークを活かして新しい共生と協働の関係を構築しようという意識がその背景にある。

京都市住宅マスタープラン（3月）は「京都では人と人がつながり、自然を生かし、良いものを見極め、大切に守り、手入れをしながら積み重ねられてきた住まいやまちの文化があります」として、「人がつながる、未来につなぐ京都らしい住まい・まちづくり」を方向付けている。

また、日本建築学会大会（9月）でも、メインテーマは『つなぐ—継承と創生』である。「建築をよりよい方向へ導き発展させるために、先人たちの築いた建築と文化をしっかりと『継承』し、絶えることのない「創生」の力で未来へ「つなぐ」ことを考えていきたい。「つなぐ」とは、歴史をつなぎ、地域をつなぎ、ひとをつなぐこと。これまでの専門家を中心とした建築学会の活動を社会に向けて広げ、オピニオンリーダーとしての役割を存分に活かし世代をつなぎ、市民と専門家をつなぎ、建築の各分野をつなぎ、次の世代への展望を大いに語り合いたい」と、私たちに自覚と行動を促している

■京都の歴史的景観をつなぐ

世界遺産や文化財に指定されている建造物やサイトは、法人や公共により保護されている。まわりの三山も自然緑地地区等として保全されてきた。さらに2007年の新景観政策は、都市空間の在りよう全体を公共資産ととらえ、かつ地域別の景観特性について「山麓、山並み背景、旧市街地、岸辺、歴史遺産、沿道」など美観地区を6つの類型化で示している。また盆地景で大切な眺めについても「境内、通り、水辺、庭園と借景、山並み、象徴的ランドマーク、見晴らし、見下ろし」などの8つの類型を示している。

この結果、京都の未来のための<大景観>の枠組みがほぼ設定された。しかし通りや街区などの<中景観>、さらに個々の建築物群を身近に感じる<小景観>にいたるまで、いかにデザインされるべきかは、これからの課題である。

高度成長やバブルの時代、町家は形もセンスも異質なビルやマンションに取り替わってきた。新景観政策の下では「京都らしい」「京町家風」を取り込んだデザインが目だってきたが、似て非なるものも少なくない。はたして未来はどう描けるだろうか。

■「京都景観Design Guide Book」

行政の基準にパスすることが本質ではない。「建築家・建築技術者はデザイン・ワークに熱心だが、その前に、もっとデザイン・スタディに時間とエネルギーを充てるべきである。もっと考え、悩まねばならない」として、京都の建築設計監理協会（32設計事務所の集まり）が、この3ヵ年間の研究成果をテクストにまとめている。

「美しい建築・美しい京都」をめざしてデザインするための作法と知識、地域共生の設計、それに持続的な継承のために維持管理への配慮もふくめて読みやすく編纂されている。これなら建築主、施主、住民をつなぐ学習テクストに用いることができそうだ。

私の実感のひとつだが、新景観政策でビルの屋上広告物が撤去されてみても、何か乱雑さが残る。機器置き場や倉庫、無造作な塔屋など、長い間、建築家も施主も、町並みのスカイライン、周りの山並み、天空との付き合いを忘れてきたようだ。本質的なデザイン・スタディのテーマにしてもらいたい課題のひとつである。

■地域ごとのまちづくり物語

京都の都市空間は単一ではなくて、それぞれの特色ある地域によって構成されている。デザイン・ワークにあたっては、まず地域空間が形成されてきた文脈＝コンテクストをスタディすることは必須だが、そのような情報ファイルがすぐ入手できるわけではない。ところが、近年、元学区や自治会などによる、それぞれの地域の再発見や記録活動が盛んになった。ローカルな史跡、行事、巡行道、仕事場や語り部の訪問など、ワークショップ、ガイドツアー、研究会などとともに大学・専門学校の教員や学生もお手伝いして、「まちづくり物語」「まちの絵巻・まちのかるた」「まちかどアルバム」等が制作されている。

在来からの住民が減り、子ども数も少なくなり、マンション等新しい住民が増えると、

どうすればまちの伝統を共有し次の世代の住民に継承できるかという危機意識がある。建築サイドの人たちも地域のこうした活動にもっと参加し、地区計画や建築協定など貢献することが求められる。美しい景観とは、施主、テナント、事業者、住民が地域をどれだけ知り愛しているか、暮らすことの作法やたしなみを体得しているかによって決まってくるからである。そこで建築に関わる教育や職能にもあらためて問われるのが歴史をつなげる解読力と町並みストックの特性を生かすデザイン技能そして地域サポートの力量である。

■京町家を継承し創生する

平成19-21年度に実施された市全域にわたる京町家（伝統的木造家屋）調査の中間報告（7月、京都市／㈶京都市景観・まちづくりセンター／立命館大学地理学教室 共同調査）によると4万8千戸が数えられた。年平均2—3％ずつ減少している。算術では30年後に現存の町家が消滅することになる。

町家群は、京の暮らしと都市居住の歴史を今に体現しており、何百年も練磨されてきた様式であり、京のまち景観の原風景である。かつ、今回の中間報告でも、都心商家筋、染織などの地場産業地、邸宅地、近郷農村、街道筋など、その形象と分布が地域ごとに多様であることが把握されたのも成果であり、やがてデーターベース化された段階では、デザイン・スタディや地区計画などにも役立ちそうだ。

町家群の今後について考えてみると、まず第一に文化財や景観要素として、また町家の基本類型を代表する対象は保存されるべきだろう。第二に、出来るだけ改修リニューアルし、住み続けかつ住み継がれること。それを支える伝統的木構造の耐震・防火・快適化やそれらの建築基準法をはじめとする制度対応も、NPOや大学の協力でとりくまれている。また、ストック時代にあって、既存家屋（かつては中古と呼ばれてきた）物件の正当な評価、お見合い情報化、不動産保証などの流通化の取り組みもかなり広がっている。さらに、利活用の促進でも、これまでの店舗・ギャラリーなどに加えて、リフォーム借家、サテライト校、旅館、デイケアー福祉施設などへの新たな活用が進んでいる。

第三に現代デマンドを織り込む次世代町家の創生である。低炭素化や長期耐用化住宅、まちなか居住などのニーズからすると、新しい町家もやがて定型化されて持続的共生の姿が描けるのではなかろうか。

私がいま心配しているのはもしもの時の災害復興だ。狭い路地や図子、入り組んだ宅地割り、隅切りの無い角地なども歴史的な意味があるなら、それらを含む区画整理や法制をどうするか、京都型の減災・文化継承型の復興計画術も想定しておかねばならないだろう。

■市民、事業者、行政のパートナーシップ

学区、町内会、地域グループによる活動、歴史文化・水と緑・京町家・木造住文化などの保全にかかわるさまざまなNPO活動、専門家グループ、職能団体や大学専門学校の参加などによって、京のまちづくり活動はいま多様で活気づいている。このなかで（財）京都市景観・まちづくりセンターは1997年の発足以来、住民、企業、行政によるパートナーシップのまちづくり活動を支援すべく、①情報提供や研究開発、②よろず相談や専門家の派遣、③景観まちづくり大学やセミナーの開催、④学区などのコミュニティまちづくり支援、⑤町家ファンドによる修復支援、⑥多様な団体間の交流促進等を進めている。また、こうした業務を通じて、まちづくりコーディネーターの研修をおこなっている。まちセンを媒介として、インフォーマルな人々、グループの新しいつながりが広がっている。

昨年、世界記念物財団（World Monument Fund、NY）は、京の町家群を消滅の危機にあり保全すべき遺産と認定し助成金の交付を決定した。名だたる宮殿、寺院などに比べると小さな単体だが、これは伝統的木造都市住居を未来につなぐ多世代にわたる教育、技能・技術開発、後継者育成などの取り組みが世界的に見ても持続可能なモデルプログラムであると評価された結果である。

（みむら　ひろし）





〈参考資料〉
1）京都市住宅政策課『京都市住宅マスタープラン』2003、（94ページ、概要版もあり）。
2）京都市都市景観部『京都の景観』（市民配布冊子、110ページ）2009。
3）京都建築設計監理協会『京都景観デザインガイドブック』2009、（40ページ、頒布価格800円）。内容：美しさとは、美しい都市景観、美しい建築、色彩と光、寸法・バンス、建築素材、様式と装飾、美しさを維持するために。
4）㈶まちセン編『京町家の再生』（和・英文）光村推古書院、2009。
5）㈶まちセン「京まち工房」季刊ニュースレター。http://machi.hitomachi-kyoto.jp
6）リム　ボン＋まちづくり研究会「」まちづくりコーディネーター』学芸出版社、2009.
7）高橋康夫・中川理編『京・まちづくり史』昭和堂、2003。

各論

歴史的建造物の保存修理と今後の展望

京都府教育庁指導部文化財保護課
平井俊行

■はじめに

京都府では、明治30年（1897）に歴史的な建造物に対する初めての法律である古社寺保存法が制定されて以来、今日まで100年以上にわたり国宝・重要文化財等の保存修理事業に取り組んできている。この事業は日本の財産である貴重な文化財建造物を良好な状態で後世に伝えることにより、国民の文化的向上に資するとともに、世界文化の進歩に貢献することを目的としている。さらに近年は、文化的景観や歴史的風致が注目され、文化財建造物はそれらの核としても、益々重要性を増してきている。そこで、京都府教育委員会で実施している保存修理について紹介したい。

■破損状況の調査、修理計画の立案

一口に修理と言っても、建造物の傷んでいる場所や程度でその方法は異なってくる。修理方法は次のようにいくつかに分類できる。国庫補助事業として実施される保存修理は、文化財所有者が事業の主体となり、文化庁に申請書を提出するが、京都府はその事業全体を受託することにより実質的に修理を進めている。特に解体・半解体修理を実施する際には、修理事務所を構え、技術職員を現場に常駐させている。平成22年６月現在５ヵ所の修理事務所を構え、12名の技術職員が従事している。さらに嘱託員として大工・建具工を直接雇用しており、現在11名が４ヵ所の保存修理に携わっている。この技術職員と嘱託員で共同して調査・解体・組み立てを進めることが、質の高い修理を行う上で、京都府のひとつの特色となっている。

さらに嘱託員以外の作業（左官・屋根葺き［瓦葺き工・檜皮、こけら葺き工］・彩色工等）については、重要文化財建造物保存修理工事競争入札参加資格要綱（平成21年６月19日付け　京都府教育委員会教育長告示第12号）を定め、工事実績・技能者の経歴・重要文化財建造物の修理ができる高度な技術の有無の３点について審査を行い、各分野に精通した歴史的な建造物の修理を手がけてきた技能員を直接雇用している企業に入札参加資格を認定し、競争入札を実施し、落札業者と工事請負契約を結び、修理を進めている。

ここでは、木造建造物の解体修理を例に説明する。修理の前には建造物の寸法や破損の状況を調査し、これをもとに修理方法・期間・進め方・費用などの修理計画を策定する。国宝・重要文化財の場合、修理計画は、文化庁・所有者等と協議の上決定し、その後修理に着手する。修理は素屋根（すやね）の建設から始まる。素屋根は建造物を雨や風から守るほか、解体・組み立ての時の足場や、材料の保管・加工の場所として使われる。

根本修理	解体修理：建物のすべての部材を解体し、再び組み立てる修理 半解体修理：柱などの軸部の一部を解体せずに行う修理
維持修理	部分修理：木部や壁・建具など建物の一部について行う修理 屋根葺替（ふきかえ）：屋根ふき葺材のふ葺き替え及びこれに関わるのじ野地等の補修を行う修理 塗装修理：丹（たん）塗り・漆（うるし）塗り等の塗装や彩色の剥落（はくらく）止めなどを行う修理

■建造物の解体

建造物の解体は、建てるときとは逆の順序で、大工・屋根葺師・左官など専門の技能者が、材料を傷めないように一つひとつ取り解いていく。最初に建具や錺（かざり）金具をはずし、次に壁、屋根の順で解体し、建造物を軸組の木材だけの状態にする。軸組の木材は、上の方から順に解体していき、最後に柱を倒す（**写真１**）。このあと、場合によっては礎石（そせき）をはずすなど建造物の基礎まで解体する。なお、すべての材料には番付札（ばんづけふだ）と呼ばれる板札を付けるなど、解体したあとでもその材料が元あった場所がわかるようにしておく。



写真１　木部の解体

■建造物の調査

建造物の解体と平行して、さまざまな調査を実施する。文化財の修理では、建造物の歴

史的な価値を確かめ、その価値を損なわないようにする必要があるため、この調査は欠かすことができない重要な仕事となる。まず、建造物の細かい寸法や破損の状況について詳しく調べる。また、建造物がどのような架構になっているか、どのような技法によって建てられたのかを調べる。さらに、建造物がいつ建てられ、いつどのような改造を受けてきたのかについても調査を行う。調査結果は、記録用紙や写真に記録していく（**写真2**）。また、建造物だけでなく、古文書の調査や必要な場合は発掘調査を実施することもある。

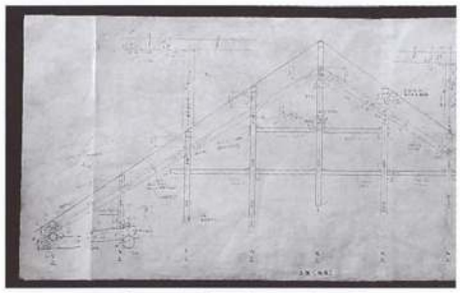


写真2　解体調査の記録用紙

■修理計画の再検討

調査結果をもとに修理計画を再検討する。予想以上に部材の腐朽や破損が進行していた場合など、当初の修理計画を大幅に変更することもある。この点が文化財建造物修理の大きな特色となっている。上記以外にも修理計画を大幅に変更する例として次のようなものがある。

（1）建造物が後世の改造を受けていることがわかった場合には、文化財的な価値を高めるために改造前の姿に復原することがある。

（2）建造物が構造上の欠陥を持っているとわかった場合には、現代の技術などを用いて補強を行うことがある。

（3）修理前の状態では建造物を活用していくことができない場合には、より活用できるように現代的な設備を取り付けることがある。

■材料の補修と加工・組み立て

解体した材料は、一つひとつその傷み具合を確認し、再使用するか取り替えるかを決める。その際、文化財の修理では、もとの材料をできるかぎり再使用することが原則となっている。これは、すべての材料が建造物の歴史や当時の技術を知るための貴重な情報源であると考えているからである。このため、一部が傷んでいる材料でもその部分だけ補修して再使用する（**写真3**）。どうしても再使用できない場合に限り新しい材料に取り替えるが、その場合でも元の材料と同じように伝統的な技術を用いて加工したものを使う。また、新しい材料には、取り替えた時代がわかるように焼印で年号を焼きつけておく。

次に解体と逆の順番で組立を行い、必要に応じて建造物の補強や防災設備の取り付けなどを行う。建造物の組立が終わったら、素屋根を解体して修理は完了する。



写真3　部分的に補修した部材

■記録の作成

修理の内容は、保存図と報告書という形で記録に残す。保存図とは、修理した建造物の図面のことで、次回以降の修理の際の基本的な資料となるものだ。保存図は、ケント紙に烏口や筆を用いて墨で仕上げている。現在ではCADを用いた図面や電子データでの保存も可能と考えるが、記憶媒体の変化が著しいことから、中長期的な保存の観点から手書き図面にこだわっている。

報告書は、修理の内容と調査の結果を文章・写真・図面にまとめて本にしたもので、保存図と同様、今後の修理で基本的な資料となるものだ。300部作成され、建築系の学科がある大学や都道府県の中央図書館に寄贈され、様々な研究に役立てるための資料としても活用されている。

■まとめ

今回、このような機会を頂戴し、文化財建造物の保存修理について説明したことには理由がある。そのひとつは、国登録文化財等新たに文化財建造物の範疇に入るものの増加がある。平成22年6月1日現在、国宝・重要文化財建造物は、4,339件であるのに対して、平成8年に施行された国登録文化財（建造物）はすでに7,994件を数える状況にあり、今後とも相当な勢いで増加していくことが予想されること。二点目は、社会情勢の変化により、これまでのスクラップアンドビルドの考え方が、環境重視の観点から再利用に目が向けられるようになっていること。三点目は冒頭でもお話した文化的景観や歴史的風致・重要伝統的建造物群保存地区の制度の中で、点としてではなく、面として歴史的建造物の保存がますます必要となって来ていることがあげられる。

これらの歴史的建造物についても、一定の修理の必要な状況にあると考えるが、これまでの国宝・重要文化財建造物の修理を手がけてきた技術者の数では、到底それらの設計監理ができる状況にはない。そこで、より多くの建築士の方にこれら歴史的建造物の修理に関わっていただきたいと考えている。しかし、文化財としての価値を残していく調査・設計・施工・修理技術・積算等は、現代建築の考え方や仕組みとは異なっている点を理解いただきたいと感じたからだ。平成22年度文化庁では、地方公共団体教育委員会が主催する歴史的建造物保存修理に関わる講習会の修了者や登録有形財建造物保存修理の設計監理等の実績がある者等を対象とした、登録有形文化財建造物修理関係者等講習会を実施すると聞いてる。いずれ、歴史的建造物の保存修理について、これまで現代建築を手がけられて来られた設計関係者の方々に協力いただく日は近いと感じている。

（ひらい　としゆき）



写真1　堀川団地の現況（2009年）

各論

まちづくりと連携した市街地型住宅団地再生をめざして
―京都堀川団地における取り組みと展望

京都大学大学院教授
高田光雄



写真2　堀川商店街の開店
（出典：『堀川商店街40年の歩み』堀川商店街協同組合）

■はじめに

20世紀の後半、第二次世界大戦後の復興から高度経済成長を遂げたわが国では、その過程で、人口の都市集中と住生活の近代化に対応するため大量の郊外型住宅団地が建設された。周知の通り、今日、その再生は大都市圏の大きな課題となっている。そして、「団地」再生は、深刻さを増している「郊外」問題としばしば一体的に論じられてきた。

しかし、初期の住宅団地は、郊外ではなく、都心、あるいはその周辺の市街地に建設されていた。また、当時、住宅と商業施設の併存形式についても様々な試みが行われていた。その再生は、住宅と商業との関係、団地と周辺地域との関係等に深く関わる。そのため、郊外問題ではなく、「都心」問題として論じられなければならないのである。

もっとも、近年、郊外型住宅団地の再生においても、住宅と商業との関係、団地と周辺地域との関係等が重要であるといわれるようになっている。市街地型住宅団地の再生は、郊外型住宅団地の再生までを視野に含んだ課題を抱えているといえるのかも知れない。

本稿では、こうした問題意識から、日本最初の市街地型住宅（下駄履き住宅）団地であると言われている京都の堀川団地をとりあげ、その再生の方向を探ってみたい。

■堀川団地の概要

1950年、戦後の住宅政策の主要三制度の一つとして、公営住宅法（1951）、日本住宅公団法（1955）に先立って住宅金融公庫法が施行された。

現在のように、国民が民間金融機関から住宅建設資金を簡単に借り入れることができなかった時代に、この法律に基づいて設立された住宅金融公庫の融資は、個人による住宅問題解決に重要な役割を果たした。一方、住宅建設資金の乏しい地方公共団体は、直接、公庫資金を借り入れることができなかったため、公庫資金の受け皿となる財団法人を設立し、公的住宅供給を開始した。

堀川団地（**写真1**）は、こうした背景の下で、京都府により設立された財団法人京都府住宅協会が1950年から54年にかけて京都府とともに整備した市街地型住宅団地である。立地は、堀川通りの西側で、中立売通りから丸太町通りまでで、北から、上長者町団地、出水団地3棟、出水団地2棟、出水団地1棟、下立売団地、椹木団地の6団地が民有地を挟みながら並んでいる。「堀川団地」はこの6団地の総称である（**図1**、**図2**、**図3**、**表1**）。

全ての団地がRC造3階建で、1階は店舗併用住宅（上長者長団地のみ店舗専用）、2、3階は専用住宅となっている。1階の店舗は商店街を形成し、開店時には多くの市民が殺到した（**写真2**）。現在は、いずれも京都府住宅供給公社（以下では公社）によって賃貸住宅あるいは店舗として管理されている。

ところで、堀川団地周辺は、戦前までは「堀川京極」と呼ばれた繁華街で、町家形式の多くの店舗併用住宅が集積していた地域であった。しかし、第二次世界大戦中、強制疎開によって堀川通西側の建物が極めて短期間に取り壊され、延焼防止のための道路拡幅が行われたのである。敗戦後、旧堀川京極の人々の復興の熱意に応えて、京都府および京都府住宅協会は、防火帯ともなるRC造店舗併用住宅を計画、市街地の住宅復興モデルとして全国的に注目を浴びたという経緯があった。

■堀川団地再生に向けた取り組み

堀川団地は、築後30年を経過した1980年代になって、建物、設備等の老朽化が目立ち始め、建て替えの議論が開始された。1990年頃には、住宅、店舗ともに空家の募集停止が行われ、入居世帯数や店舗数は徐々に減少してきた。しかし、この処置によって商店街の賑わいが薄れたのではないかという商店街の指摘に対応して、公社は1997年より1階店舗部分の空家募集を再開、2000年には定期借家制度を適用した。とはいえ、その後も建て替えの議論は進展せず、具体的な計画策定には至っていない。

2009年4月になって、京都府と公社は、外部の専門家を集めて堀川団地まちづくり懇話会を設置して、一旦行き詰まった団地再生の議論を再開させた。筆者が座長を務めることになったこの懇話会は公開で進められ、団地再生に向けた基礎的資料の検討に基づいて、検討課題の抽出を行った。さらに、委員間での討議だけでなく、団地居住者、商店主、地域住民など16人の関係者の意見聴取の場としてのまちづくりトークを開催し、幅広い



図1

団地名	建設年	規模・構造	敷地面積(㎡)	延床面積(㎡)	戸数	
					店舗併用	専用住宅
上長者町団地	1953年	RC造ラーメン3階建て 階段室型	713	1,400	12戸	府職員住宅
出水団地・3棟	1950年	RC造ラーメン3階建て 片廊下型	853	1,521	9戸	18戸
出水団地・2棟	1950年	RC造ラーメン3階建て 片廊下型	827	1,522	10戸	18戸
出水団地・1棟	1950年	RC造ラーメン3階建て 片廊下型	860	1,522	9戸	18戸
下立売団地	1952年	RC造ラーメン3階建て 片廊下型	1,056	2,100	12戸	24戸
椹木町団地	1953年	RC造ラーメン3階建て 片廊下型	879	1,697	10戸	20戸
計			5,188	9,762	62戸	98戸

図3

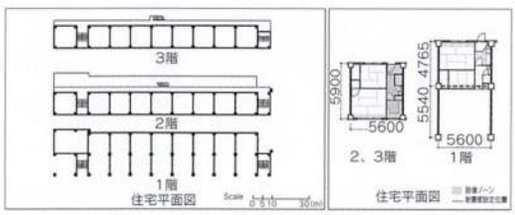


図4

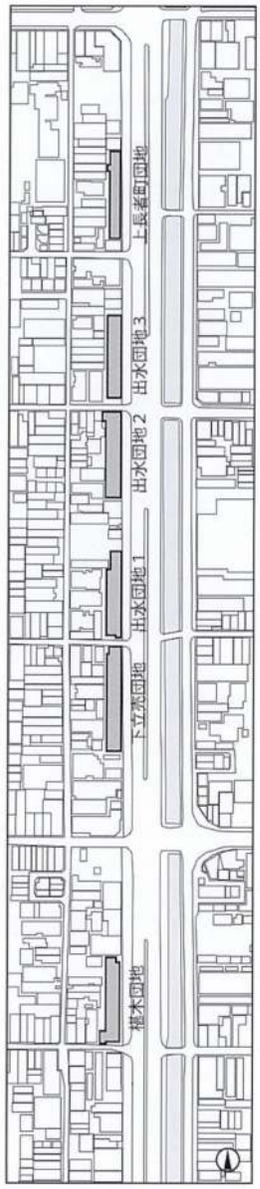


図2

意見を集めた。

これらをふまえ、懇話会では、必ずしも全団地の建て替えが望ましいわけではなく、多様な再生手法を適用して、堀川団地の歴史的・文化的価値の継承にも配慮して、既存建築をできる限り活用する可能性を検討すること、物理的な再生にとどまらず、多様な世帯の居住と交流を実現するため、公的住宅と商業施設のあり方を見直すとともに、福祉施設併設の可能性等についても検討すること、団地の居住者、商店主、商店街の顧客でもある地域住民などが参加するまちづくり協議会における協議を通じて、地域のまちづくりと連携し、プロセスを重視した再生計画の策定を行政の支援を得ながらすすめること、などを京都府と公社に提言した。

■堀川団地の再生可能性

堀川団地まちづくり懇話会の提言提出後、京都大学と公社との共同研究を枠組みとして、他大学の研究者や様々な専門家の協力を得て、堀川団地再生に寄与する研究を進めてきた。また、各大学の学生が、それぞれの専門を活かして団地再生に関わる仕組みについても検討してきた。ここでは、スケルトン・インフィル方式の視点から行った堀川団地再生可能性に関する検討の一部を紹介しておきたい。

堀川団地は、京都府住宅協会より嘱託を受けた京都府の建築技術者によって設計されている。新しい試みに設計者の意欲を感じ取る事ができる。施工も丁寧で、共用部分の建具や住戸内の造付家具は、当初のまま使用されているものもある。また、住戸内では天井裏まで左官の仕上げが施されている。

構造形式は、耐震壁付ラーメン構造のRC造で、アクセス形式は、上長者町団地のみ階段室型で、他は片廊下型である。住戸規模は、1階が奥行きの浅い上長者団地以外では60㎡前後、2、3階が30㎡前後となっている。下立売団地、椹木団地では、専用住宅の規模が40㎡以上と少し広い。住戸規模が小さいにもかかわらず、上長者町団地以外では間口が5.5m程度確保されている。また、2階の階高は2.7m以下の団地もあるが、3階はそれより高く、1階の階高は3.5m前後となっている。建設時期の早い4団地については、1階部分の耐震補強により、2、3階の構造補強なしに耐震性能を満たす事ができる。他の2団地については、2階住戸の耐震補強が必要となり、1階の耐震壁も多くなる。

以上より、例えば、1950年に建設された出水団地1棟―3棟については、築60年という高経年であるにもかかわらず、実現可能な改修によってスケルトンの性能やキャパシティを確保する事ができ、建て替えを前提としなくとも多様な再生シナリオを想定することが可能であると言える。全ての団地に浴室は設置されていないが、浴室を配置した間取りは設計可能で、また、共同浴室などの設置可能性もある。一方、耐震性能の低い団地では建て替えを含めた再生シナリオの検討が必要である。

堀川団地は、南北に長く連なっているため、団地によって周辺環境に違いが見られる。団地の西側は2、3階建ての低層建築が多いが、北の方がその密度が高い。また、南の方が周辺に高層建築が多くなっている。さらに、団地に、例えば通所型福祉施設等の新たな機能を付加することを想定した場合、周辺住民のアクセスの容易性なども検討に加えなければならない。建て替えを含めた再生シナリオの検討を行う場合は、こうした周辺状況を考慮したスケルトン計画の可能性の検討が必要となる。

今後、こうした検討をふまえ、まちづくりと連携した堀川団地の再生シナリオが関係者の協議の中で具体化して行くことを期待したい。

（たかだ　みつお）



倉敷の町並み

各論

再生・受け継ぐ 繋がる

アーキトラスト
・上杉建築研究所代表
上杉秀隆



三洲足助屋敷門前の看板

1978年暮れ、「50年経ったら重要文化財になるもんをつくらにゃいかん」と、そのお爺ちゃんは駆け出しの若僧に言いました。「そんなもんできるかい」と若僧はその時思いました。その三州足助屋敷（旧足助町・現愛知県豊田市）も築30年が経ち、地場の大工の心意気、地場の材料、地場の伝統工法で建てられたことが幸いして、新築とは思わせないたたずまいを見せています。元々、山村生活の生きた生活の知恵を動態展示する目的で計画され、現代社会の中で普通の家庭ではほぼ壊滅した暮らしの知恵を、本来のあり方を忘れず伝えるための舞台装置として新築再生されました。町の危機感とその計画実現に対する強い熱意を感じ、如何にそれをくみ上げ、具現化するかという命題に、前述の様な流れで中身と外見が美味くかみ合ったものとなりました。当時、保存と再生という関連の文章の中で、松葉一清氏が「擬態」という美味い言い方をしていましたが、ハードとしての建築の再生のみならず、ソフトである中身の再生も含めて、ある種の再生のあり方となっています。

この仕事に出くわす遠因は、このお爺ちゃんが生涯思い続けた倉敷という町に、単に建築を作るということではなく、町そのものに対する愛情とそれに対する強い思いが、まちづくりという形で具現化し、評価されてきたことと繋がっています。全国でも有数の美しい伝統的な町並みと、先人達によって守られ築かれた歴史のある町で、倉敷という風土と歴史をキーワードに、ある時は擬態、ある時は対比とも見えながら倉敷の匂いのする建築、更にアイビースクエアに代表される再生（この言葉がもてはやされる以前から、当然のこととして行われてきた）をもって、まちづくりを実践してきました。この若僧も、倉敷の重要伝統的建造物群保存地区で二十年、100件近い、町家の保存修景の仕事を担当し、事ある毎に、倉敷のまちに対するこの翁の思いを目の当たりにしました。決して、自己主張のために建築を作るのではなく、「まち」に対する思いが最優先でした。自ら建築という行為で「まち」の一部に具現化することで、町衆に倉敷を思う気持ちに、良きにつけ悪しきにつけ関心を向けさせたと言えるのでしょう。この老建築家は倉敷の市庁舎が完成したとき、引退を口にしましたが、それでもなお、倉敷の事については、特にこの古い町並み地区の事に関しては足繁く通い、思いを最後まで貫いたのをこの若僧は直接目撃しています。最晩年、この地区の最も古い町家の事を大変按じ、陰日向に動き回りましたが、行く末に安堵を得たとたん「わしゃ、これで死ねる」と言って一週間後に亡くなりました。

*

この若僧も、この老建築家と共に、晩年、長らく町家の修復を行いましたが、結果的に物理的な修景作業よりも、中に住む人の「心」を良くする、即ち、倉敷＝「まち」を思う気持ち、愛する気持ちを町衆に注入することに重点を置くこととなりました。建築は舞台装置、やはりそこで演じる役者が光らないと全く魅力がない。それらの鼓動が集まって、良い「まち」ができあがる。この若僧は、この翁のような立派なことはできませんが、建築は二の次、中身が一番、我々建築家はそのお手伝いをするのですと、建築はそれらの総合化の賜ですと言い続けています。まちの中で、何か一つ良いものが出来て光を放ち出せば、きっとそれにつられて光り出すものが現れる、そんな思いを込めて、どんな小さな事でも真摯に考えるその事が重要なのでしょう。京都では、連棟長屋の真ん中を潰して、およそ京都と関係のない住宅を建ててしまった人がいるかと思えば、嵯峨野の本当に小さな一部壊れかけた町家では、「まち」に対する思いと、父に対する娘の思いがその建物に対する愛情となり、借家人の住み続けたいという思いも重なり、たくさんのお金をかけて修復したオーナーがいます。やはり、「建築」や「まち」を愛する気持ち、すなわち、「心」を大切にする事が重要な様です。

三笑主義（建物ができあがって、施主、建築家、施工者の三者が喜べる物をつくるという意味）という言葉をこのお爺ちゃんがよく言っていました。ものを作るわれわれは、それを受け継ぐものとして、三笑主義にとどまらず、さらに、直接利用する人も、そしてその周辺の人達にとっても、喜んでもらえるものをつくること。そして万人からも愛されるものをつくることが、ものを大切にすること、すべてに渡って「心」あるもの作ることに繋がる。即ち五笑主義、六笑主義とでも言えるものを作る事が、亡くなって二十年、この翁「浦辺鎮太郎」から薫陶を得た者として果たしていくべき事かと、肝に銘じています。

（原稿のまま）　（うえすぎ　ひでたか）

各論

京都の都市景観を色彩の側面から

街の色研究会・京都
村上幸三郎

京都市は、古都の優れた都市景観を保全・再生し、未来に引き継いでいくために、2007年より新景観政策をスタートさせ、「建築物の高さ」や「建築物のデザイン」などの規制・誘導策を展開している。

京都の都市景観を色彩の側面から調査・考察しようと、有志が集ってボランタリーの市民研究グループ〈街の色研究会・京都〉を1990年に立ち上げた。以降、主に京都の都市景観の色彩に関する共同研究などで、多くの成果を上げてきた。それらは、「京都の街の色」「瓦の色と景観」などをテーマとしたシンポジウムやパネル展を主催、発表するとともに、成果の刊行をしてきた[注1]。

その活動は現今も続けられている。最近の研究成果から若干を紹介しておきたい。

■京都の色彩ガイドラインの提案

京都は、歴史文化都市として恥ずかしくない調和のとれた町並み景観を誘導創出することが望まれる。

都心部で建設される中高層建築物などに対しても、従来の町家とも調和するように、今後は色彩の使用を制限すべきであるとし、建築物の外壁と屋根についての色彩指針（ガイドライン）の構想をまとめた[注2]。更に、京都の新旧の町並みの考察から、京都の特色ある伝統的な建築色彩である〈じゅらく色〉を中心とした色彩を用いて類似調和した町並みをつくるようにと提案した。

2006年、折から公募していた京都市の「新・京デザイン」に提案し[注3]、優秀アイデア賞を得た。加えて、2008年には「京都にふさわしい景観色彩113色」などもとりまとめた。

■「街の色京都・三十三景」選出活動

京都では「美しい町並み景観が保存、創出されているであろうか」との素朴な問題意識から、市内各地の色彩景観を観察、調査している。歴史的な景観保存地域などに指定された町並みや、植栽景観に頼った町並みなどを除き、建築群として見るべき街を摘出しようとするものである。

調査を進めると、かつては美しかったであろう街並みが、一棟の際立った新しい建築で壊されている事例を多く目にする。改めて、都市景観への建築関係者の責任が大きいとつくづく痛感する。たった33件の町並み景観を選定するのに苦心しているのである。

■京都にふさわしい屋外広告物の色彩

屋外広告物は都市景観を構成する重要な要素である。京都市は、屋外広告物についても「京都市屋外広告物等に関する条例」に基づく指導・誘導を図っている。色彩については「デザインガイド」にて〈色彩・意匠等の規制〉として具体的にマンセル表色系によって高彩度色を禁止色としている。

私たちは、市内で見かける屋外広告物の事例写真を数多く収集し、京都の都市景観にふさわしいか否かを判別し、その使用する色彩の特性を類別・考察した。

結果、京都にふさわしい広告物の色彩は、中低彩度色や無彩色で、配色は地色と図色の色相や彩度のコントラストがソフトな配色が総じて好まれ、建築と調和しているものが高く評価された[注4]。



写真　街中の景観は屋外広告物が支配している


写真　〈じゅらく色〉の住宅地景観例

注1：街の色研究会·京都　編、刊「京都の景観色彩を考える」など
注2：松浦、他「『京都の色彩ガイドライン』の提案」街の色研究会·京都　編、刊「京都の景観色彩を考える」
注3：街の色研究会·京都「京都の色彩ガイドライン—和の色による町並みづくり—」2006年
注4：渡辺、他「京都にふさわしい屋外広告物の色彩」日本色彩学会第41回全国大会（2010年）

（むらかみ　こうざぶろう）



図1　着工前の状況

各論

庭園の再生

長岡天満宮『錦景苑』

花豊造園株式会社社長
山田昌次



図2　竣工後

■守ること、維持すること

わが国における日本庭園は、日本特有の伝統文化の一つとして、受け継がれてきた。

庭園は、町家の坪庭や、茶庭といった小規模のものから、寺院などにある池泉回遊式の大規模のものまで様々であり、その役割も多様である。特に京都は、古くから現存する歴史的価値の高い建造物や庭園が多く、名勝指定とされる庭園が日本で最も多く点在している。

庭園づくりは、樹木や景石、土や水などの自然素材を扱うため、植物は成長し、据えられた景石は周囲との自然に溶け合い、年を重ねるにつれ、庭園の情景は変化していく。しかし、庭園を放任すれば樹木は茂り、石組はすぐに自然と一体化され、庭園としての景色は失っていく。そこで、樹木の剪定であったり、害虫駆除や老木の保護を行ったりするなど、毎年の庭園管理は欠かせない。

このように人の手が加わることによって、美しい庭園は維持されていくのである。庭園に携わる職人は、毎年の庭園管理や工事によって技術が磨かれ、それが代々受け継がれることにより庭園の文化は守られているのである。

■庭園の再生

請け負う造園工事は、新しく庭園をつくる、または維持管理することばかりではない。人の手が加わらなくなり放置された庭園を、本来の景色に復元修理する工事や庭園の景色を整備する工事があり、年々増加している。

近年、お世話になっている神社より、古くなった庭園を新たな名所として庭園を再生してほしいとの依頼を受けた。場所は、京都市より南西に位置する長岡京市にある長岡天満宮である。

この神社は菅原道真を祭神とした社であり、道真が筑前の太宰府に左遷された際に付き随った中小路裕房等が、道真から貰った自画像を安置したのが創立の始まりといわれる乙訓地方では参詣者の多い社である。境内の東側には築造された八条ヶ池がある。その中央の参道の両側には、樹齢130年前後ともいわれているキリシマツツジがあり、春の開花時は大勢の参詣者で賑わう名所となっている。

その由緒ある場所の庭園整備工事の依頼を受け、仕事を請け負うこととなった。

■計画

現場は、社殿への参道より外れた場所にあり、整備前は鬱蒼としており、長い間放置された状態であった。庭園の中央には、弁天池があり石組と中央には２tほどもある大きな石橋が架けられていた。

庭園の整備方針は、この弁天池と石橋を生かし、その周辺を整備することであった。

敷地の中心に弁天池があり、その東側はベンチが置かれており、その空間から池を眺めるようなつくりであった。池の奥（西側）は高い位置に社殿があり、法面となっていた。

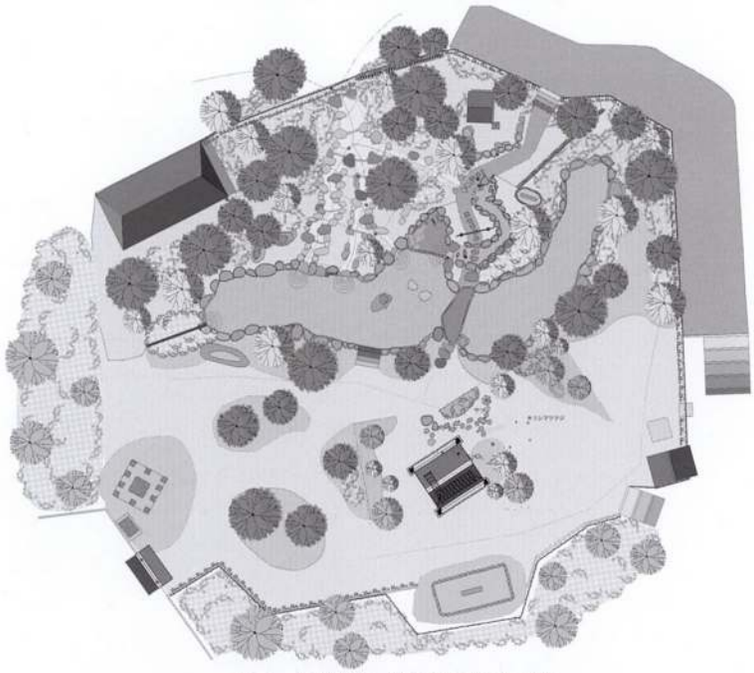


図3　『錦景苑』計画平面図（初期）

その高低差を利用して頂点に滝組を設け、そこから流れを三つに分けて、それぞれが弁天池に注がれる雄大な景色を演出する庭園が計画された。

この神社は、いろいろな木が植樹されている。前述の通りキリシマツツジはとくに有名で、春には花が満開になり、真っ赤に染まる景色は鮮明である。ほかにはツツジやサクラ並木があり、八条ヶ池周辺は色華やかになる。

また、長岡天満宮の社紋は『梅』であり、菅原道真公は、梅をこよなく愛していたことから、境内にはたくさんの梅林があり、冬の景色を彩っている。

秋は、モミジやドウダンツツジなどがいくつか境内にはあったが、紅葉シーズンには、このモミジの紅葉の名所として楽しめる場所を設けたいとのことで、今回の庭園の整備工事に伴い周辺の植栽を、モミジを中心とした景色になるように計画した。

■施工

工事は、まず弁天池の修理から始まった。

池には石組がなされ、一部崩れている部分が確認された。護岸石組に隙間が開いたり緩む原因の一つは、護岸際に生える木であったことが確認された。木が成長すると根が伸張し、石の間に入り込んで石を押し出すからである。これら対象となる樹木はすべて伐採し、モミジなどの再利用できる樹木については、移植を行って庭園の別の場所に植栽した。

池底は泥が堆積していたため、浚渫とともに池底防水層の修理と、石組の組み直しを行った。

池の縁は、漏水防止と護岸の安定のために石組と池底の間にコンクリートによって塗り固められていた。今回の工事で池の石組をなるべく自然に見せるためと、池の東側を州浜状にするために一度すべてを取外し、組直した。



図4　護岸石組の様子



図5　滝組工事の様子

池を造るにあたり、まず留意すべきことは漏水対策である。公園工事などでは、池の護岸に石を組む場合、池の形状より一回り大きいタライ形にしたコンクリート躯体を設けてからその中に石組するのが一般的である。しかし、躯体の形状に制限され、大小さまざまな石を組んで複雑な石組護岸を造ることは大変困難であり、単調な石組となる場合が多い。文化財庭園の修復は、基本的にコンクリート躯体を設けず石組する方法がとられる。これは、旧来工法である粘土を使用した防水方法である。まず石を仮組し、護岸の形状が決まれば、石と石との隙間と背面に粘土を詰め込む。粘土には、栗石、砂利、石灰などを混ぜて強度をもたせ、それを細い棒で細かくついては、粘土を補給し、また棒で突き固めるといった作業を繰り返す。大変手間と人力作業が必要であるが、細かな微調整がしやすい。自然の石は、二次製品とは違い、それぞれに個性がある。石を上下または左右に振り返すだけでも庭園の仕上がりの表情が異なってしまう。よって、石を扱う工事の仕上がりは、担当の職人の経験と感性に委ねられるのである。池の護岸石組を一通り組み終えると、次は池底の工事に取りかかる。今回の工事は池の耐久性を考慮してコンクリートで覆う工事を行った。名勝クラスの庭園となるとコンクリートを一切使わない粘土による補修が多い。

滝組と流れは、工事の前にどのように流れを見せるかを決めるため、ロープで縄張りして全体とのバランスを考慮して流れの形状を決めていった。滝組の石を組む法面の場所は、クレーンを使用して石を吊るしながら行う方法で行った。池側から重機を据えて工事することが不可能であったため、上流側の法肩に重機を据え、石を吊るし、小型のバックホウを法面に置いて掘削と石組の補助をしながら作業を行った。

石を組む職人とクレーンを扱う運転士が連携して作業を行うため、技術責任者が池の対岸に立ち石組の出来形を確認しながらそれぞれに指示を与える方法で施工を行った。

池の東側には、休憩施設を新設した。形状は露地庭にある待合のイメージで、弁天池と滝組流れが一望できる位置に設けた。

仕上げの植栽工事はモミジ、マツを中心とし、その足元にスギコケを植栽した。

■工事完了後

工事が竣工し引き渡し後、初年度の夏は、水枯れなどによる植物の衰退を危惧したが、滝組から流れる水が周辺を潤し、モミジの柔らかい枝葉が強い日差しを和らげる環境をつくりだしたため、スギ苔をみずみずしく鮮やかな緑を保たせた。この庭園は植物にとってはとてもいい環境であった。秋はモミジが紅葉し、スギコケも枯れることなく清々しく、さらにモミジの鮮やかな紅を引き締めていた。訪れた参詣者もこの新しく甦った庭園を楽しんで頂き、施工者としても大変うれしい限りであった。

これから、年月を経て庭園全体が落ち着き、長岡京市の名所となるようにこれからも見守っていきたいと思う。

（やまだ　しょうじ）

各論

曳山から考える伝統木造建築の耐震性

関西大学建築学科教授
西澤英和

■はじめに

古来より、技術や芸術は伝統を受け継ぎつつ工夫と創造を加えながら発展をとげてきたとされる。これは絵画や漆芸、陶芸などの伝統工芸の分野では確かにその通りであろう。だが、こと建築については必ずしもそうではないように思われる。なぜならば、いかに施主が伝統的な木造家屋を新築しようと望もうと思っても、現行法規のもとで実現することはまず不可能であり、優れた職人技も生かす場を失って、伝統技術はいまや崩壊し始めているからである。

例えば京町家がおかれた状況について。立命館大学の河原典史先生らの研究によると、御池通り・四条通・河原町通り・烏丸通りに囲まれた東西1.1キロ、南北0.8キロの中心市街地における京町家は昭和23年には6200棟であったが、昭和36年5900棟、昭和49年4500棟、昭和62年2900棟と急減し、10年前の平成12年には僅かに1800棟を数えるのみになったという。

中心市街地の発展によって町が姿を替えていくのは自然な流れではあるが、わずか2世代で7割近くの京町家が姿を消したという事実は衝撃的だ。そんな中、平成14年に「京都市の伝統的景観保全に係る防火上の措置に関する条例」が制定され、地域住民の防火への自主的な取り組みを前提として、伝統的な京町家や街並みを再生する道が開けたことは喜ばしい。伝統木造の新たな盛り上がりが大いに期待される。

■曳山の話

建築の分野で伝統技法を昔どおりに継承できそうなのは、今のところ社寺建築くらいかもしれないが、祭りの曳山などもそれにやや近いといえる。各町内の曳山は、毎年の祭りにあわせて何世代にもわたって、大切に維持修理され、時には昔ながらの技法で新たな山車を加えながら、発展しているからである。

そこで、やや視点を変えて、曳山から見た伝統木造の揺れ方—耐震性について少し考えたいと思う。

京都の祇園祭の華麗で優美な山鉾、大阪の岸和田の勇壮な地車を始め近畿各地には地域色豊かな山車の文化が根付いている。そんな中、ここ数年、滋賀県日野町の曳山の構造について調査する機会を得た。

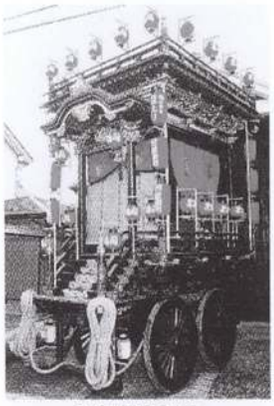
日野の曳山祭りは毎年5月の初め、馬見岡綿向神社の例大祭にあわせて各町内から大小16基の曳山が巡行する。これらは100乃至200年ほど前に作られたもので、いずれも美術工芸の粋を集めた第一級の歴史資産である。

日野の曳山は祇園祭の山鉾のように毎年鉾立てを行うことはなく、祭りの期間を除いて山倉に格納されているが、近年巡行中の軋みや揺れが以前に比べて大きくなっているのではないかとの指摘がなされるようになり、曳山の上部構造や車軸などの強度や安全性に関する総合的な調査が計画された。

日野町の曳山は図1に示すように4輪の台車の上に床を組んで陸屋根のついた櫓を組んだような構造となっており、床や陸屋根に囃子方を乗せた曳き山を多くの引き手が牽引して町を巡行する。

巡行の見せ場の一つは、「ギンギリ回し」呼ばれる「辻回し」である。4つの車輪で支えられた台車の中央には「心木」と呼ばれるピボットが設置されていて、街道で引き山を方向転換させるときには、前梃・後梃の2つ


清水町曳山


河原田町曳山


岡本町曳山

図1　日野町曳山

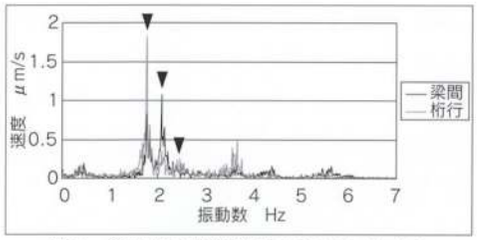


図3　静止時の常時微動のFFTスペクトル

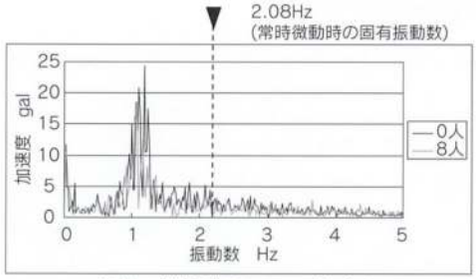


図4　巡行時のFFTスペクトル

の長い梃棒を操って台車を競り上げるその瞬間に、心木の下に受け板を挟んで、曳山全体を心木一本だけで浮かせ、そして威勢良く一気に回転させるのである。(図2)

曳山は構造的にみるといわば振動台に乗せた壁のない伝統木造家屋のようなもの。巡行時に加わる地盤からの振動を地震動とみなせば、百年以上にわたって毎年強い地震を受け続けてきた耐震建築とみなすことができる。そのような意味で曳山は耐震工学的にも興味の尽きないものがある。

■曳き山の固有周期について

装飾や囃子方を含まない曳山の構造重量は最小2.0トン・最大6トン・平均3トンであったので、平均的な規模の曳き山を中心に静止状態での常時微動観測を行った。その1例を図3に示す。

この図より桁行方向の固有振動数は2.08Hzと2.48Hz、梁間方向では1.75Hzと2.48Hzにピークが認められた。振動モードから判断すると　2.08Hzは桁行方向の並進、1.75Hzは梁間方向の並進、2.48Hzは捩じれであって、これらの観測結果は平屋の木造家屋と同程度の値であることがわかった。また、衝撃試験による減衰係数はおおむね7％であった。

一方、巡行時の揺れについて観測するために、曳山に乗る人数を変化させ、町の人たちのご協力をえて巡行の再現試験を行って揺れを観測した。得られたスペクトルの一例を図4に示すが、注目されるのは巡行時の揺れの固有周期は常時微動の観測値に比べて2倍程度長くなっていることである。

また、陸屋根に載る人数が多くなるほど固有周期は長くなると予想していたが、そのような傾向は認められなかった。その一因として、人は揺れに反応して、無意識に体重を移動させるために、曳山は一種の能動制振システムのように挙動するからではないかと思われた。

また揺れはどれくらいのレベルに達するのかであるが、この実験では比較的少ない2人乗りの時に最上部で約7センチ、8人乗りでは2.6センチと4割程度の揺れに収まった。この山の総高は約5メートル、櫓の床面から陸屋根面までは約2.7メートルであることから、観測時の軸部の最大変形角は90分の1程度。最大加速度は約200ガルであった。

また、揺れは下部の台車や床面に比べて、陸屋根面が大きく振られており、所謂「鞭ふり」の傾向が認められた。

曳山は路面からの衝撃的な短周期の加速度のほかに、路面のなだらかな起伏や車輪の蛇行や片減りに起因する長周期の揺れが加わるが、巡行時の1次固有周期は0.9秒程度まで長周期化しているために、衝撃的な加速度の影響はあまり受けず、長周期の大きな揺れのみが卓越した。しかしながら、減衰係数が7％と大きいためか、変位応答が大きく増大するような現象は特に指摘されなかった。

■まとめにかえて

曳山は特殊な構造物のように見えるが、固有周期や減衰などは伝統木造建築とよく似た特性を有するようだ。ただ、一般建築と異なり多くの人を乗せて巡行するという過酷な荷重状態に長時間さらされるため、曳山には可能な限りの軽量化と強靭さが求められる。このような曳山に見られる耐震の構えは「柔構造」そのものであって、このため、堅牢な台車（基礎）の上に、開放的でしなやかな櫓を構築し、さらに多くの人を高い陸屋根に敢えて載せることによって、櫓の長周期化を図ったようだ。

屋根の軽量化を図り、壁量を増やすのが、現代木造の鉄則である。しかしながら、もしも剛な構築物を激しい揺れをうける曳山に用いたならば、高さに比べて幅の小さな形態の櫓は、強い横力によって引き倒されてしまうに違いない。

壁や筋かいなどどこにも耐震の構えらしいものが見当たらないのが、京町家をはじめとする伝統木造建築であるが、一見どこにも耐震的配慮が見当たらないことこそが、実はすぐれた耐震建築の証であることを、曳山は教えているようだ。

（にしざわ　ひでかず）

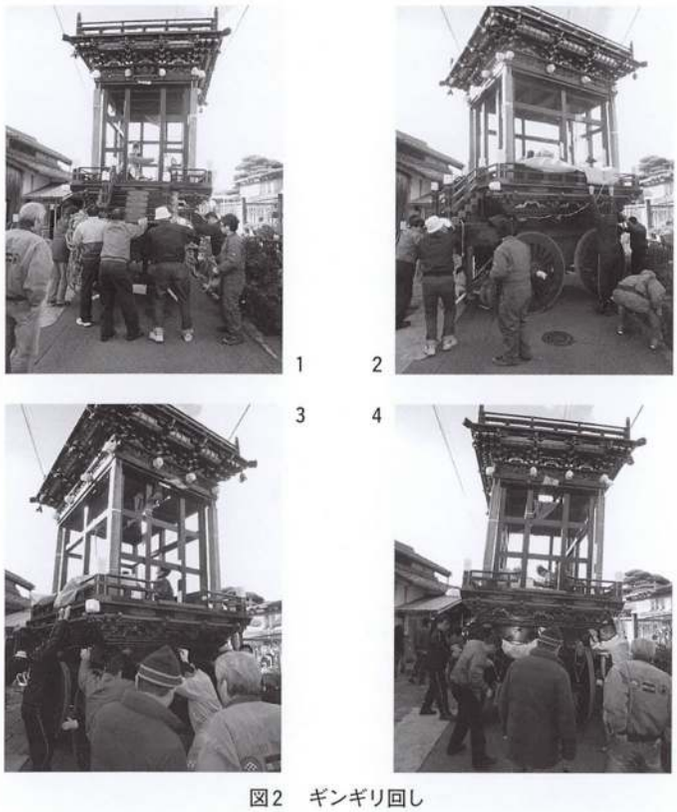


図2　ギンギリ回し

[参考文献]
河原典史・河角龍典ほか：昭和・平成期の京町家バーチャル時・空間―京町家時・空間データベース及びVR技術を用いた京町家の減少過程の復原―平成14-18年度文部科学省21世紀COEプロジェクト「京都アート・エンタテイメント創生研究」研究成果報告書より



京都市立伏見工業高等学校正面玄関

各論

ものづくり都市・京都 まちづくりを工業教育から

京都市立伏見工業高等学校校長
道越隆夫



第85回全国高等学校ラグビーフットボール大会優勝

■学校概要

大正14年に京都市立第二工業学校として設立し、木材工芸科、金属工芸科、玩具科、陶磁器科の４科を置く。昭和23年高等学校再編成により総合制高校として京都市立伏見高等学校となる。そして昭和38年市立高等学校学則改正により、単独制高校として伏見工業高等学校となる。平成19年度より、システム工学科として一括募集し、２年次より工学探究システムコース・住環境システムコース・都市情報システムコース・生産技術システムコース・テクノシステムコースの５学科の他、昼間定時制としてシステム工学科キャリア実践コースを設置している。生徒数は、各学年全日制160名、昼間定時制30名である。教職員数は、83名である。（校長１　副校長１　教頭１　事務長１　教諭52　常勤講師13　再任用教諭１　養護教諭１　事務職員５　臨時事務員１　実習助手３　管理用務員２　臨時管理用務員１）

■建築系学科の変遷

昭和６年、京都市立第二工業学校に建築装飾科が設置されたのが始めである。その後、昭和18年に建築科として５年生甲種工業学校となる。昭和23年４月に学制改革により京都市立伏見工業高等学校となり、10月に高等学校再編成により、総合制高校として京都市立伏見高等学校となり、普通課程・商業過程・工業課程（木材工芸科・機械科・窯業科・建築科）・家庭課程（食物科・被服科）の４課程（６学科）となる。昭和38年に市立高等学校学則改正により、単独制高校として京都市立伏見工業高等学校となり、建築科を含め７学科となった。その後、学科改編を行いながら現在のシステム工学科住環境システムコースへと変遷してきた。

■京都市立工業高校改革

京都市教育委員会は、平成16年12月に学識経験者や産業界からの参画を得て、「工業教育のあり方に関するプロジェクト」を発足させた。そして、その答申を受けて、平成17年に次の様な基本方針を発表した。

京都市立工業高校改革・基本方針の発表（京都市教育委員会）

（１）現在の専門各学科（小学科）を廃止し、「ものづくり」を通した豊かな人間教育の実践を目指した新学科を設置する。

（２）「まちづくり」の基盤となる技術を学ぶことができる市内唯一の設置学科として、長い伝統に裏打ちされた独自の教育ノウハウと実践を有し、地元産業界の期待も大きい、建築・土木系を中心とする各コース。

（３）産業界・大学等との緊密なパートナーシップの下、特色ある教育を展開するとともに、部動についても一層推進し、確かな技術と幅広い応用力、次代を切り拓くことのできる逞しさ豊な人間性を兼ね備えた若者を育成する。

（４）洛陽・伏見両校定時制を統合・再編し、３修制、デュアルシステム等の新しい教育システを導入した昼間定時制の新学科を伏見工業高校に設置する。また、若干名の夜間部を伏見工業高校に当面存続させる。

この基本方針に基づいて改革を具現化するために、平成17年の４月より現場の教員を含めた構成員からなる工業高校改革準備室が設置され、「全ては生徒の未来のために」を合言葉に工業高校の果たすべき今日的な役割を含め、独自の優れた「ものづくり・まちづくり」ができる人材の育成を図るべく、教育内容の更なる改善をするために鋭意検討がされた。

■工業高校改革の背景

バブル経済がはじけた後、経済界や産業界では生き残りをかけて必死に技術開発や経費節減、新規顧客の開拓を行い、これまでの枠を越えて様々な分野に進出し、世界規模での競争を繰り広げている。また、中高年の失業が社会問題化する一方、パートや派遣社員といった就労の形態も増えており、かつての正社員の終身雇用制が崩れつつある。こうした状況は、高校生の求人にも大きな影響を及ぼしており、学校への求人件数もかつてのピーク時の１割から２割程度と、激減している。

また、少子化の影響で京都市内の中学生数も年々減少の傾向であり、過去10年を比較してみると約７割の生徒数になっている。その中で、工業高校を希望する生徒も減少傾向になってきており、より魅力ある工業高校への変革が必要になってきている。

進路においても、過去はほとんどの生徒が就職希望をしていた時代から進学志向が強くなり、約５割の生徒が進学を希望するように

変化してきた。そのために、大学進学に対応できるカリキュラムの編成も求められるようになった。建築科においても、就職希望よりも進学希望が多くなってきている。

この様に、社会の変化とともに、伏見工業高校においても入口と出口の部分で変化が見られようになってきたことが、工業教育改革の背景にあったと思われる。

■建築科から住環境システムコースへ

新学科の基本コンセプトとして『「アタマとテ」で考えることのできる個性豊かな技術者』の育成である。卒業10年後の生徒像を見て、自ら進んで学び、柔軟に考え、実際に作る・試す等の行動・実践を通して課題を追求し、その解決に向けて取り組む姿勢を育て、専門的な知識・技能を有するとととともに、感動する心や他者を理解し、思いやる温かい心をあわせもった人材育成である。

住環境システムコースでは、従来からの建築科としての財産を残しつつ、新たな取り組みを進めながら京都という他にない地域財産をどう残し、活かせるかを学習のポイントに置きながら展開していく。たとえば、京都における住宅を考えるにおいて必要な、建築の知識・技術を基礎から学習したうえで、景観・再生などをテーマにして、調査・収集・分析し、各自が課題を設定する。その課題の解決にむけて新たな学習を進め、そしてプレゼンテーションへとむすびつけていく。その過程においては、学校だけでなく地域・企業・大学・官庁等と連携しながら、まちづくりという大きなテーマに向かって学習する。このように学習の場を広げることにより、創造性豊かな人間形成を目指し、人との関わりの中でコミュニケーション能力を育成し、インターンシップ等で職業観・勤労観を養い幅広い視野をもった技術者を育成することにより京都のまちづくりに貢献する。

また、人に優しい、地球に優しいをテーマに、ユニバーサルデザインの学習や環境・設備などについて、人が社会生活で快適な生活を営むための根幹をなす住宅にスポットをあてて学習をする。

このように伏見工業高校だけでの学習ではなく、外へ出て行き多くの方々の力をおかりしながら協働することが、これからの工業高校には必要であると考えている。「ほんもの」に触れることにより力がつき、まちづくりにも興味がわいてくることを期待する。

■魅力のある工業高校を目指して

小学生や中学生にとって魅力ある工業高校になることが大切である。今は、高等学校は中学生に選ばれる立場にある学校である。教職員一人一人が、伏見工業高校に愛校心を持ち、学校の教育環境すべて大切にしていることを伝えていく努力が大変重要である。また、伏見工業高等学校での教育活動の内容を解りやすく広報し、まちづくりに対して夢をもてる、夢をいっしょに語れる中学生を増やすことが魅力につながっていくのではないか。

地域との連携では、小学校へ出かけ、本校の生徒が小学生と保護者にものづくり体験を中心に指導している。例えば、自分のネームプレート作りやオリジナルハンカチ制作、本物の２分の１の住宅模型の組み立てや簡単な測量、カヌー体験などを実施した。

また、デリバリーアーキテクトという名前で京都の建築士グループと建築科の生徒と教員が一体となって、地域の小学校で出前講座を開いている。住宅模型の組み立てや木工工作体験でCDラックを作った。そして、メインは卒業生一人ひとりの顔を入れたエントランスをデザインした。

区役所と連携し、貸し農地の休憩所を生徒が設計し、NPO法人の方々が建築し、地域住民に開放するといった取組にも参画している。自分で設計したものが形になって活用される喜びは年齢を問わずうれしいものであると考える。

このように、小学生・中学生・高校生とまちづくりに対して夢を持ち続けることの延長線上に、工業高校があるようになりたいと強く思う。自分の将来を考える一連の流れの中に伏見工業高校が位置づけられるようになりたい。

■キャリア実践コース

このコースは、デュアルシステムを用いて学校と企業が協働して生徒を育てるというコースである。１年次に５日間のインターンシップを３回、２・３年次に８週間の長期企業実習を実施している。生徒達は将来働く職種を考えながら企業を選ぶ。企業は大きく分けて、製造業関係・建築関係・電気関係の事業所にお願いをいている。１年次に、この３業種をインターンシップで経験し、２・３年次につなげていく。建築関係を希望する生徒も多く、大工になるために実習へ行く生徒もでてきている。２・３年次の８週間で、しっかりとした技能・技術を身につける生徒もおり、そのことで大工がより好きになり就職にむすびついた生徒もいる。しかし、建築関係では受け入れて下さる企業が少なく、どうしてもつながりのある工務店にお願いをするということになっているのが現状である。今後、このすばらしいデュアルシステムを維持・発展していくためには、協力企業を増やしていくことが重要になっていく。

全国的にはこのデュアルシステムを実施している学校は少ない。「ほんものの力」を生徒達に身につけさせるためにも今後続けられるように努力していきたい。

■おわりに

全国的にみても工業高校の統廃合が多いと思われる。この伝統のある京都市立伏見工業高等学校がこれから発展していくためには、何事においても日本一を目指す意気込みが重要である。平成21年度には、土木系の都市情報システムコースの生徒が、全国測量大会で優勝した。また、進学系の工学探究コースの生徒が、グローバル・エンタープライズ・チャレンジで日本一になり世界大会に出場している。また、部活動でもラグビー部・ボート部・サッカー部が全国大会でがんばっている。

建築系の住環境システムコースでも、他にはない取り組みで日本一を目指していく意気込みをもって日々の教育活動に取り組んでいく。

まちづくり・ものづくりには、限りないロマンと可能性があり、その魅力を探究し、人のために社会のために役に立ちたいという情熱と、技術の限界への冷徹な挑戦心を持つ人材育成のためにがんばっていきたいと考える。

元気のある、勢いのある、魅力ある伏見工業高等学校になりたいと強く願っている。

（みちこし　たかお）

各論

日本的な空間への試み

馬庭建築設計事務所代表取締役
馬庭　稔

私は現在、京都を中心として建築の仕事に携わっていますが、生まれは平成25年の御遷宮にむけ工事が行われている出雲大社がある島根県出雲市大社町です。私が中学生の頃、故福山敏男先生によって国宝だった出雲大社の拝殿の再建が行われたり、菊竹清訓先生による地域の伝統を生かした斬新なデザインの庁ノ舎（ちょうのや）が境内に建設されたことから建築の道を目指しました。大学生時代には、故福山先生のご指導の下で、普段見ることの出来ない名刹をたくさんご紹介いただき、日本の伝統的な木造建築の魅力にのめり込みました。先生が描かれた出雲大社の古代神殿復元図については、実際に実在していたと情熱をもって語られたことが強く印象に残っています。残念なことに出雲大社の境内地からあの巨大な三本柱が発見されたのは、ちょうど先生がお亡くなりになられてからすぐのことでした。先生のご洞察力や創造力には今でも驚きと畏敬の念を抱いております。また、川上貢先生からは書院造りの成立を通して中世文化の流れを理解することができ、西川幸治先生からは都市の歴史的文化財や保存の大切さと、広い視野に立って建築を見ることを学びました。

私が在学中の昭和40年代の前半は高度経済成長の時代であり、東京オリンピックが終わり、大阪万博が進行中でした。当時の普通の建築学生の情報量は限られており、設計分野では近代建築家ル・コルビュジエ、フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエと言った巨匠の影を追うような状況だったと思います。ましてやフィンランドのアルヴァ・アアルトはまだしもスペインバルセロナのアントニ・ガウディの評価は少なかったと思います。ギーディオンの空間・時間・建築の本がもてはやされて私も読みましたが、十分に理解できなかったことを記憶しています。卒業してから後、ロベートヴィンチュリの原書を読み、建築が我々が学んできた知識よりももっと広く活動的であり、歴史的文化的であることが改めて理解できました。私が学生時代にぜひ見たいと思った建物が二つあります。一つは沖縄の守礼門であり、もう一つはフィレンチェにあるブルネレスキの捨子保育院の回廊とその中庭です。



（守礼門 沖縄県）

守礼門は戦争で消失しており戦後に再建されましたが、沖縄の文化を今に伝えており、本土と違った風土性を感ずることができる建築物です。改めて沖縄が海の時代における日本の玄関口だったことが納得できました。

建築学生にとってフィレンチェはルネサンス建築の花咲く歴史的な都市であり、どうしても訪れてみたい街です。ブルネレスキの代表格のサンタ・マリア・デル・フィオーレ大聖堂を訪れた後、すぐに捨子保育院にいき中庭にはいりました。京都の禅寺のような宗教的な静けさはありませんでしたが、イスラム風の連続するアーチやギリシャ風の連柱中庭のスケールはすべて調和がとれていて中世イタリアの人々の息吹が手に取るように伝わってきました。とりわけ回廊と中庭の仕切りの連柱を支える高さ60cm位の連続した土台の役割について注目しておりました。それは回廊の空間に落ち着きをもたらしながら、中庭の開放感を明確に意識させるためのものであり、結果的には回廊と中庭が一体となり親しみのある雰囲気になっていました。


捨子保育院の中庭と回廊　フィレンチェ

こうした場所は日本にはないものであり、中庭より小さな広場と言った方がふさわしいのではないかと思います。そしてブルネレスキは新しい技術を駆使しながらも空間の多様性を考えた偉大な建築家であることがよく伝わりました。私は歴史研育ちなので、研ぎ澄

まされた絶対的な空間よりも多様性を含んだふくらみのある複合的な空間に興味を抱いていましたので、捨子保育院は本当に良い勉強となりました。

＊

今やまるごと地球全体が開発され、地球の環境も悪化しつつあり、資材としての木材も枯渇し始めています。私としては国の内外問わず木はすべて大切にし、適材適所に使うのが良いと考えています。木のことについていくつかお話ししたいと思います。

昭和62年の東福寺の防災工事の延長として、翌年から明治22年に建てられた方丈（建築面積170坪、木造平屋作り）の大改修工事に携わりました。明治22年の建設当初は桧皮葺で計画され用材発注も終っていましたが、火災のことから急遽瓦葺きに変更になり、長い年月の間に構造材の一部の桔木が８本も折れていました。昭和63年の改修は、地盤レベルの調整や柱のころびの修復も含めた大工事になり、屋根の解体を通じ、伝統的な技術である桔木の役割をつぶさに体験することができました。故福山先生から、桔木と墓股は平安のはじめからと教えられ、化粧屋根裏天井から格天井に変わり和様建築が成立したと学びました。日本的な技術の成果をまのあたりにし、こうした地震と共生できる柔構造がどうして平安初期に確立したのか大変興味をそそられました。



京都市文化財建造物保存技術研修センター

日本的な佇まいの良さは軒の出の深さによるものといっても過言ではありません。記録は残っていませんが、平安遷都は建築を含めあらゆる分野で正に新たな世界を切り開く技術革新の時期ではなかったかと推測されてなりません。

今一つの体験は、丁度私の事務所の産寧坂の近くで京都市による文化財建造物保存技術研修センターの設計競技へ応募した時のことです。我々は北山杉の梁が末口と元口の径が同じ大きさに育成されていることを知っていましたので、地元の北山杉の積極的な活用方法を提案し、梁を通し柱に使い、神社・仏閣のような伝統的なしっかりとした素朴で力強い木の文化を伝え、更にはある時は倉庫、或る時は作業部屋など色々な使い方をされ、幾世代もたくましく生きてきた京町屋の屋根裏の構法を取り入れた案を考えました。

今、需要の少ない北山杉の梁は、通し柱として十分利用できますし、何と言ってもその木肌の美しさは京都の文化の象徴だと思っていますのでしっかりとした構えの木造建築を提案しました。

もう一つの試みは、かやぶきの里として全国的に有名な京都府美山町の庁舎のコンペ（現・南丹市美山支所庁舎）で地元の杉材を使って、寄木構法で大きな断面の柱及び桁材を作り、広くて開放的な執務空間を提案しました。当初心配していた地元の杉の小節は不規則ゆえにデザインの一部となり逆に規則正しいボルトの頭が気になりますが、埋木さえすればもっとよくなると確信しました。周辺の景観と調和するため控え目にした外観は日本のふるさとを代表するかやぶきの里の人々に親しまれる庁舎となったことと思います。



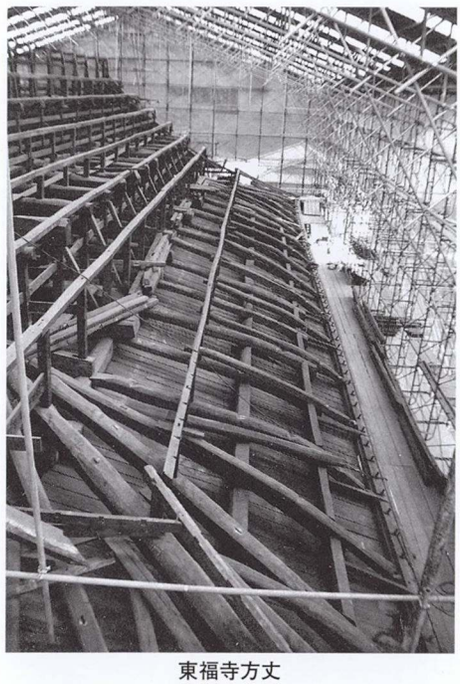
現・南丹市美山支所（旧美山町庁舎）外観

＊

振り返ってみると伝統や大切なものを切り捨て斬新的なものを選んできた30年前よりは、今の時代は日本の伝統文化への理解や、生活スタイルの多様化に伴う新しい木の利用方法や新建材の開発など予想した以上に希望のもてる望ましい状況も生まれてきていますし、コンピューターをはじめ、通信技術の発展によって、今日まで蓄積されてきた伝統的な技術や構法もデータ化され誰でもが利用しやすくなりました。例えば、今まで神社、仏閣の大型木造建築にしか利用されなかった桔木構法を使い、学校や福祉施設、住宅などにもっと応用されれば、広くて安価なオープンテラスができ、そこは快適な交流の場となったり子供の活動的な遊びの場となったりして潤いのある日本的な開放空間が期待できると思います。

将来を担う若い人々を育てるためにも、行政を含め設計及び建設業界の皆が力を合わせ、新しい総合的なビジョンを作り、魅力ある地域づくりを行う必要があると思います。

（原稿のまま）　　（まにわ　みのる）



東福寺方丈



現・南丹市美山支所（旧美山町庁舎）

各論

伝統木造構法を未来につなぐ

数寄屋研究所 心傳庵
木下孝一

■先ず地盤、基礎が大事

数寄屋建築の棟梁として、木造建築を手がけ、研究を続けておりますが、日本の伝統構法が優れているのは、先人の棟梁たちが木造構法の建築材料全ての特性をよく知り、建てる場所の地盤・地質を研究して理解し、土木を含めた構造計画を練り、湿気や地震から建物を守る方法を探りながら、その場所に最適な方法を探っていたことにあると思います。

木造建築は基礎が大事で、地盤の調査なしには、どんなに強度がある建物を建てても、湿気や地震から長期にわたり建物を守ることはできません。

私は昭和22年、16歳で大工の道にはいり、17歳で福井の地震の被災地の真っ只中で建物復興に関与して以来、60年間以上木造建築の研究をしてきました。

昭和52年以来、全国に石場建ての木造伝統構法の建物を作ってきました。石場建てとは、基礎石に土台を用いず柱を直に置いて足固と梁でつなぐ構法で、建築基準法上は近年まで審査が通らないとされてきたものですし、今なお、審査に多くの時間と費用を要する扱いになっています。

新潟中越地震をはじめ、釧路地震や奥尻島沖地震、阪神淡路大震災で直撃を受けた多くの建物の中で、私が作った建物は、有馬の断層の上に建っているものですら全く被害がありませんでした。

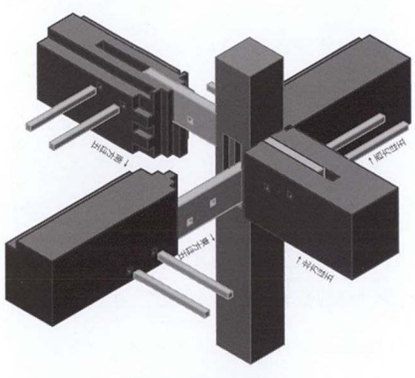
地震が多発するこの国では、建物の耐震性を備えることは不可欠です。木造建築も、地盤に対応した土木工事、基礎工事、建物構造を一体として同時に計画することが必要です。

土壌学、土質学、土木工事は、建築の設計者とは別人が調査・計画することが当たり前のようになっていますが、本来ならば、棟梁や設計者がトータルで考えなければならない重要な問題です。地盤により、基礎工事の計画や木造建物の構造方法も変えますし、何より部材寸法や配置は、どの建物も同一にしたことはありません。地質をはじめ、使用する材料の一つひとつの性質、強度がそれぞれ違うものであるのですから、逆に言えば、木造構法を計画するのは、土壌を含めた素材を知らなければ不可能ということです。

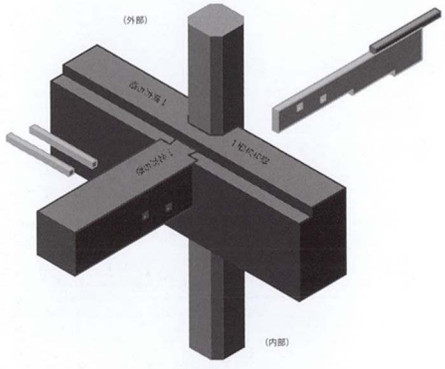
■建築基準法工法（在来工法）の弱点ならびに使用材料の厳選と心傳庵工法

寸法さえあえばいいと、構造材の土台に白太材を使う建物がありますが、コンクリートの基礎は水を含み、常に湿った土台の木材は腐食しやすく、白蟻もつきやすくなり、腐食を防ぐための薬品は、木材の強度を著しく下げます。

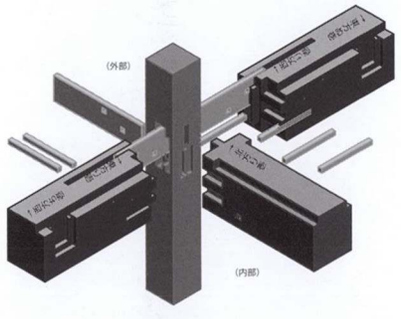
このため基礎は長尺の花崗岩にして、コンクリートだけに頼らず、土台を用いず石場建て足固構法を採用し、建物は足固・壁下地・梁を中心に、全体として柔の計画をしていま



柱・足固め仕口
（柱の欠損が少なく強固な四方差し）



柱・足固め仕口
（蟻落しされた大引を雇枘と栓で引く）



柱・足固め仕口
（七寸角の芯持ちの足固め）

す。木材の組合せと仕口だけでなく、他の材料や壁下地、壁土の強度を総合的に地盤から計画する必要があるのです。

■京町家の伝統工法(小径木と簡易な仕口)

京都には構造材の寸法が小さく、簡易な仕口の木造の町家でも100年以上残っているものが少なくありません。それは、京都・奈良は地盤が固く、過去に大地震も少なかったからで、震度５程度の揺れなら十分に持ちこたえられたというわけです。

■阪神淡路大震災の現地にて

阪神淡路大震災での被害状況を視察し、現場で実際に補修してみて、地盤によって必要な建築強度が全く違うことが明らかにわかりました。

阪急電鉄沿線の山手側は、地盤が固い地域といわれています。しかし地盤の原形を留めていない場所、切土や盛土がしてある場所では、建物に大きな被害がありました。山手側にある敷地面積２千坪ある大邸宅は、山の傾斜地を削り、３分の２を盛土した上に建っていたのですが、L金物の筋交いのために柱が折れ、３寸×１尺６寸の挟梁は折れていました。

しかし、その場所と道路を隔てた、ほんのわずかしか離れていない場所で、構造上補強が必要とも思える建物が、実際に震災の２年前に私が補強したものも含め、12軒建っていましたが、何の被害もなく残っておりました。

阪急電鉄沿線の下手は、地盤が弱く、RC造の美術館さえ被害がありました。同じ関西の中でも、埋立地では特に建物に大きな震災被害を受けていることも確認しました。

地盤の違いにより、これほどの差があることを目の当たりにして、改めて地盤の調査の必要性を感じています。

しかし、そのような個々の事例は詳しく調査もされず、研究者の研究対象になってはいないようです。

■国土交通省による伝統構法性能検証について

木造伝統構法の設計法の作成や性能検証実験を検討する委員会により、新たに性能基準を作成するため、振動実験台の上に建てられた木造建物を揺らして、耐震性を調べる実験がなされたようですが、それは予算の無駄遣いと言わざるを得ません。同じ地盤はありえませんし、画一的な実験によるわずかなケースで基準を作成しては、かえって危険が生じる恐れがあるからです。しかも、前委員長の下での実験と同じメンバーの実務者が集まって行う実験は、多額の税金が使われるだけにその成果には、特別注目しています。

建築基準法が大地震のたびに変えられ、最低の基準という名のもとに改悪を重ね、木造建築といえば筋交いと金物による軸組み工法（在来工法）と思われるようになってしまったように、今回のような委員会の実験で、法の基準が更に悪く変えられるようなことがあってはなりません。

■心傳庵の伝統工法

木造伝統構法は、多額の建築費と手間がかかります。最低でも坪当たり８～10人の大工手間がかかり、関西の大工手間は１人工２万５千円程度は必要です。木材にもある程度、強度のあるものを使おうとすると、坪当たり100万円以上はかかる計算になります。

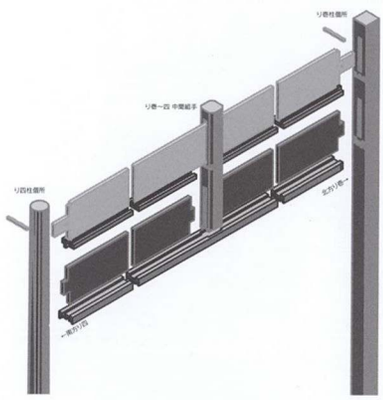
心傳庵構法では、大工手間が少なくとも坪27～28人かかり、坪20人の手間代を頂いても、木材の分は長年の材料の蓄積から持ち出しになることが多い状況です。それでも弟子に私の仕事を見せるためにと、私財を投じているわけです。

こうして200年、300年もつ建物を計画しているというのに、建築確認申請を通すためには大変な時間と費用を要し、技術を受け継ぐはずの若い棟梁を育てることも難しい。

■後継者育成は急務、机上と決定的に違う棟梁育成法

大工の棟梁は学校では育ちません。 若者に机上で構法を教え、材料を見せて、各地の木材を集めてみても、１軒や２軒の建物を建てたくらいでは、木造伝統構法は習得できないのです。

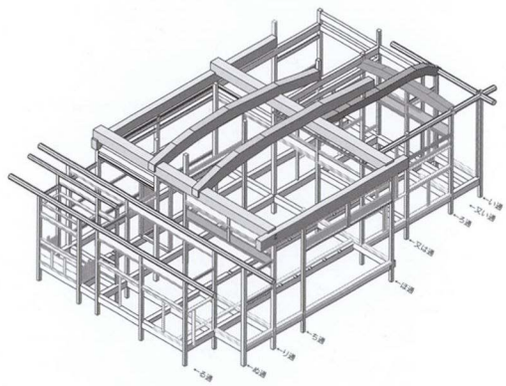
心傳庵では、弟子は徒弟制度の修行のため、４年間は私の家で寝食を共にしているのですが、それでもなかなか育ちません。私自身は



欄間周りの納り
（一本物の力貫に一体化）



入母屋・屋根部分の納り
（天井裏で三層の木による断熱）



「常足亭」の八畳間を中心とした架構
（伝統的な納め方にこだわらず上部の剛性を保つ力貫）

3年の修行で4年目には40坪の農家の住宅を請け負いました。そのころは1日4時間ほどの睡眠時間以外は、夢中になって働きました。

今の若者が棟梁になるには、10年はかかるようですが、やる気があれば5年で十分です。

また、棟梁になるには優秀な者でないといけません。しかし、高学歴だけではその資質があるとはいえません。

ものの考え方や常識を、寝食を共にすることで弟子たちに身に付けさせ、建築にかかわる人や材料を束ねられる棟梁としての心構えを付けさせようとするのですが、これが近年はなかなか上手くいきません。

まず、材料を粗末にしすぎる。自分たちが親方の私財で学んでいるということが理解できていないのです。弟子は、仕事をしているのではなく、勉強しながら食事や洗濯の世話をしてもらっているという謙虚な気持ちがなければなりません。謙虚に人や材料に向かい、材料と対話し、自らが建てた建物は人の命と健康を預かるということを、重く受け止めて欲しいと思っています。

■進化した伝統工法―金閣寺茶室「常足亭」の場合

先人の棟梁たちから受け継いで、私が背負ってきたものを弟子たちに何とか伝えたい。そんな思いで、有馬頼底和尚から世紀に残る技術を残すよう求められたとき、金閣寺の常足亭という茶室で、現在の私の出来うる限りの力を尽くしました。

この建物については、『金閣寺　平成の茶室（新建新聞社）』と題して出版し、公にすることで、少しでも多くの方々の研究に役立つことを願っています。

また、別の寺で、私が設計した建物の耐震強度を構造設計士が計算したところ、木造建築では驚くほど高い強度の結果が出ました。材料の強度や仕口の精度、壁土は考慮して計算されていませんので、全て数値で表すことができるとすれば、更に高い評価が得られるはずです。残念ながら、この建物は施主の都合により公開を断念しましたが、弟子たちは、この結果に自信を持って、次の仕事に取り組んでいるところです。

若者を育て、弟子たちの中から本当の棟梁が育ち、更に弟子を育て、これから長き将来にわたり、木造伝統構法を再興していってくれれば、これに勝る喜びはありません。

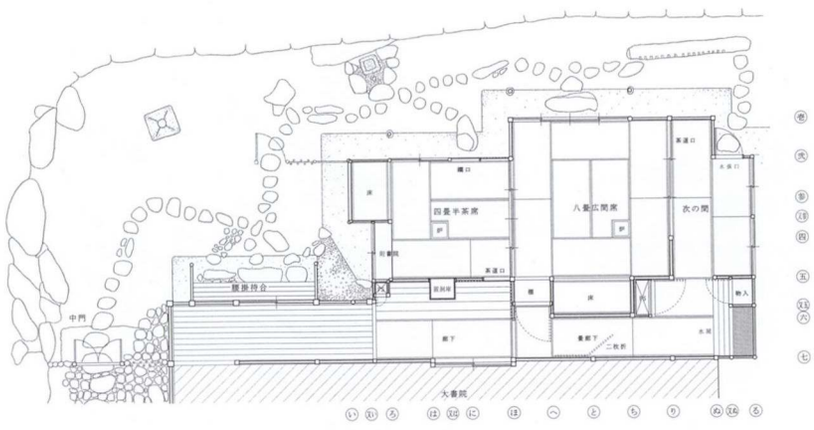
（取材・編集・長瀬博一）

〈素材・木組・建築―そして日本の進む道…棟梁の口伝〉

①地盤は木や竹が教えてくれる
②実際に材料を手にとって触れる
③木の寿命を縮める天敵を知る
④細い柱でも250年生き残る
⑤履歴のわかる木を買う
⑥ベニヤは木を死刑にしたも同然
⑦竹は繊維の強度が命
⑧チタンは半永久的にもつ
⑨石は叩いて使う
⑩火と水に強い土を知る
⑪自分の目で見て、考える
⑫百年前の棕櫚縄はまだ生きていた
⑬銘木を素材にして良さを生かす
⑭大工は労働者ではなく研究者であれ
⑮職人をテストできるのは大工の棟梁だけ
⑯人件費が高すぎるとよい建築ができない
⑰建築に数学とリズムは不可欠
⑱体力がないのは致命傷
⑲25歳までにひとつのことをまとめよ
⑳若い世代が希望を持てる社会に

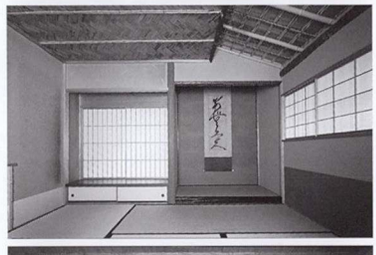
出典：「金閣寺　平成の茶室」（新建新聞社）より

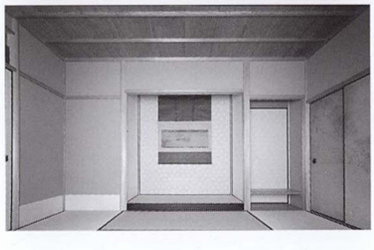
【木下孝一　プロフィール】
1931年　石川県生まれ。
1947年　酒井安太郎氏（京都）に弟子入り。
1954年　仁和寺の茶室、遼廓亭・飛涛亭に感銘を受け平井滋造棟梁に師事する。
1966年　数寄屋師として独立
1989年　㈱数奇屋研究所　心傳庵を設立
主な業績は、酬恩庵一休寺茶室・方丈修理、光悦寺書院・茶室・本堂屋根、三輪休雪邸、大阪城黄金の茶室、祖形待庵、金閣寺茶室・常足亭など。
受賞歴は、京都府伝統産業優秀技術者賞、チタン屋根でグッドデザイン賞、茶室裏千家第5回茶室文化賞、日本建築学会文化賞。



金閣寺「常足亭」平面図


中門


四畳半席


八畳席
（広間席）

476

法令コーナー

「京都市建築物安心安全実施計画」の策定

髙木勝英

京都市都市計画局建築指導部建築安全推進課担当課長

住宅や店舗、オフィスビル等の建築物は、市民生活や社会活動を支える基盤であり、地震や火災にとどまらず、建築物に関する事件事故が発生するたびにその安全性に対する信頼が問われている。加えて、京都市では、歴史都市特有の都市防災面での取組課題として、狭あい道路対策や京町家の保全・再生の課題が挙げられる。また、環境モデル都市として、低炭素社会の構築に向けて既存の建築物を大切に長持ちさせて使い続ける社会経済環境を形成していくことが求められる。

このため、京都市では、学識経験者、関係団体、事業者、指定確認検査機関、行政関係部局の参画のもとに、実務を踏まえた議論・協議を重ね、新築建築物と既存建築物の両方の安心安全対策を総合的かつ効果的に実施する指針となる「京都市建築物安心安全実施計画」（以下、「本計画」という）を平成22年3月に策定した。

なお、本計画は、国土交通省が特定行政庁での策定を推進する「建築行政マネジメント計画」（建築行政における円滑かつ適確な業務の執行を推進するための指針）の趣旨を踏まえた内容としている。

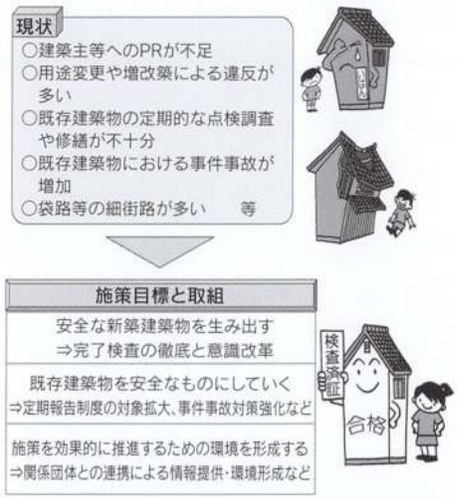
現状の課題と施策目標

京都市における現状の建築物の安心安全面での課題としては、以下の点が挙げられる。

- 建築基準法に基づく検査の意義や必要性が建築主等に十分に認識されていない
- 新築当初からの違反のみならず、後の用途変更や増改築による違反が多い
- 既存建築物の定期的な点検調査や必要に応じた修繕が十分に行われていない
- 既存建築物における事件事故が増えている
- 地震災害時の避難救助・防火防災の問題を抱える袋路等の細街路が多い

これらの現状と課題を解決するための施策目標として、本計画では、3点を掲げた。

・安全な新築建築物を生み出す



・既存建築物を安全なものにしていく

・施策を効果的に推進するための環境を形成する

施策目標を達成するための9の取組

【新築建築物への対策】

（1）多様な機関の連携による完了検査の徹底と建築主や事業者等の意識改革による安全性の確保

建築主や事業者への普及啓発、工事監理の徹底、各種申請手続きにおける検査済証の要件化等に取り組むことにより、完了検査済証の交付率100％の達成を目標とし、新築建築物の安全性を確保する。

【既存建築物への対策】

（2）定期報告制度の対象建築物の拡大と調査データ活用の促進

現状では定期報告制度の対象建築物が少なく、既存建築物の状況把握が十分ではないため、面積要件の引き下げと対象用途の追加を行うことにより、この定期報告の対象となる建築物の範囲を拡大させていく予定である。（現状約600件の対象を10年後に約1万件まで拡大することを想定）

さらに、定期報告を要する建築物で報告がないものには査察等により指導を行い、定期的な点検、検査、調査の実施を徹底させて報告率を上げ、既存建築物の安全性の向上を目指す。併せて既存建築物台帳の整備にも取り組み、既存建築物の安心安全対策の効率的かつ効果的な実施の検討を進めている。

（3）既存違反建築物対策の強化

既存建築物の適正な維持管理を促す啓発等を行うとともに、主に不特定多数の方が利用する特殊建築物への査察を強化し、避難や防火等の違反の是正や既存不適格部分の改善の指導に重点を置いて、既存建築物の安全の確保を図る。

（4）事件・事故対策の推進

建築物における事件事故が発生した場合には、適宜、情報提供や注意喚起を行い、類似の事故の発生のおそれが高い建築物については、点検調査を指示し、その報告を求め、必要に応じて査察する等、事故の予防対策を推し進める。

（5）耐震診断・耐震改修関連施策の着実な展開

平成19年度策定の「京都市建築物耐震改修促進計画」に基づき、市内の住宅・建築物の耐震化を推進し、地震災害に強い都市づくりを進める。

（6）危険建築物対策の強化

地域の活力低下を招き、危険建築物につながる空き家を発生させないという予防的な観点から、地域や関係機関の役割分担と協働のもとで、地域ぐるみの取組を実施する。また、危険建築物の急迫の危害を回避するための修繕や除却について、効果的な指導を行う。

【施策を効果的に推進するための取組】

（7）モデルエリアにおける各種施策の展開

本計画で掲げられた安心安全対策を集中して実施する地域（モデルエリア）を設定し、モデル地域での取組から得られた知見や経験を施策の見直し検討や他地域への展開に活用することで、本計画の実効性を高めていく。

（8）各種法制度や京都基準策定の研究、建築基準法の円滑な運用に対する検討等

歴史都市・京都の特性を踏まえた安心安全対策を推進するため、法制度や京都基準等について研究を重ね、必要な制度の整備や国への要望を行う。

（9）関係団体との連携による情報提供・環境形成の推進

本計画に掲げる取組の進行管理、役割分担、合意形成を行う場として、建築物の安心安全に関係する機関や団体等で構成する「京都市建築物安心安全実施計画推進会議」を設置・運営し、適法で安全な建築物が不動産市場で評価される市場環境の形成や、建築物の安心安全の取組の各種情報発信を行っていく。

おわりに

平成22年7月、「京都市建築物安心安全実施計画推進会議」を設置するとともに、推進会議のもとにテーマごとの分科会を設け、本計画を共通の指針として、行政各部局をはじめ生産から流通の各段階にかかわる事業者団体の参画を得て、公民の役割分担と協働により取組を鋭意進めていくこととしている。

このネットワークを母体として各主体の自立的な取組が活性化され、それらの取組が密に連携し相乗効果が生まれることで、総合的かつ体系的に、また着実に本計画を実行していきたいと考えている。　（たかぎ　かつひで）

384
設備の頁

LED照明の普及状況と今後

竹中祐二
東芝ライテック㈱LED事業部商品担当主務

次世代の照明用光源として期待されるLEDは、省電力、小型軽量、原材料の削減等、環境性能において優れた特長を有している。特に、近年地球温暖化防止の必要性が高まる中、LED照明に対する期待は大きい。

ここでは、主なLED照明の動向について紹介する。まずLED電球は再販市場の販売金額において昨年末に白熱電球を上回っており、現在では電球形蛍光ランプも抜いて電球類では一番の売上金額となってきている。数量ベースでは東芝ライテック㈱推定2009年度全メーカー計で約4百万個程度の販売だったと思われるが、2010年度は1千4百万個ほどになると推定される。特に照明の最需要期である12月は、単月で百万個以上の売上が予測される。

現在、当社の推定ではE26ソケットは約1億5千万個、E17ソケットは約1億個、合計およそ2億5千万個のソケットが使用されていると考えられるが、2012年までには、LED電球の累計販売数量は7千万個程度となり、ソケット占有率では約30%がLED電球となる見込みである。

一方、住宅用照明器具は2009年度市場出荷数量は約30万台程度の出荷があったと推定される。2010年度は各社からの新製品投入がさらに進み、およそ2倍強の70万台の出荷に達すると見られる。このほか、施設・店舗照明及び屋外照明においてもLED照明化が劇的に進行しており、㈱富士経済調べでは、LED照明市場は2015年には09年比約4.2倍の1千3百億円市場となる見込みとなっている。LED照明は今後、HID光源を上回る効率を有する照明となる見込みもある。

以下、最近の主なLED照明の製品情報を紹介する。

ダウンライト

ダウンライトのLED化は、白熱電球40W形相当器具から本格的活用が始まった。現在は器具光束が5,000 lmを超える機種も登場してきている。使用用途や必要照度に応じて選択できるようラインアップを充実させている。**図1**に概要を示す。

主な機種の特長は以下の通りである。

1）白熱電球（40W、60W、100W形）と比較した場合、約85～88%の省エネが実現できる。

2）白熱電球に対し、40倍の40,000時間の長寿命である。

3）電源を器具本体に内蔵し、大幅な省施工を実現し、豊富なラインアップ（軒下用、シーリングダウンライト、高気密SGI形、軒下用SGI形、和風形など）をそろえている。

4）初期設備費は電球ダウンライトの約3.2倍であるが、消費電力が約1／8になるため、電気代が大幅に削減され、約4年で初期設備費増加分を償却し、10年間のトータルコストでは、大幅にLED照明が有利となる。

ベースライト

ダウンライトでは対応できないオフィスや工場、店舗などの主照明（ベース照明）にも使える明るさを持つLEDベースライトをラインアップしている。その特長、お勧め使用場所は以下の通りである。

1）ベース照明にふさわしい高い器具光束を実現（器具光束3,000～6,400 lm）。

2）効率重視タイプでは総合効率84（lm/W）と、Hf蛍光灯器具に相当する効率を実現した。

3）スクエア、ストレート形、埋込形、直付形、高効率、高演色など豊富なラインナップがある。

4）蛍光ランプの約3～4倍の40,000時間の寿命を有する。

5）4線式調光方式の採用で、約5～100%スムーズな連続調光を実現した。あかりセンサや人感センサなどの制御機器と組み合わせた調光で、更なる省エネも可能である。

6）LEDモジュールを着脱可能タイプにし、メンテナンスの効率化を図った。

このような特長を有しているLEDベースライトは、高い照度が必要な大空間、長時間点灯する場所、冷風など温度影響を受けやすい場所、ランプ交換がしにくい場所などの店舗や公共施設、工場・倉庫などに適している。

	器具光束	消費電力	総合効率
300クラス ※白熱灯 40Wクラス	340lm	4.5W	75lm／W
500クラス ※白熱灯 60Wクラス	490lm	6.9W	71lm／W
900クラス ※白熱灯100Wクラス	940lm	13.3W	70lm／W
2,000クラス ※蛍光灯ダウンライト（FHT42W）クラス	2,080lm	26W	80lm／W
6,000クラス ※HIDダウンライト（70W）クラス	5,500lm ※白色相当・効率重視タイプ・中角	67W ※100V時	82lm／W

図1 ダウンライト代表機種スペック一覧

LED電球

市場におけるLED電球の中でトップクラスの製品特長を、以下に示す。

1）一般電球からの置き換え可能なサイズ（外形60mm、全長119mm）を実現した。特に、口金近傍のネック部の寸法を、可能な限り電球に近づけ、器具適合率を向上させた。

2）寿命は40,000時間と、一般電球の約40倍である。

3）消費電力は500 lmクラスで6.4W、および300 lmクラスで4.6Wを達成した。電気代・発熱量・CO_2排出量は白熱電球の約1／6を達成している。8.7Wタイプにおいては810 lmと、業界最高の明るさと効率を達成した（2010年6月現在当社調べ）。**図2**にLED電球8.7Wの明るさと効率を示す。



図2　LED電球8.7Wタイプ明るさと効率

4）周囲温度の影響を受けにくいため、低温でも明るく点灯する。繰り返しの点滅に強く、点滅頻度の多い場所でも活用できる。

LED電球一般電球形8.7Wと白熱電球60W形との経済比較を例として見ると、4万時間使用の場合、ランプ代と電気代のトータルコストではLED電球は1個あたり約3万7千円お得になり、1日8時間、年間3,000時間使用の場合、約2年半で初期投資が回収可能となる（電気料金目安単価0.022円/Whの場合）。

（たけなか　ゆうじ）

17

再読　関西近代建築
――モダンエイジの建築遺産――

南海ビルディング（南海ビル）

山形　政昭

大阪の背骨といわれる御堂筋の南北に位置して、ともに昭和初期に建てられた建築に南海ビルディング（南海ビル）と阪急ビルディング（阪急ビル）がある。わずかに先行して昭和４年（1929）に第１期を竣工させた阪急ビルがタイル張りの構成的な外観を特色としていたのに対し、南海ビルはテラコッタによる付柱とアーチを連ねたネオ・ルネサンス・スタイルの壮観なるものであった。その対比的デザインは御堂筋の時代を物語るものとして、心斎橋におけるかつてのそごうと大丸のように興味深く語られてきたものであった。

そして近年、梅田、難波、天王寺ともどもターミナルゾーンの大規模な開発整備が進行し、見慣れてきた風景の変化に戸惑いを感じるなかで、南海ビルが平成19～21年にかけて復原的手法による再生が図られたことに注目したい。

■南海電鉄と南海ビル

南海電気鉄道の起源は、明治15年に藤田傳三郎らにより発起された大阪堺間鉄道にあり、その後明治17年（1884）我が国初の民間鉄道会社として阪堺鉄道が設立され、翌年12月に難波から大和川間を結ぶ鉄道が開業した。そして明治21年に路線を堺まで延ばしつつ発展し、大正11年の大阪高野鉄道との合併により、和歌山に至る南海線と高野山に至る高野線、及びその他の支線を有して、大阪難波と府下南部、及び和歌山を結ぶ私鉄幹線として歩みを続けている。

開業時の初代難波駅は木造土蔵造りの駅舎で、屋根に時計台を備えた擬洋風意匠の建築であった。それが明治21年に火災焼失後、木造洋風の２代目駅舎が建てられている。そして明治45年（1912）に再度焼失し、３代目駅舎が辰野片岡建築事務所の設計により煉瓦造一部木造２階建ての洋風駅舎として建てられている。

昭和に入り大阪市による御堂筋の拡張整備が進むなかで、南海ビルディングの建設が計画され、久野建築事務所の設計で昭和４年（1929）に起工、第１期中央ブロックが昭和５年、第２期西側ブロックが昭和６年、終盤の第３期東側ブロックが昭和７年７月９日に竣工している。館内に入店した高島屋は第１期工事の竣工の昭和５年に早くも仮開店しており、昭和７年に本開店した。

この南海ビルの建設は、南海鉄道の創立50周年を目前にした建築事業であったのであり、その記念出版誌『開通五十年』（昭和11年）の巻頭部を飾り、次のように記されていた。

「日本第一の商都大大阪の心臓部を形成する難波界隈の目眩ぐるしき雑踏！人の渦巻き自動車の流れ！四六時中間断なき熱閙殷賑を睥睨して群峯を圧する富嶽の如く端然たる威容誇らかに御堂筋に直面してその南端に聳立せるものは難波駅、南海ビルデヰングである。……このビルデヰングは復興式鉄骨鉄筋混擬土造



①南海ビル南東側外観
（現在／当初写真③参照）



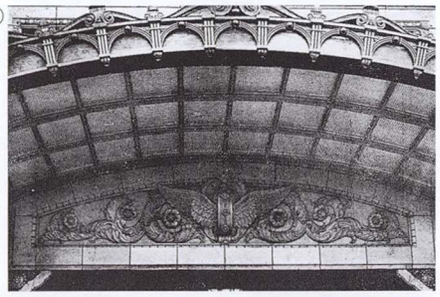
②南海ビル南西側外観（現在）

所在地／大阪市中央区難波５-１-６０
設計／久野建築事務所（久野節）
施工／大林組
竣工／昭和７年７月
構造／鉄骨鉄筋コンクリート造
規模／７階建塔屋１階建、地下２階
種別／ビルディング

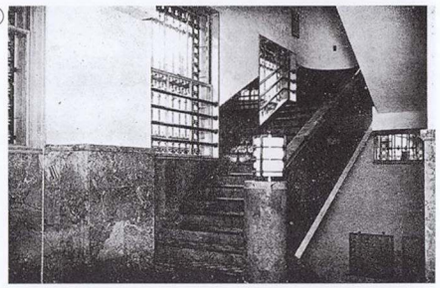


③正面全景

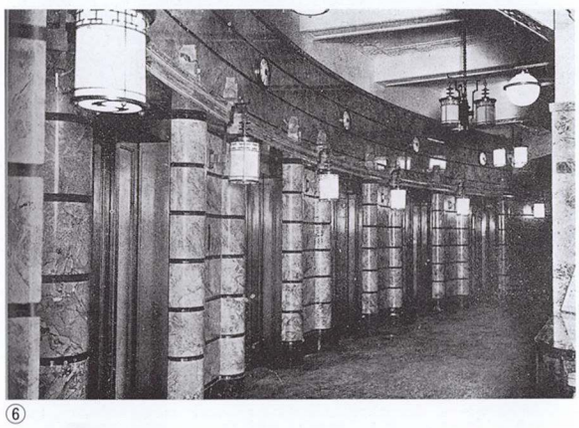
「大阪の南玄関である。道頓堀心斎橋といふ繁華地の中心へ乗り込んでゐる南海鉄道のターミナルビルディングで而も階上には高島屋百貨店といふ陣容。……優雅なアーチ柱型の並立。七階建の大建築である。鉄骨硝子の庇が前面全部に廻ってゐるのも停車場の風格を備へてゐる。」



④



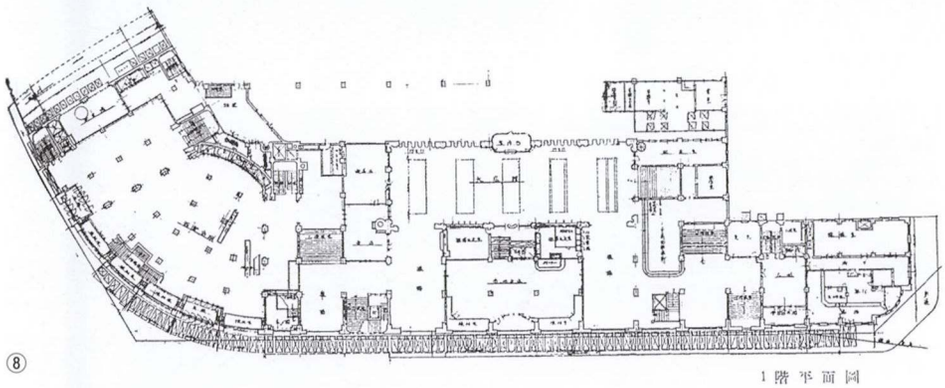
⑤



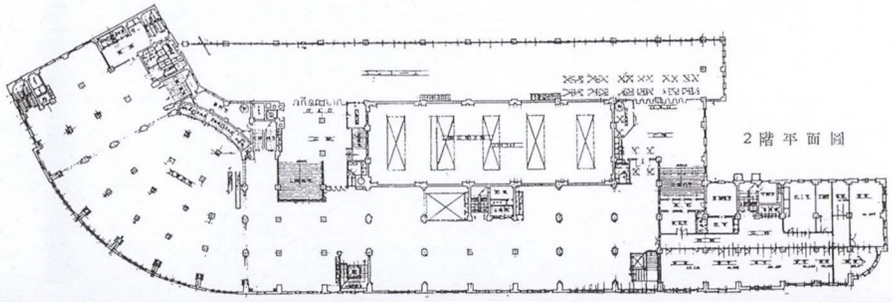
⑥



⑦



1階平面図



2階平面図

⑧

④大入口上テラコッタ

「入口正面庇を見上げたもので、鉄骨硝子の庇の様子が明瞭に理解出来る。入口上の楣の装飾は南海鉄道のマークを型取って図案化されたものである。」

⑤百貨店A階段

「壁、親柱手摺は大理石を、踏面にはゴムタイルを使用してある。面格子も見へる。」

（本階段はスティール窓サッシとともに内部に現存する数少ない部分。写真⑮参照）

⑥百貨店1階エレベーターホール

⑦駅ホール全景

「壁面や柱型には大理石を張ってある。写真の左側は切符売場、右側は改集札口と案内所、中央突き当りは喫茶店になってゐる。」

⑧1階平面図、2階平面図

「建築と社会」第15輯11号（昭和7年11月号）より



⑨



⑩



⑪



⑫



⑬



⑭



⑮

⑨百貨店7階サロン内部
（『建築と社会』昭和7年11月号より）
「ベニヤ板を巧みに張り目地に金属線で雷文形に止めてゐる、明るい大食堂である。集会場同様冷暖房装置をしてある。」

⑩直営喫茶店内部
（『建築と社会』昭和7年11月号より）
「駅ホールに面する喫茶店で壁天井銀色テツコー壁紙は、カウンターの大理石、パイプ家具とよく調和してゐる。」

⑪現在の駅ホール（当初写真⑦参照）

⑫駅への入口上部
テラコッタの図案中央に南海電鉄の社章「羽車」を置いている

⑬屋上に残る装飾塔（写真②参照）

⑭昭和32年本館西に増築された南海会館に残る当初外観

⑮現存している旧A階段（当初写真⑤参照）

り、間口九十六間、高さ地上百尺延坪約壱萬三千坪を算する近代的建物であって、その面積の広大なることに於いては蓋し当今大阪第一と称することも敢えて溢美でもあるまい。」

つまり、間口173m、７階建て、塔上部までの高さ42メートルの南海ビルは南海電鉄のシンボルとして、また拠点ターミナルビルとして計画されたことに加えて、幹線道路の御堂筋はもとより、「戎橋筋・南海通り等の繁華街は何れも此処を中心として放射し、道頓堀・千日前等の歓楽境並びに模範的商店街たる心斎橋筋など何れも徒歩数分を出でざる圏内に抱擁せられ此処に文化的脈膊を高らかに打たせているのである」（前掲）と特筆されたように大阪屈指の繁華街の中心を担う、ミナミの要衝となる建築であった。そして当時近隣で目をひく近代建築に精華小学校（昭和４年）、大阪歌舞伎座（昭和７年）があり、それぞれに瓦屋根の街区を圧する偉観を呈していたのである。

■南海ビルの建築

竣工まもなく『建築と社会』（昭和７年11月号）誌上において「南海ビルディング」が竣工の写真など詳しく報じられ、そして建築主サイドの臨時建設事務所所員坪井誠一の「南海ビルディング建築工事を終へて」などが収録されており、それを元に建築当初の概要と特色を記すこととする。

本建築は長大な北側を正面として東西に長く、東を道路に沿って湾曲配置された高層ビルである。１階中央部２ヶ所を難波駅への出入り口とし、ガラスの採光天窓をもつヴォールト天井の駅ホールを中心に、１、２階の中央部から西側にかけて駅舎機能を収め、建物東側及び中央部３階以上に高島屋百貨店が入店、西側３～６階には南海鉄道事務所が入っていた。地下１階は百貨店食堂及び市営地下鉄への通路があり、昭和10年10月に地下鉄難波駅と直結されたのである。また７階には集会場（ホール）とサロンと称した高級食堂があった。昭和７年にここを訪れた北尾鐐之助がこのサロンを次のように紹介している。

「これは恐らく大阪のデパートの食堂中、最上級に属しているばかりでなく、どこの食堂に行くよりも、尚ほ叮重なサーヴィス振りを発揮している。……そして、この食堂では、毎日メニューが変わる。和洋とも一円の定食の外に凝った一品料理がある。一円のビーフステーキがある（三十銭が相場である）……。この高級主義の経営は、果たして客がだんだんと減って、損失を被るようになった。しかし、どこまでも、この高級主義をやって行こうといふ、意地を張っているところに、高島屋といふ伝統の暖簾のきらめきがある」（『近代大阪』昭和７年）

本建築の外観はテラコッタ（伊奈製陶製作）を主要外壁材とし、意匠様式は「近世復興式」すなわちネオ・ルネサンス・スタイルをとる。７階高さの外壁は基部、中間層、最上層の３層に構成され、軒頂部にはアンテフィクス飾りを並べたコーニス（軒飾り）が回る。３階より６階部分に当たる中間層23スパン（柱間）のうち14スパンの外壁面には長大なコリント式ピラスター（付柱）とラウンド・アーチを連ね、柱頭上部には花綱装飾をもつ飾り壷、アーチ頂部にはスクロール状のキーストン飾りが配されている。こうした壁面構成、及びクラシックなオーナメント装飾により格調高くかつ華やかな洋風スタイルにまとめられている。また駅入り口となる両玄関部回りには、「羽車」の社章を用いた盾形装飾やスティール製の青海波装飾グリル及びブラケット型装飾灯具など特色ある意匠があり、１層目の上部には二重ガラスを用いた長大な鋼製銅板打出し仕上げの大庇が設置されていた。それは歩行者に供する機能とともに、沿道を飾る設備として注目されるものであった。

■久野節の作品として

設計者久野建築事務所と久野節については、昭和11年に刊行された『近代建築畫譜』誌上の広告誌面に業務履歴など案内広告があり、また氏の没後に久野宗彦氏によって記された「父のこと」（『鉄道建築ニュース』1962年８号）からも、氏の略歴が知られている。

久野節は明治15年（1882）２月21日、大阪堺に生まれ、同40年に東京帝国大学工科大学建築学科を卒業し、同44年まで千葉県技師となる。明治44年（1911）８月に鉄道院技師に転じ、大正９年には建築課初代課長に就き、各地の国鉄、鉄道建築を設計指導した。昭和２年、45歳にして独立し、久野建築事務所を東京に開設、その後も鉄道関係の建築を中心に活躍を続けた後、昭和16年に事務所を閉じ、戦時中には静岡県伊東に転居、昭和36年に永眠している。

鉄道省在職中の主な作品には、山陽ホテル、大阪・名古屋・仙台各鉄道病院などがある。代表的な建築には大阪鉄道局（昭和３年、設計は大正15年）があり、褐色スクラッチタイル張り５階建ての堂々たるものであった。独立後の主な作品には、大阪鉄道病院（昭和４年）、参宮急行電鉄近鉄宇治山田駅（現近畿日本鉄道、昭和５年）、南海ビルディング（昭和７年）、蒲郡観光ホテル（現蒲郡プリンスホテル、昭和９年）、そして母校堺中学の同窓会館である堺中学三丘会館（昭和９年）などを残している。

それらのなかで現存しているものは南海ビルのほか宇治山田駅、蒲郡プリンスホテルなどに限られ、本建築は鉄道ターミナル建築の代表的なものとなっている。ところで南海ビルの内部意匠には、すでに失われている和風意匠を織り交ぜた特色あるアールデコ的表現があった。それを彷彿させる多彩でかつモダンなインテリアが蒲郡プリンスホテルに残されている。蒲郡ホテルは和風城郭風屋根をもつクラッシクホテルであるが、かつて鉄道省国際観光局が企画推進した国際観光ホテルの一つであり、南海ビルに続く久野作品として関連のある興味深いものなのである。

■戦後の歩みと、近年の修復

戦後に至り昭和30年（1955）、本ビル南に隣接して百貨店の増床と、劇場等を収めた南海会館（坂倉準三建築研究所）が計画され、昭和32年に竣工している。続いて昭和50年代に難波駅改造整備工事が行われている。駅ホームの全面的拡張整備のため２階に位置した軌道を３階に移設したもので、それによって従来の駅ホーム上の鉄骨アーチの上屋は姿を消し、高島屋の店内もほとんど全て改装されてきたのであるが、テラコッタとタイル張りによる外観意匠は当初以来保持されてきた。

また屋上南よりに設置されていた装飾塔は、手摺金物など失うもののテラコッタの当初意匠をよくとどめ、正面外観において大時計とともに史的意匠の要点となっている。

そして近年にかけて本建築の外壁修理工事、内部での耐震補強工事、避難安全対策工事など、一連のリニューアル工事が行われた。

なかでも外壁修理は、本建築の最も特色ある部分と位置づけられ、テラコッタによる付柱及び役物、平板材の復原的修理を第一の課題として進められた。加えて戦後張り替えられていた２丁掛けタイルの軽量乾式構法による整備、１層目腰積み花崗岩の修理と一部補修、窓サッシの整備に際しては当初スティール枠をとどめ、その前面に新設サッシが設置されている。また大庇は昭和55年、モザイク壁画「南海沿線の祭り」の寄贈設置に際して新しいものとなっていたが、今回の整備においては当初の意匠と二重ガラス張りの工法に倣い製作され、斬新かつクラシックなイメージの再現が果たされている。

資料
・『建築と社会』昭和７年11月号
・南海鉄道株式会社『開通五十年』昭和11年
・南海鉄道株式会社『南海鉄道発達史』昭和13年
・池田恵次「南海ターミナルビル再生計画」『建築と社会』平成21年８月号

（やまがた　まさあき／大阪芸術大学建築学科教授）

雑多な風景と小さな寄り合い場
―カマン！メディアセンターの日常―

「あら不思議、ティッシュで花をさかせて…」「あちゃ、へたくそやな！」。いつの間にかマジックショーが始まる。その傍では、棚を修理するおじさんや、絵を描く若者、その若者にちょっかいを出すおじいさんなど、何とも形容しがたい状況が繰り広げられている。ここは、あいりん地域の端、天王寺や日本橋にも程近い動物園前商店街の一角に開かれたカマン！メディアセンター（愛称：カマメ！）である。小さな寄り合い場として、様々な人たちが日々出入りしている。

あいりん地域は、日雇い労働者が集まる寄せ場を起源に形成された。現在は単身で高齢の男性が多く暮らす。商店街では、そんなおじさんたちをはじめ、買物に来たおばさんや、近辺の安宿を利用する若者や外国人旅行客、裏路地から出てきた子どもらが行き来する。

カマメ！が場所開きしたのは2009年６月である。帽子屋、おでん屋、立ち飲み屋などが並ぶ商店街に、突如として現れた手づくりの寄り合い場は、近所ではちょっとした噂になった。行きかうおじさんたちと比べれば圧倒的に若い大学生らが、セルフビルドで小さな空き店舗の改修を始めると、「おい、そのカンナへたくそだな、かしてみろ！」と腕に覚えのあるおじさんの指導が入る。次第に、縁台風の床や、棚などが形をあらわし、近所のおばさんに頂いたこたつ机や座布団が所狭しとなびはじめると、最初は胡散臭そうに見ていた人も、「ここは何するところなん？」とか、「新聞に出ていたね、見たよ！」などと、一歩乗り出し、話かけてくれるようになる。オリジナルキャラクターのハリボテを身にまとった街頭テレビを通りに向け、懐かしい映像を流すと人だかりができ、自然と会話が弾む。それが今では、血の気の多い人も、声のでかい人も、演歌歌手をめざす人も、食べ物をせびる人も、ここに集まってくる。そして、冒頭のような状況といった具合だ。

この状況、いろんな人が「つながる」というより、「ぶつかっている」といった感じが近い。例えば、カマメ！には、釜凹バンド（かまぼこバンド）というグループがよく練習にくる。デコボコ人生を歩んできたおじさんたちを中心に、その場に居合わせた若い連中なども巻き込み、不特定多数がガヤガヤとはじめる。音楽のほうはというと、好きかってに音を出して、お世辞にも上手いとは言えない。いや、最近は多少うまくなっているが、ボコボコな感じが、味わいを出している。きれいなハーモニーではなく、独特な衝突感が人間くさくて面白い。







この雑多さが織り成す風景は、地域の特徴であり、カマメ！にもつながっている。ちらっと聞いた話では、全国各地から集まった日雇い労働者が２万人、外国人旅行客は年間８万泊、見学などの来訪者は年間３万人ほどらしい。人びとの動きのスケールがでかい。また、この辺りを表す呼ばれ方も様々だ。西成、釜ヶ崎、新今宮、萩之茶屋などと、状況に応じて変化する。そこには偏見もあれば希望もある。ここまで多様な顔を持つ地域は珍しいだろう。ふるさともバラバラ、この地域に来た事情もバラバラ、抱えるしんどさも、夢も想いもバラバラだ。そんな様々な人びとが流動する雑多さはやはりフツウと違う。しかし、それがこのまちの風景であり、魅力なのだと思う。ここは、関わり続けたいと思う数少ない地域である。

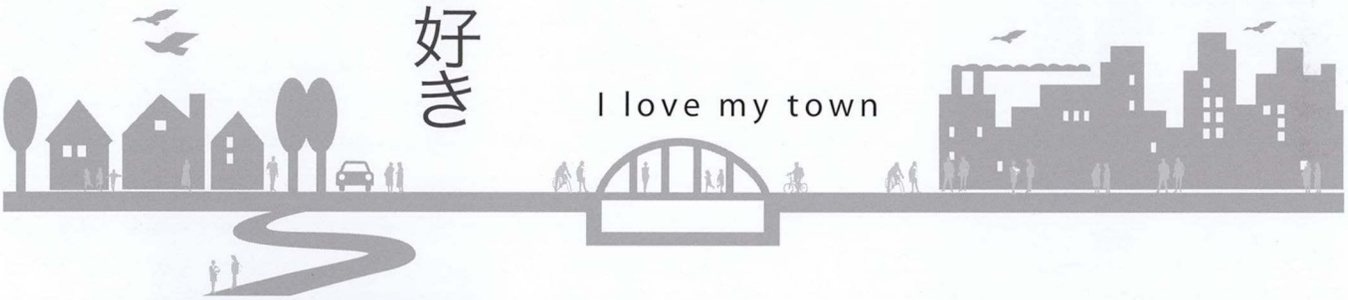
まちづくり活動に
取り組む人々。

12

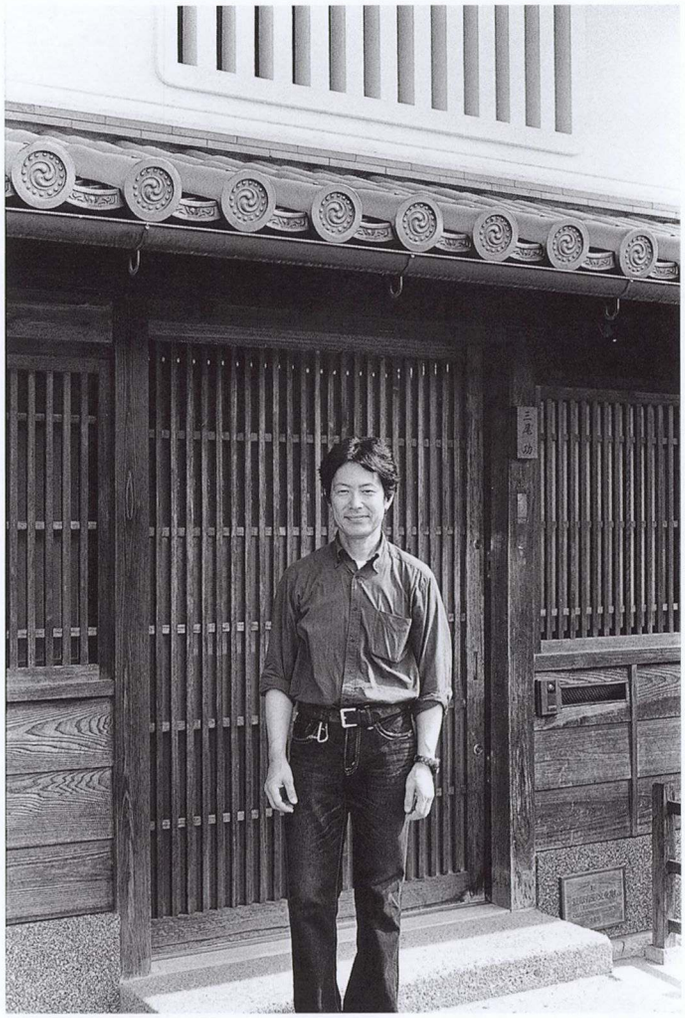
カマン！メディアセンター

平川隆啓（ひらかわ たかあき）

このまちが好き



中西 重裕　—NAKANISHI SHIGEHIRO—



「三尾邸」にて

学歴
1981年　長崎総合科学大学卒業

経歴
1981～1989年　伊藤喜三郎建築研究所
1989年　スタジオハルピン設立
2007年　K&Nアーキテクツに名称変更
1997～2006年　和歌山県立第二工業高校　非常勤講師
2002～2006年　和歌山大学システム工学部　非常勤講師

受賞歴
2007年　第３回和歌山市優良建築物賞　受賞　集合住宅プラージュ和歌浦
2006年　現代日本の建築家　優秀建築選　2006　集合住宅プラージュ和歌浦

著書
「わかやまワクワク探検隊」（和歌山新報社）　2002年

聞き手　古谷隆祥（昭和設計）
写真撮影 河合止揚

“まち”に学び、“まち”をつたえる

和歌山南部、枯木灘の入江や岩礁が入り組んだ風景は、日本三景のひとつ松島より綺麗だという。生まれ育った“まち”に愛着をもつ。そんな建築士中西重裕氏にインタビューを行った。

東京の組織設計事務所を経て30歳を過ぎた頃、地元に戻り独立を果たす。高校卒業後、大学、社会人と地元を離れていたこともあり、事務所開設当初は仕事が無かったという。まずは故郷をよく知ろうと和歌山の“まち”を調べ始めるが、建築探偵団のような資料が和歌山には無かった。ならば自分が、と思うあたりに中西氏の故郷への思いの大きさを窺い知る。その活動は「わくわく探検隊」と称し、和歌山新報に平成８年３月から平成19年２月までの11年間、月２回紙面に連載されている。長期間継続していることに敬服するとともに、この活動を通して“まち”とともに“ひと”とのつながりも構築する良い機会になったのだろう。

「三尾邸」など古い建物を再生する仕事はこの活動の延長線上にある。再生の仕方は原型を忠実に残すことも、新しい形で残すこともあり得るという。戦前の写真をみると瓦屋根に洋館が混在していても違和感がないように、“まち”として落ち着いた印象を与えることが大切であり、原型を残すことに強いこだわりがあるわけではない。だから「三尾邸」のように登録文化財でありながら、高齢者の住まいとしても成立する形が見いだせたのではないだろうか。

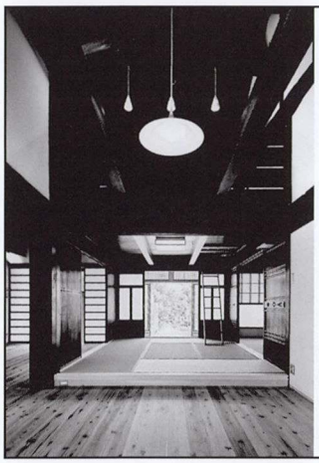
中西重裕氏の設計は最初からコンセプトがあるわけではない。周囲の状況を把握しその環境の中で思うことを形にする。シャープに綺麗に納めたいが無理をしないし、極端なことはしない。若かりし頃の失敗や経験、古い建物から学んだ結果、辿り着いたスタンスであり、建築や環境との関係性を表しているかもしれない。

和歌の浦にある「プラージュ和歌浦」はそんな距離感だからこそ成立した形かもしれない。“まち”の渦中に身を置きながら、万葉の時代から和歌にも詠まれる和歌の浦の大切さを誰よりも認識し、周囲に説明を重ね、構築してきた“ひと”とのつながりを活かした結果ではないだろうか。そんなバランスが施主も地元も納得する形を生み出したのだろう。和歌の浦の景観保全に尽力された、故多田道夫先生がこの建物を認めてくれたと話すその姿に、言葉に表れはしなかったが、背負っていたものの大きさを少し感じとれた気がする。

建築士は仕事だけしていては駄目だという。より社会と積極的に関わりをもたないと“まち”の姿は見えてこない。関わることで建築士自身も“まち”から学ぶことができるし、その積み重ねが結果として建築士の地位向上につながるという。

そして、中西重裕氏は今も仕事の傍らで、和歌山の歴史的建造物を映像に納めて上映会を実施するという活動を実践している。戦前の写真から当時の“まち”が想像できたように後世に映像を残すことは重要である。昭和30年頃までの建物には良いものも多いが、維持・管理は資産がないと難しい。建物の保存に建築士が直接、貢献できることは少ないが、それでも次世代に“まち”の良さを引き継ぐことが出来れば何か残せるのではないか。価値ある建物であることを積極的にオーナーや次世代に伝えることで、建築士の出来る役割を果たそうとしている。

将来の夢は建物が風景の一部となる桂離宮のように、時間をかけて完成させる庭園づくりという。きっとそこには和歌山の“まち”を感じるではないだろうか。松島より綺麗な“まち”の姿を。



明治42年竣工 この約100年の間に時代は明治、大正、昭和を経て平成へと移り変わっている。日本人の生活様式にも変化は見られるが、日本人の遺伝子の中に自然と共に生き、素材を大切にする心は大切に残されている。

100年の歴史の重みを次の世代へ繋ぎ、
100年後へ伝えていきたい。

古民家再生

総合建設業
株式会社 浅井良工務店

〒640-8287 和歌山市築港3丁目29-4
TEL. 073-431-3429／FAX. 073-431-8660
info@asairyo.com http://www.asairyo.com/

あなたの夢をかなえます。

it creates your dream

株式会社 江川組

住まいの増改築の事も
お気軽にご相談下さい

〒649-6326 和歌山市和佐中233－1
TEL (073)477-1104 FAX (073)477-3250
E-mail egawa@lake.ocn.ne.jp

未来に夢を・・・ 愛と貢献の可能性

黒

株式会社 駒場工務店

代表取締役 駒場一仁

和歌山県日高郡日高川町高津尾 1400 TEL.0738-54-0314 FAX.0738-54-0185
http://www.komaba-k.com E-Mail : info@komaba-k.com

TERAMAE Construction Inc.

有限会社テラマエ建設

〒641-0055 和歌山県和歌山市和歌川町5-48
TEL073-444-4785
FAX073-414-0982
Mailto:mail@teramae-inc.com

お知らせ information

▶「札幌聖ミカエル教会とアントニン・レーモンド展」—三重大学レーモンドホールと木造モダニズムの系譜—

今年春に東京のギャラリーA[4]で開催した第3回木造モダニズム建築展の巡回展が、アントニン・レーモンド設計の三重大学レーモンドホール（旧三重県立大学図書館、登録有形文化財、1951年竣工）で開催される。
アントニン・レーモンドの木造モダニズムの系譜を主題とする展示会、講演会、特別公開は、いずれも参加費無料、事前申込不要。

●展示会
会期　2010年9月14日(火)～9月25日(土)
12：00～16：00　休祝日とも
会場　三重大学三翠ホールホワイエ

●講演会「レーモンドと日本」
日時　2010年9月18日(土)　13：30～15：00
会場　三重大学三翠ホール小ホール
講師　松隈　洋（京都工芸繊維大学大学院教授）

●特別公開
会期　2010年9月14日(火)～9月25日(土)
12：00～16：00　休祝日とも
会場　三重大学レーモンドホール

問い合わせは、三重大学附属図書館研究開発室sugawara@lib.mie-u.ac.jpへ。


三重大学レーモンドホール

▶展示会「ENE－WAY 2010」開催

ENE－WAY実行委員会〈中部電力、中部地方電気使用合理化委員会、㈶ヒートポンプ・蓄熱センターで構成〉は、名古屋市国際展示場で展示会「ENE－WAY 2010」を開催。
展示会では、低炭素社会実現の切り札として注目される電気式高効率ヒートポンプなどの高効率エネルギー機器をはじめ、工場、ビル、厨房など各分野のエネルギー有効活用策を紹介する。入場無料。

会　期　2010年9月8日(水)～9月10日(金)
10：00～17：00(最終日は16：30まで)
会　場　ポートメッセなごや
(名古屋市国際展示場)
名古屋市港区金城ふ頭2-2

▶UCFA設立記念企画 第1回ニッポン建設映像祭

1930～1970年に記録された工事映像記録を収集・分析し、近代都市の形成過程を研究すべく、アンダーコンストラクション・フィルム・アーカイブ（UCFA）が設立され、初めての催しが開かれる。
日本建築協会ほかの後援。

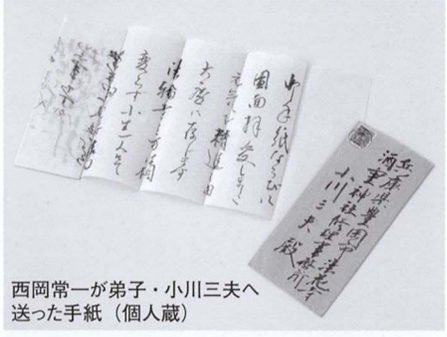
日　時　2010年8月21日(土)
開演12：00、終了17：00予定
会　場　ガスビルホール(大阪ガスビル3階)
大阪市中央区平野町4-1-2
参加費　1000円
定　員　200名（事前申込制）

▶プログラム
セッション①95分
「大阪瓦斯ビルディング建設の記録」
「新しいまち船場 船場センタービル」
セッション②105分
「千里山団地建設記録」「大林組と万国博」
セッション③60分
「東京タワー建設記録」「東京カテドラル」

問い合わせと申込みは、UCFA事務局（高岡伸一建築設計事務所・TEL&FAX 06-6534-5258、e-mail:mail@s-takaoka.net）へ。

▶竹中大工道具館 開館25周年記念巡回展 棟梁～堂宮大工の世界～

数百年の風雪に耐える寺院や神社を築くため、組織をまとめ上げながら難事業に立ち向かう堂宮大工棟梁の仕事と人物像を、迫力のある模型や貴重な遺品、映像などで紹介する。
会場には、西岡常一手書きの技術ノートや図面、愛用した道具なども展示される。
この展覧会は東京会場から始まり、札幌、神戸、そして11月には名古屋を巡回する。公式サイトhttp://www.dougukan.jp/toryo/に詳しい情報がアップされるので、参照されたい。


西岡常一が弟子・小川三夫へ送った手紙（個人蔵）

●神戸会場（月曜休館・祝日の場合は開館）
2010年10月2日(土)～11月14日（日）
竹中大工道具館
神戸市中央区中山手通4-18-25

入場料300円、大高生200円、小中生100円
読者プレゼントとして、安田泰幸画「大工道具物語」（絵ハガキ８枚入りセット）あり。
希望者は日本建築協会へ。

■「西岡常一棟梁の仕事を巡る」見学会
西岡棟梁の唯一の内弟子であった小川三夫氏（鵤工舎前舎主）とともに巡る。現場での西岡棟梁の話を、小川棟梁だからこそ聞ける機会だ。

日　時　2010年**10**月 **9** 日（土）
　　9：00～18：00
集合地　奈良（解散も）
見学先　法隆寺、法輪寺、薬師寺
定　員　30名（事前申込制）
参加費　大人4500円（バス代・拝観料・旅行保険込み、昼食代は別）
申込み　９月10日消印有効。ウェブ、または往復葉書（往信―イベント名・氏名・フリガナ・〒・住所・電話番号・性別・生年月日、返信―申込み者の住所等）で、〒650-0004 神戸市中央区中山手通4-18-25 竹中大工道具館「巡回展見学会」係へ。

▶「新発見!なにわの考古学2010」



大坂城山里丸は現在の大阪城天守閣の北側に位置し、豊臣秀頼と淀君が自害した悲劇の場所としても伝えられる。現地表面より約3m下で大坂夏の陣（1615年）の焼土層が見つかり、そこから大量の焼けひずんだ瓦や壁土が出土した。

平成21年度遺跡発掘調査で新たに見つかった古墳や埴輪（平野区長原遺跡・喜連東遺跡）、難波京にかかわる奈良時代の土器群（中央区大坂城跡下層）、平安時代の緑釉陶器や輸入磁器（平野区長原遺跡）など、約300点の出土資料と発掘現場の写真パネルを展示する。

会　期　2010年7月28日～2010年**9**月**20**日（月）
　　9：30～17：00（金曜日は20：00まで）
　　毎週火曜日休館
会　場　大阪歴史博物館８階特集展示室
　　大阪市中央区大手前4-1-32
　　地下鉄谷町線・中央線「谷町四丁目」駅下車
観覧料　常設展示観覧料600円、高大生400円
　　中学生以下・市内在住65歳以上は無料
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶「大和百景―館蔵品で巡る奈良・大和路―」

奈良県立美術館が所蔵する洋画・日本画・版画の中から、奈良・大和路を描いた作品約100点が展示される。会期中一部展示替えあり。



笹島喜平「梅花御堂」1971年

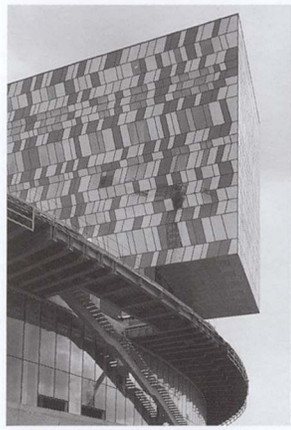
会　期　2010年７月17日～ **9** 月**12**日（日）
　　9：00～17：00
　　（8／5～8／14は19：00まで開館）
　　月曜日休館（ただし８／９は開館）
会　場　奈良県立美術館
　　奈良市登大路町10-6
入館料　400円、大高生250円、中小生150円
展　示　絹谷幸二「大和遠望」、須田剋太「新緑の東大寺」、池田遥邨「芳野山春風」、山下新太郎「奈良公園の藤」、平山郁夫「大和路を描く 斑鳩の里 法輪寺の塔」など
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶きる、折る、建てる 飛び出せ紙ワザ 茶谷正洋・亜矢 折り紙建築展

建築家の故・茶谷正洋氏（1934～2008年）が1980年代に考案した『折り紙建築』は、現在、娘の亜矢氏に受け継がれ制作されている。
完成予想図のスケッチから始まり、一枚の真っ白な紙に図画を引きカッターナイフと定規を使い［きる・折る］作業を繰り返して、そして紙を二つに折りたたみそっと開くと、建物の全貌が立体的に飛び出すその「紙ワザ」展が平城遷都1300年の奈良で開催されている。
今回の展覧会では茶谷正洋・亜矢氏の作品約150点を通して、奈良の世界遺産をはじめ、国内外の名建築を紹介する。

会　期　2010年７月16日～ **8** 月**15**日（日）
　　10：00～17：30　月曜日休館
会　場　奈良市美術館
　　奈良市二条大路南1-3-1
　　イトーヨーカドー奈良店５階
　　近鉄「新大宮」駅下車、西へ徒歩12分
観覧料　500円、高校生以下は無料

▶デイヴィッド・アジャイ展 OUTPUT





デイヴィッド・アジャイ
©Ed Reeve
モスクワ経営管理大学院 SKOLKOVO
モスクワ、ロシア、2010年完成予定
©Ed Reeve

イギリスの現代建築をリードする建築家デイヴィッド・アジャイ氏の個展が日本で初めて実現した。
デイヴィッド・アジャイ氏は1966年タンザニアに生まれ、1979年にロンドンに渡り建築を学ぶ。英国王立芸術大学に在学中に交換留学生として来日。８カ月間、京都市立芸術大学で日本美術と建築を学ぶ。その作品はアフリカの多様な文化・風土や美術をはじめ、現代アートや音楽、日本で学んだ茶室建築に至るまで多方面からの影響が反映されている。彼の建築の特徴は、素材と色彩の大胆な組み合わせと光の操作によって、シークエンスごとに移り変わる多様な空間体験を生み出している点にある。
展覧会「OUTPUT」では「光と都市」をテーマに、初期の代表作から最新のプロジェクトまでアジャイ氏の主要な作品を網羅し、建築模型、図面、実作の写真が展示されている。入場は無料。

会　期　2010年７月８日～ **9** 月**18**日（土）
　　11:00～18:00（金曜日は19:00まで）
　　月・日曜日と８／８～８／16は休館
会　場　GALLERY・MA
　　（TOTO乃木坂ビル３階）
　　東京都港区南青山1-24-3
展　示　ダーティ・ハウス、アイデア・ストア・ホワイトチャペル通り、デンバー現代美術館、LNハウスほか

▶松伯美術館「未来へつなぐ花鳥画」

松伯美術館は、近畿日本鉄道創業100周年記念に、過去16回の松伯美術館花鳥画公募展を振り返る。

会　期　2010年８月３日～ **9** 月**20**日（月・祝）
　　10：00～17：00　月曜日は休館
会　場　松伯美術館　TEL 0742-41-6666
　　奈良市登美ケ丘2-1-4

入館料　高大生を含む大人800円
　　小中生400円
展　示　若手花鳥画家の育成を目指す松伯美術館花鳥画公募展の出品作品の中から、上村淳之館長が選抜した本画約25点が展示される。
　　宮腰葵「葱畑の薺」鈴木周子「近くの池で」関　友道「晴日」小山美和子「聴音」枝木俊憲「叢」只内寿則「秋韻」増田貴司「夕まづめ」松岡歩「寂寞」石田育代「秋の日」ほか併設展示として上村松園、松篁、淳之の本画約6点も紹介される予定。
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。


平成21年第5回柳沢優子「闇舞」

▶日本メキシコ交流400周年記念「古代メキシコ・オルメカ文明展 マヤへの道」


巨石人頭像（オルメカヘッド）
紀元前1200年頃
高さ176㎝
photo:CONACULTA、INAH
ハラパ人類学博物館蔵

オルメカ文明とは、マヤ文明を遡ること紀元前1200年頃メキシコ湾岸地方に突然現れた、新大陸でもっとも初期の古代文明である。
マヤ文明はオルメカから始まったのか！展覧会はマヤから時代を遡り、オルメカの世界を巡る。
そして再び「マヤへの道」をたどり、最後は2012年「マヤ暦による世界の終末」問題など様々な謎にも挑戦する。

会　期　2010年7月31日～**9月26日**（日）
　　10:00～18:00（金曜日は19:30まで）
　　月曜休室（祝日は開室・翌日休室）
会　場　京都文化博物館
　　京都市中京区三条高倉
入場料　1300円、大高生800円、中小生500円
展　示　ジャガー神像、ヒスイのマスクなどの玉製品、彩色土器、様々な土偶など約130点を展示。
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶2010 イタリア・ボローニャ国際絵本原画展と〈特別展示〉タシエス

イタリア・ボローニャ国際絵本原画展は、世界で唯一の子どもの本専門の国際見本市ボローニャ・ブックフェアに併設された絵本原画のコンクール展―5点1組にしたイラストを応募すれば誰でも審査を受けられる公募展―の入選作品で構成されている。
このイタリア・ボローニャ国際絵本原画展を、1978年以来、西宮市大谷記念美術館では毎年開催している。今年は58カ国2454名が応募し、日本人13名を含む20カ国87名の作家が入選した。

■2010イタリア・ボローニャ国際絵本原画展
会　期　2010年**8月21日**（土）～**9月26日**（日）
　　10：00～17：00（金曜は19：00まで）
　　水曜日休館
会　場　西宮市大谷記念美術館
　　西宮市中浜町4-38
　　TEL0798-33-0164
　　阪神電車「香櫨園」駅南西徒歩約6分
入館料　800円、高大生600円、小中生400円


「ふしぎな文字の箱」フィリップ・ジョルダーノ（イタリア）

■〈特別展示〉タシエス
2009年ブラチスラバ世界絵本原画展でグランプリを受賞したスペインのイラストレーター、タシエスの原画26点を紹介。
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

▶兵庫県立美術館で「水木しげる・妖怪図鑑」

■「水木しげる・妖怪図鑑」


《バックベアードと吸血鬼エリート》©水木プロダクション

妖怪漫画のヒット作で知られる水木しげるは、昭和20年代に神戸市兵庫区水木通で紙芝居作家として活動し、兵庫県ともゆかりが深い。彼の画業60周年と米寿を記念して、描き続けた妖怪画にスポットを当てる展覧会が開催されている。
また、各種の百鬼夜行絵巻や妖怪の登場する浮世絵など、水木に影響を与えた過去の美術作品も展示し、わが国で連綿と受け継がれてきた妖怪画という文化を考察する。

会　期　2010年7月31日～**10月3日**（日）
　　10：00～18：00（金・土は20：00まで）
　　月曜日休館
　　（ただし9/20開館・9/21休館）
会　場　兵庫県立美術館
　　神戸市中央区脇浜海岸通1-1-1
　　阪神電車「岩屋」駅から徒歩8分
観覧料　1300円、大学生900円、高校生と65歳以上650円、中学生以下は無料
展　示　《釣瓶落とし》《うわん》《川太郎》《きたろう10のちから》《妖怪大決戦》ほか。伊藤若冲《付喪神図》―8/31より展示、鳥山石燕《百器徒然袋》ほか
招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

■2010年度コレクション展Ⅱ


ブラジル日系人画家の半田知雄《農民》1956年

会　期　2010年7月17日～**11月7日**（日）
　　月曜日休館（9/20開館、10/11開館）
会　場　兵庫県立美術館・常設展示室
観覧料　500円、大学生400円、高校生250円
　　65歳以上250円、小学生以下無料
展　示　①「新収蔵品から見た現代」
　　ヴィクトール・バリモフ《作品（労働者らは工場から帰る）》ほか
　　②「ブラジル日系人画家の系譜」
　　赤川コレクションより約45点
　　③「美術の中のかたち―金氏徹平展」
　　金氏徹平（1978年生まれ）の立体と平面作品
コレクション展招待券は日本建築協会（TEL06-6946-6981）へ。

総　会

第１回通常総会
６月18日（金）16：00～16：32
出席者　中井会長ほか739名
（1,476口　委任状含む）
場　所　OMMビル20階　東天紅
議　事（１）平成21年度事業報告（案）
（２）平成21年度収支決算報告(案)
（３）役員選任

理事会

第１回通常理事会
６月２日（水）15：00～15：40
出席者　中井会長ほか44名
（委任状含む）
場　所　OMMビル２階　３号会議室
議　事（１）平成21年度事業報告（案）
（２）平成21年度収支決算報告(案)
（３）役員選任
（４）総会等の開催

臨時理事会

第１回臨時理事会
６月22日（火）16：40～16：55
出席者　中井会長ほか45名
（委任状含む）
場　所　OMMビル20階　東天紅
議　事（１）会長選任
（２）役付役員選任及び会長職務代行
（３）常設委員長ならびに常任理事委嘱
（４）理事の会務分掌

評議員会

第１回定時評議員会
６月２日（水）14：00～14：40
出席者　中井会長・三木議長ほか39名
（委任状含む）
場　所　OMMビル２階　３号会議室
議　事（１）評議員会議長互選
（２）役員（顧問・理事・監事）候補者推薦
（３）報告事項：平成21年度事業報告（案）
（４）報告事項：平成21年収支決算報告（案）

編集委員会

第３回編集委員会
６月９日（水）18：00～19：30
出席者　設楽委員長ほか６名
議　事（１）７月号特集「建築と石」の報告
（２）８月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」の報告
（３）９～12月号特集
（４）各小委員会・分科会の報告
（５）収支状況報告

第３回法令分科会
６月14日（月）15：00～17：45
出席者　吉田純幹事ほか７名
議　事（１）「法令コーナー」の企画
（２）10月号法令特集の企画
（３）情報交換

第３回施工材料分科会
６月８日（火）17：00～18：00
出席者　吉田正友幹事ほか５名
議　事　11月号特集「LED」企画テーマと企画構成検討

第３回構造分科会
６月４日（金）18：00～19：40
出席者　石田幹事ほか４名
議　事（１）「構造の頁」の企画
（２）12月号構造特集の企画

第３回設備分科会
６月２日（水）18：00～19：40
出席者　赤澤幹事ほか４名
議　事（１）2010年６月号「太陽光発電」特集経過報告
（２）「設備の頁」の企画
（３）「講習会」の企画
（４）見学会の企画
（５）新企画の提案
（６）超高層・高層マンションやオフィスビル計画時への提案
（７）“測定機器シリーズ”

第３回作品作風小委員会
６月24日（木）19：00～20：00
出席者　池上副委員長ほか４名
議　事（１）作品の掲載状況並びに掲載予定の報告
（２）「gallery」掲載報告・予定

第３回広告企画小委員会
６月９日（水）17：00～18：00
出席者　設楽委員長ほか３名
議　事（１）７月号特集「建築と石」
（２）８月号特集「再生・受け継ぐ・繋がる」
（３）広告掲載状況の報告
（４）収支状況の報告

第３回10年委員会
６月３日（木）18：30～20：00
出席者　設楽委員長ほか５名
議　事　大阪そうせい（創生）プロジェクトの今後の進め方

出版委員会

第３回出版委員会
６月17日（木）18：00～19：00
出席者　上原委員長ほか６名
議　事（１）進行中のテーマ
（２）その他

教育委員会

第２回講習会小委員会
６月29日（火）18：00～19：30
出席者　山形委員長ほか６名
議　事（１）テキスト改訂について
（２）本年度の方針

特別委員会

第２回「建築と社会」史料研究会
６月15日（火）18：00～19：40
出席者　山形委員長ほか３名
議　事　今後の連載企画内容検討

第12回　群　像（インタビュー）
６月28日（月）19：30～20：30
出席者　古谷隆祥（インタビュアー）ほか５名
議　事　関西の建築界「群像」登場者の人間像に迫るためのインタビュー
一級建築士事務所K＆Nアーキテクツ　中西重裕

第１回　群　像
６月16日（水）19：00～20：30
出席者　本多「関西の建築界/群像」編集委員会代表ほか７名
議　事　群像登場者の選出

見学会

「対龍山荘」茶室見学会
６月19日（土）13：30～16：45
講　師　中村昌生／京都工芸繊維大学名誉教授
参加者　34名
出席者　瀬戸川委員長ほか５名

入会者（敬称略）

〔個人正会員〕
伊藤 勇人　㈱エイプラス・プロパティ
北野 昌直　㈱日刊建設通信新聞社
古関 幸雄　㈱大林組
軸丸 久司　㈱日建設計
藤木　暁　㈱大林組
三谷 勝章　㈱大林組
森　貴久　大和ハウス工業㈱

「建築と社会」誌

特集一覧●1988~2009

大正6年3月に誕生した日本建築協会（当時・関西建築協会）の、機関誌は大正6年9月に「関西建築協会雑誌」と題して創刊された。大正8年に「日本建築協会雑誌」、さらに1年後には「建築と社会」と改題し、今日に至っている。

取り上げてきた特集テーマは下記のとおりで、バックナンバー購入希望は、日本建築協会事務局（TEL 06-6946-6981、FAX 06-6946-6984）まで。販売価格は1200円（送料・消費税含）。

号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1988 vol.69	●ホテル物語	●軟弱地盤と基礎 ●文化と伝統—東海からの報告	●設備におけるLCCとリフレッシュ ●東畑建築事務所作品集	●建物の外装 リフレッシュ＊	●都心居住	●中国地方の展望とひろしまのまちなみ	●21世紀への照明 ＊	●制振＊	●超高層住宅を考える	●集合住宅のリフレッシュ＊ ●大阪府営善	●第35回青年技術者 ●800号記念＊	●讀賣テレビ
1989 vol.70	●夢をのせる輸送設備	●リゾート事情 ●竹中工務店 創立90周年記念	●色の復権 ●東海の新建築と伝統技術＊	●省力化のための材料・工法	●まちづくりと法	●博覧会とまちづくり	●都市環境創造と設備I	●建築とアート	●構造の省力化 ●鹿島建設大阪支店 建築設計部作品集	●都市環境創造と設備II ●ユーザー参加のハウジング	●第36回青年技術者	●最近の博覧会パビリオン
1990 vol.71	●商品化住宅のデザイン＊	●ニュータウン・ルネサンス	●東海の都市景観 ●佐賀市文化会館＊	●スケール感	●プレハブ住宅技術の現在と未来	●国際花と緑の博覧会	●建築家のための設備知識—中規模オフィスビルによるケーススタディー	●高強度化—設計の多様化をめざして—＊	●やわらかな住宅管理・ユーザーの役割	●都市のナイス・プレイス ●兵庫県営緒の歩み	●第37回青年技術者 ●和歌山県の展望と景観＊	●高級感—建物の顔：感性の時代を迎えての外装材
1991 vol.72	●新しい都市空間づくり—I—	●オフィス・プレジャー ●新しい都市空間づくりII— ●建築の風景	●東海支部復活30周年記念	●大阪東京海上ビルディング	●今、京都 ●建築家のための設備知識—複合商業ビルによるケーススタディー	●建築と土木 ●毎日放送本社ビル ●近畿地方建設局営繕部	●一般号＊	●建築をめぐるトラブルとその解決 ●建設現場のイメージアップ作戦	●空間のアイデンティティ ●きんでん写真集 ●大建設計40周年	●自治体住宅政策への提言 ●大林組創業100年記念	●建築と土木—構造技術の世界— ●第38回青年技術者	●スリムでタフなコンクリート ●21世紀の住まいを考えるシンポジウム
1992 vol.73	●夢物語—人がかわる、まちがかわる—	●こだわりのインテリア ●近畿の郵政建築15年の歩み	●建築とデザイン—東海支部—＊	●建築家のための設備知識—集合高層住宅の設備システム—	●地球環境時代の建築	●街創り、住まい創り—住宅・都市整備公団関西支社10周年—	●木構造を使ってみませんか—集成材による構造—＊	●接着—建築分野への限りなき可能性	●中国地方の町並みと建築家の「語り、夢、作品」 ＊	●屋台一仮設の魅力に学ぶ—ハウジングのメインストリームを探る	●いま建築教育に何が期待されているか	●京のかたちと色
1993 vol.74	●第39回青年技術者 ●東畑建築事務所創立65周年記念作品集	●大阪府営緒	●東海の美術館・博物館	●市民劇場の舞台設備	●環境—限りある自然と建築とのかかわり	●都市のスカイライン	●映画の中のインテリア ●けいはんなプラザ・住友ホール	●建築の再生—構造技術の役割— ●大阪市営緒	●国際的パートナーシップの可能性	●福祉のまちづくり	●都市型住宅再考	●第40回青年技術者 ●環境—人にやさしい空間創造をめざして
1994 vol.75	●コピー文化の新時代 ●広島の街創りアジア競技大会	●九州のインスタレーションと競	●伊勢・神宮式年遷宮と神宮界隈＊	●建築のエネルギーシステム	●明日に向かって—会員作品 ＊	●いま、医療施設は	●住空間における居どころへの視点	●まちなかの看板 ●竹中工務店の集合住宅	●水と建築 ●日本建築総合試験所	●建築設備のCGシミュレーション ●村野、森建築事務所	●構造美—建築の中の美 ●集合住宅団地リニューアル	●第41回青年技術者 ●関西国際空港
1995 vol.76	●光がつくる風合の世界＊	●音—騒音から操音/創音へ	●飛騨・美濃—まちの活性化と地方文化 ＊	●トイレから見た都市文化	●トイレ空間	●接合 ●コスモタワー	●ユニバーサルデザインとは	●私の空間作法—会員作品	●新しい「都市・建築」の視点＊	●建築構造と社会の接点 ●日建設計＊	●ライフラインと建築設備＊	●第42回青年技術者 ●滋賀県建築課
1996 vol.77	●阪神大震災から学ぶ＊	●大阪府住宅供給公社創立30周年記念＊	●遠江—その地方振興と文化 ＊	●立体駐車場設備 ●大建設計	●災害！非常時に生きる法体系 ●OAPタワーズ	●いま、プールがおもしろい	●住まいの未来像	●マルチメディアがつくる世界	●キーコンセプトの新時代	●最新の大規模スポーツ競技施設の設備	●私の空間作法'96 ●九州の元気 ●りんくうの3作品	●第43回青年技術者 ●近畿地建営繕部
1997 vol.78	●建築のロングライフ化をめざして	●鉄ものがたり＊	●東海支部会員作品 ●金沢・金昆—風土・文化とまちなみ・建築＊	●創立80周年記念/建築と私と社会—80人の眼—＊	●木造建築物の伝統技術とその将来	●住む空間の復興—法・制度の運用と新たな展開へ— ●住都公団関西支社	●素材の不思議 ●大阪ドーム	●新エネルギー ●住宅・都市整備公団改革への提言	●クロスワード都市OSAKA ＊	●モザイク都市の住むかたち ●昭和設計40周年	●私の空間作法—会員作品—	●第44回青年技術者 ●京都駅ビル
1998 vol.79	●新しいまちづくりの予感 ●東畑建築事務所創立65周年	●Concrete ●九州とわたし、そして建築	●東海支部会員作品 ●信州—諏訪とその周辺—	●街並みの演出—最近の外構材料	●生活環境の安全・安心	●地球環境保全と建築	●心と体を元気にするインテリア	●建築設備—ビルメンテナンスの立場から	●建築への証言'98—21世紀に向けて	●ゆれをとめる—たえる技術からかわす技術へ	●私の空間作法 ●2001年の医療施設	●第45回青年技術者 ●駅とともに歩んだJR西日本の12年
1999 vol.80	●“らしさ”のデザイン ●建築を綾どる小粋なモノの仕掛人	●大阪市都市整備局	●東海支部会員作品'99 ●北信濃—街並み修景と地域文化の再構築	●都市のパブリック	●関西建築界の流れと東畑謙三の足跡をたどる	●大阪城天守閣平成の大改修	●改正建築基準法—まちづくり・すまいづくりへの展開—	●私の目でみた環境問題	●アーバンインテリア—都市空間としてのインテリア	●木とともに	●私の空間作法	●第46回青年技術者
2000 vol.81	●21世紀のデザインの動向を見る ●安井建築設計事務所創業75周年	●中国支部—しまなみ海道と中国地方の街づくり—	●東海支部会員作品2000 ●越中・富山—地域文化の振興と新たな施設づくりの流れ	●こころを癒す環境デザイン	●測る—測定方法と測定結果が意味するもの—	●スケルトン&インフィル	●改正建築基準法—パートII—	●100年後へのメッセージ ●日建設計創業100周年	●来世紀に引き継ぐ—わざ、もの、こころ—	●時間	●私の空間作法—会員作品— ●21世紀の高齢者の居住環境	●第47回青年技術者
2001 vol.82	●エヌ・ティ・ティファシリティーズ	●21世紀の建築設計教育	●東海支部会員作品 ●岐阜・大垣	●IT社会におけるきずな	●自然素材をめぐる「もの・わざ・ひと」	●成熟社会をささえるまちづくり	●現代の日本の空間・文化を探る	●環境—近未来に向けて今できること— ●大建設計—作品特集1996~2001—	●建築の力 都市の力	●緊張 ●都市基盤整備公団関西支社	●私の空間作法—会員作品—	●第48回青年技術者 ●NHK大阪放送会館・大阪歴史博物館＊
2002 vol.83	●国土交通省近畿地方整備局営繕部＊	●再生・リサイクル	●東海支部会員作品 ●愛知・名古屋	●生活環境の安全・安心—パート2—	●塗装のいろいろ	●都市再生に向けた建築基準法集団規定のあり方	●いま、インテリアデザインは ●漆町 リバープレイス	●建築をささえるセンサー	●建築とボランティア	●時を超えて〜サステナブルエンジニアリングの現在〜	●私の空間作法—会員作品—	●第49回青年技術者 ●大阪市中央公会堂
2003 vol.84	●東畑建築事務所創立70周年	●九州の地域づくり・まちづくり	●東海支部会員作品2003 ●愛知・名古屋—この地の文化・芸術と建築・街づくりを考える—	●サスティナビリティ〜次世代に引き継ぐ都市・建築・暮らしのデザイン〜	●建築と五感	●都市計画法及び建築基準法等の改正	●コンバージョン—インテリアから発信するまちなみ—	●介護と建築・設備	●建築とノスタルジー〜建築の主観的価値について〜	●力と楽しくつき合う方法	●私の空間作法—会員作品—	●第50回青年技術者＋青年技術者顕彰50年
2004 vol.85	●大阪市住宅局	●都市緑化	●東海支部会員作品 ●愛・地球博＊	●省リスクな「まち再生」＊	●リニューアルの技	●地域住民主体のまちづくりと支援制度	●Product Design＋1	●銭湯〜心地よさを求めて〜	●建築家とは何か	●巨大地震にそなえて	●私の空間作法—会員作品—	●第51回青年技術者
2005 vol.86	●震災から10年	●「健やか」 ●長崎医療センター	●東海支部会員作品2005 ●東海における施設づくりへの新たな試み	●建築の経済化	●住まい方の変化	●人工栽培	●次世代に伝える「木」の建築 ●「建築と社会」1000号記念	●改正建築基準法と景観緑三法	●火災から守る	●構造の過去から未来へ＊	●私の空間作法—会員作品—	●第52回青年技術者
2006 vol.87	●都市環境デザインと参加のまちづくり	●「地方空港の時代」〜まちと共存する空港づくり〜	●東海支部会員作品2006＋東海支部特集3部作＊	●都市再生の本質〜光と影のはざまで〜	●変容する家族形態とあたらしいライフスタイル	●身近な省エネルギー〜エネルギーをたくわえ、有効利用する〜	●設計図が伝えるもの	●建築物の安全・安心＊	●第53回青年技術者	●「セキュリティ」	●もしも…〜構造が未来へつなぐ夢〜	●私の空間作法—会員作品—
2007 vol.88	●光り輝く京都の景観まちづくり	●学校新時代	●東海支部会員作品2007＋東海支部特集3部作	●創立90周年記念—この10年、これからの10年	●あそび考	●こだわりが創る住まいのカタチ	●住まいの設備と空間の移り変わり	●建築系雑誌が伝えるもの	●建築基準法等大改正	●第54回青年技術者	●ガラスを考える	●楽しい構造の世界
2008 vol.89	●私の空間作法—会員作品—	●PFI事業、その後	●東海支部会員作品2008＋東海支部特集3部作	●まちづくり2011年宣言	●新ホテル物語	●設備に役立つ地震対策	●中国地方を訪ね歩いて見えるもの ●小林聖心女子学院	●建築と景観	●第55回青年技術者	●木造住宅を巡って	●建築においてROBOTが活躍する日は来るのか？	●自然と戦う構造
2009 vol.90	●私の空間作法—会員作品— ●京阪電車 中之島線—着線が拓く中之島新時代—	●水の都 にぎわいのある未来に向けて	●東海—TOKAIオムニバス	●楽しい福祉	●体感するインテリア	●建築空間が求める空気環境（空気質）	●建築と水	●実用レベルで展開される施工管理のIT化	●第56回青年技術者	●地域の歴史資産を活かしたまちづくり	●第16回会員作品特集“私の空間作法”	●構造家日記〜頭の中をのぞいてみたら〜

＊は欠号

空調・衛生・クリーンルーム設備
（設計・施工）

朝日工業社

本社・本店　東京都港区浜松町1-25-7　電話03(3432)5711
大阪支社　大阪市淀川区加島1-58-59　電話06(6302)2270
支　　店　北海道/東北/北関東/横浜/名古屋/中国/九州

電気・空調・衛生・防災・産業廃水設備
設　計　施　工

ダイダン株式会社

本店・大阪本社　〒550-0002 大阪市西区江戸堀1丁目9番25号　電話(06)6441-8231
東京本社　〒102-0071 東京都千代田区富士見２丁目15番10号　電話(03)3261-8231
支　　社　名古屋・福岡
支　　店　札幌・仙台・新潟・大宮・千葉・横浜・金沢・京都・神戸・天理・岡山・広島・高松・熊本
営業所　帯広・函館・青森・秋田・盛岡・前橋・長野・静岡・豊田・津・富山・福井・徳山・松山・高知・北九州・鹿児島・那覇
出張所　旭川・福島・川崎・松江・徳島・下関・長崎・大分・宮崎
海外支店　シンガポール・ホンコン
技術研究所　〒354-0044 埼玉県入間郡三芳町大字北永井390番地　電話(0492)58-1511

www.naniwa.com
We have hope

■印刷事業　ポスター、カタログ、パンフレット、書籍、年鑑、社史、雑誌、文字、画像データ処理
■メディア事業　SPプランニング・コンサルティング、ITソリューション、web及びメディアコンテンツ企画制作

株式会社NPCコーポレーション
本　社　〒530-0043 大阪市北区天満1-9-19
tel:(06)6351-7271(代)　fax:(06)6352-7479
第二ビル　〒530-0043 大阪市北区天満1-11-8
tel:(06)6351-0128(代)　fax:(06)6351-0208
東京支社　〒105-0004 東京都港区浜松町1-2-1 一光浜松町ビル7F
tel:(03)3433-5211(代)　fax:(03)5776-7733
(旧社名ナニワ印刷㈱、日本データネット㈱)

地球環境を守り、100年建築に貢献する
NACL のアルミ表面処理
株式会社日本電気化学工業所
http://nacl.jp　E-mail:sc@nacl.co.jp
本部営業部　〒560-0036 大阪府豊中市蛍池西町2丁目7番26号 NACLﾋﾞﾙ2階
TEL (06)6843-1235(代) FAX (06)6853-1632
東京事務所　〒111-0051 東京都台東区蔵前2丁目7-2 東京NACLﾋﾞﾙ
TEL (03)3862-0978(代) FAX (03)3862-7098

デンカCSAファミリー製品

●デンカCSA（膨張性混和材）　コンクリートのひびわれ防止に
●デンカタスコン（グラウト用無収縮材）　鉄骨ベース、逆打部の充填モルタルに
●デンカキューテックス（止水・補修用急硬セメント）　コンクリート躯体の漏水補修に
●デンカES（土質安定用急硬材）　地盤補強用薬注入
●デンカΣ1000（製品用超高度混和材）　コンクリートパイルの早期出荷とハイモメント製造用に

電気化学工業株式会社
近畿地区販売店

金森藤平商事株式会社
TEL 大阪（06）6332－6861
TEL 東京（03）3272－8501

浜宗産業株式会社
TEL 本社・京都・京丹後（0772）72－2220
舞　鶴（0773）76－0133

小浦産業株式会社
TEL 大阪（06）6443－6181

中部電力

電気が成功への架け橋になる　We Assist You

ENE-WAY 2010

そこは電気のソリューションモール



省エネ・省コスト・省CO_2　企業の課題を最新電化システムで解決!

入場無料　9/8(水)▶10(金)

会場　ポートメッセなごや　名古屋市国際展示場
（名古屋市港区金城ふ頭2丁目2番地）

時間　10:00～17:00（最終日は16:30にて閉場します。）

主催／ENE-WAY 実行委員会
（中部電力　中部地方電気使用合理化委員会　財団法人ヒートポンプ・蓄熱センター）

ビジエネ　検索　http://www.chuden.co.jp/bizene/

特別講演

8(水)



今後の日本経済の行方
評論家
宮崎 哲弥氏

9(木)



日本を斬る 世界を読む
政治評論家・テレビ解説者
三宅 久之氏

10(金)



森からみる未来
作家・探検家
地球いきもの応援団
C・W ニコル氏

キッチンステージ

8(水)　四川飯店グループ総料理長　菰田 欣也氏



9(木)　ザ・プリンス パークタワー東京 名誉総料理長　柘植 末利氏



10(金)　レストラン中村孝明 オーナーシェフ　中村 孝明氏



ソリューションステージ（会期中毎日2回開催）

8(水)▶10(金)

電化導入やエネルギー運用改善によりお客さまの課題解決を行った事例をご紹介します。

株式会社綿半ホームエイドさま　株式会社ツルヤさま	～寒冷地でもぞくぞく誕生! スーパーのオール電化～
学校法人南山学園 南山大学附属小学校さま	～電気の"見える化"で実現! 運用改善で最適全館空調～
王子特殊紙株式会社 東海工場 岩渕製造所さま	～蒸気から電気へ! 工場の生産現場でもエコキュートが大活躍～
株式会社モンテール 美濃加茂工場さま	～おいしさと感動と、地球環境のため"プレヒート給湯システム"～
アイシン・エィ・ダブリュ株式会社 蒲郡工場さま	～省エネの追求! 洗浄工程用ヒートポンプ開発の記録～
工場の省エネ提案事例（給湯・加熱編）	～省エネの壁! 生産工程の省エネを阻害しているものは何か?～
株式会社なごや矢場とんさま	～オール電化厨房が守る"名古屋めし"秘伝の味～
株式会社モビリティランド鈴鹿サーキットさま	～安全性、快適性、環境性を追求! 国際サーキットの"オール電化厨房&E空調"～

出展企業・団体

株式会社アイエアイ　株式会社アイギ　愛知金属工業株式会社　愛知電機株式会社　株式会社AIHO　株式会社堀田工業社 名古屋支店　有限会社アール・シー ウメハラ　株式会社アンナカ　株式会社アンサル 名古屋営業所　伊藤工機株式会社　ウエットマスター株式会社　荏原実業株式会社

荏原冷熱システム株式会社　株式会社エフ・エム・アイ　株式会社エル・エヌ・ジー中部　一般社団法人エレクトロニクス・ヒートセンター　大蔵商事株式会社　株式会社大林組　押切電機株式会社　オムロン株式会社　オリオン機械株式会社　鹿島建設株式会社　河村電器産業株式会社　川本工業株式会社

北沢産業株式会社　木村工機株式会社 名古屋支店　共立電気計器株式会社　株式会社ケーイーコーポレーション　株式会社神戸製鋼所　コサカ精機株式会社　株式会社コメットカトウ　サクラ精機株式会社　株式会社サワヤ　三機工業株式会社 中部支社　株式会社三輝商事　三洋電機産業システム株式会社

三洋電機販売株式会社　三和製理工業株式会社　共立電気計器株式会社　GEセンシング・ジャパン株式会社　JX日鉱日石エネルギー株式会社　株式会社シーエナジー　試作サポーター四日市　株式会社シーテック　島田理化工業株式会社　清水建設株式会社　昭和鉄工株式会社

新晃工業株式会社　新菱冷熱工業株式会社　住友スリーエム株式会社　セキラルヒートポンプ工業株式会社　株式会社大気社　株式会社大成温調　ダイキン工業株式会社　ダイダン株式会社 名古屋支社　大成建設株式会社　中電不動産株式会社　株式会社大同　株式会社ダイハン　高砂熱学工業株式会社 名古屋支店

高橋金属株式会社　株式会社たかふね工業　タクボエンジニアリング株式会社　株式会社竹中工務店　タニコー株式会社　NPO法人 地中熱利用促進協会　株式会社中電オートリース　中電興業株式会社　株式会社デンソー中部　東海コンクリート工業株式会社　株式会社東芝（東芝グループ）　東静電気株式会社

中部電力株式会社 環境部　中部電力株式会社 関連事業推進部　中部電力株式会社 技術開発本部　中部電力株式会社 広報部　株式会社中部プラントサービス　株式会社テクノ中部　株式会社テクノ菱和　株式会社テックコーポレーション　株式会社中西製作所 名古屋支店　ニチワ電機株式会社　日管株式会社　株式会社日建設計　日東工業株式会社

株式会社東洋製作所　株式会社トーエネック　株式会社戸上電機製作所　特殊電極株式会社　株式会社トヨコー　トヨタ車体株式会社　ナカダ産業株式会社　日本ヒーター株式会社　日本ペイント株式会社　日本ワイドクロス株式会社　株式会社ノリタケカンパニーリミテド　服部工業株式会社

日本アキュムレータ株式会社　日本ガイシ株式会社　有限会社日本建装工業　株式会社日本サーモエナー　日本洗浄機株式会社　日本製理機株式会社 中部支店　日本電熱株式会社　日本ヒーター株式会社　日本ペイント株式会社　株式会社フジマック　ホシザキ東海株式会社　株式会社ホソカワ　株式会社マイセック

パナソニック電工百日市株式会社　パナソニック・ヘルスケア・プライフソリューズ株式会社　浜松ヒートテック株式会社　日鐵電機株式会社　株式会社日立製作所（日立グループ）　株式会社ヒーバックシステム　福島工業株式会社　富士電機システムズ株式会社　株式会社フジマック　三菱電機住環境システムズ株式会社　三菱電機ビルテクノサービス株式会社　三菱レイヨンエンジニアリング株式会社

株式会社前川製作所　株式会社マテリアルハウス　株式会社マルゼン 名古屋支店　三浦工業株式会社　三菱重工業株式会社　三菱重工空調システム株式会社　三菱重工冷熱システム株式会社　三菱電機株式会社　財団法人 中部電気保安協会　岐阜県　三重県

■後援／経済産業省中部経済産業局、国土交通省中部地方整備局、環境省中部地方環境事務所、愛知県、静岡県、三重県、岐阜県、長野県、名古屋市、電気事業連合会　■協賛／中部エネルギー・温暖化対策推進会議、社団法人日本冷凍空調学会、社団法人日本建築学会東海支部、社団法人空気調和・衛生工学会中部支部、中部冷凍空調協会、一般社団法人日本エレクトロヒートセンター、中部電気工事協力会連合会、社団法人日本土木工業協会中部支部、社団法人建築設備技術者協会中部支部、財団法人省エネルギーセンター東海北陸支部、社団法人愛知県栄養士会

雑誌　03379-8